

優しい建築とともに With gentle architecture

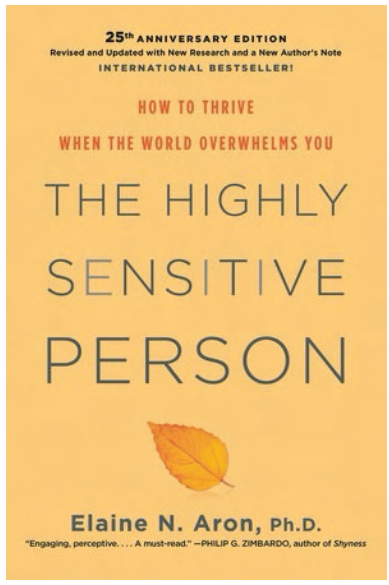
— 布建築による H S P 特性を包み込む心理的空間 —

街中の人々が行き交う場所に突如現れる。

立ち止まって存在を確かめている人、まるで存在していないかのように通り過ぎる人、恐る恐る中に入って行く人。

誰もが必要ではないかもしれない。でも誰かにとってはきっと必要な存在となる。

1. H S P 特性について



「The Highly Sensitive Person」(改訂版)※1

アメリカの心理学者 エイレン・N・アーロンにより提唱され、全人口の15～20%の割合でこの特性を持っているとされている。

H S P の四大特性 = DOES

- ・D (Depth of processing : 深く処理する)
- ・O (Being easily Overstimulated : 過剰に刺激を受けやすい)
- ・E (being both Emotionally reactive. Generally and having high Empathy in particular : 全体的に感情の反応が強く、特に共感力が高い)
- ・S (being aware of Subtle Stimuli : 些細な刺激を察知する)

H S P は生まれ持った気質であり、生得的な特性として脳内で感覚情報を

処理する過程において個人差があり、特に S P S (感覚処理感受性) が

高いとされている。S P S が高いと繊細な感覚を持ち、

容易に刺激過剰になるためストレスが蓄積されやすく、

精神的健康や主観的幸福感の低下につながり自尊心が低くなる可能性がある。

※1) 出典 : The Highly Sensitive Person(<http://hsjk.life.coocan.jp/book-hsp.html>) 2024-02-02 閲覧

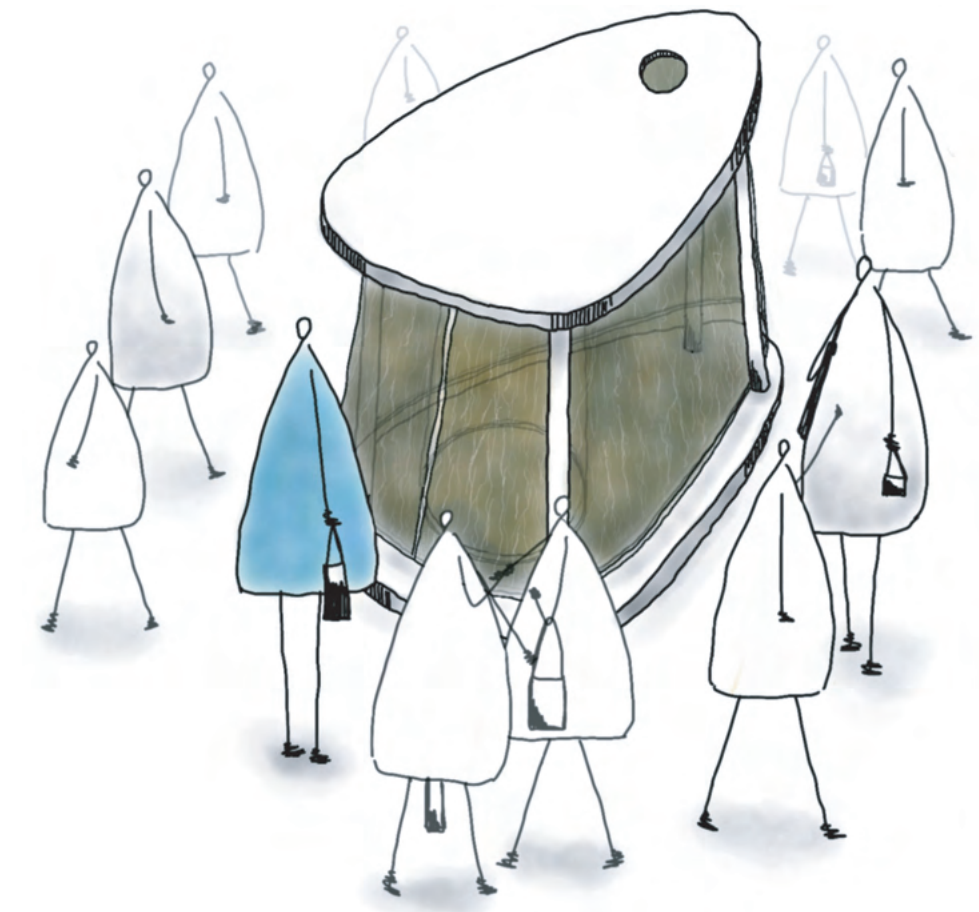
6つの space story

a 休息と距離

rest and distance

外の世界との距離を保ち休息を取る。
自分のための場所。そして自分のための時間。

自己 ← ● → 他者



歩いているとふと布に包まれた建築が姿を見せた。
揺れる布に惹かれながら私は中へと入っていった。

外と隔てる壁は厚く布建築は私を守ってくれる。

風によって揺れる布の壁が時折肌に触れる。

誰もいない自分だけの世界となり、
少しずつ肩の荷が下りるように自分に伝える。

"十分頑張っているよ、大丈夫"

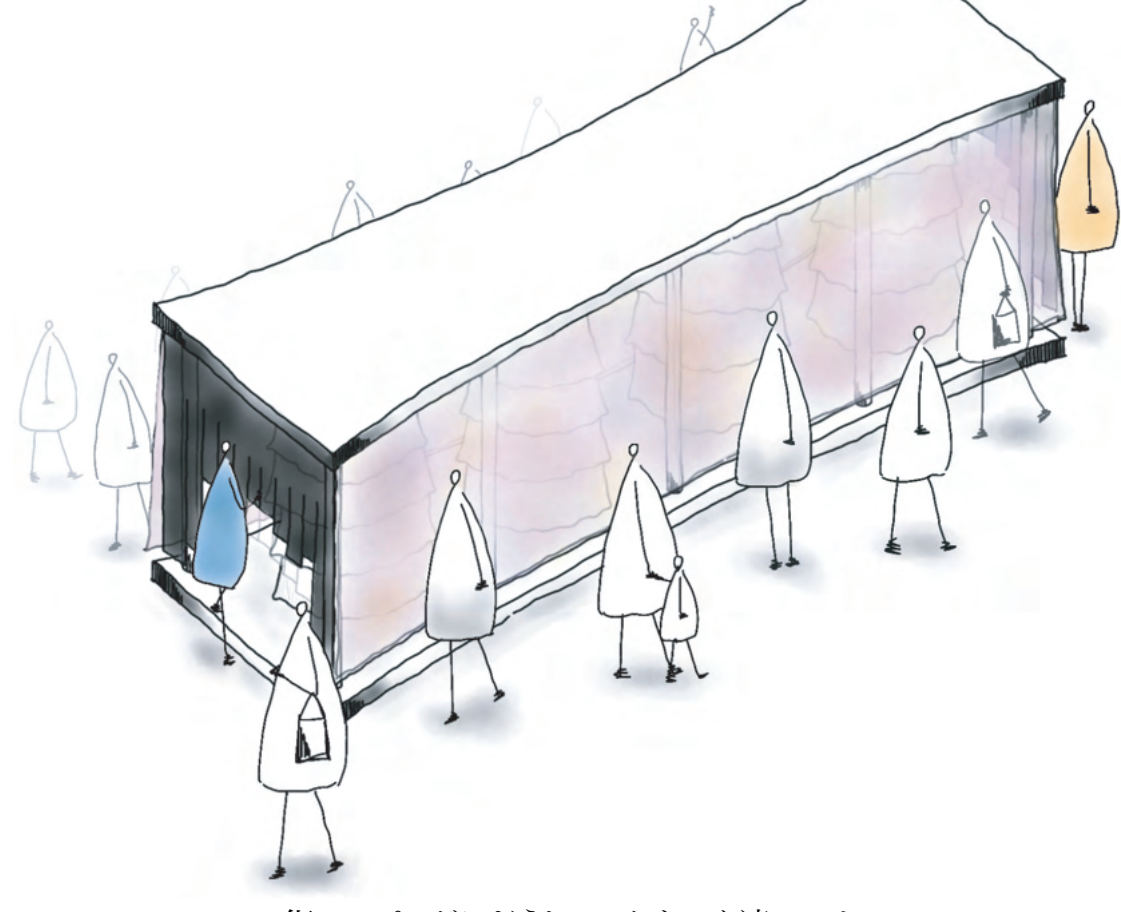
自分にそっと伝える言葉はいつもより優しさを包んでくれていた。

b 感情の居場所

place of emotions

街中の刺激から離れ一度立ち止まる。
ゆっくりと流れる時の中で感情と向き合う。

自己 ← ● → 他者



街のスピードはどうしてこんなにも速いのか。
立ち止まることを許してくれないくらいに、人々は進むことを止めない。
街に現れた4つの布建築は表情を変えることなく同じ場所に居続ける。

誰かを待っているように。

眺めていると誰かが空間へと入っていった。誰も気に留めないくらいに自然で、
時には休んでもいいと言ってくれているような優しさを感じた。

街を歩いているとふと柔らかい布が視界へと入ってきた。風で揺れる姿は
とても自由で、心地よさを覚えると同時に羨ましく思えた。

360度布に包まれた空間は嫌なく優しくかった。

何にも強要されずゆっくりと時間が流れ、自分の中から感情が
溢れ出してきた。そして少しの時を過ごし感情たちは自分の中で整理され、
それぞれに居場所を与えられた気がした。

c 思考(感情)との距離

distance from emotions

いつも頭の中には沢山の感情が溢れる。しかし時に感情の棚が
溢れ、自分を保つことが不可能に陥る時がある。

自己 ← ● → 他者



街中の速度を進んでいた私は足が止まった。

目の前に布に包まれた布建築が静かに佇んでいる。

いつの間にか中へと足を進めていた自分は、
感情をモチーフにした空間を映像を見るように眺めていた。

柱がその時の自分を映し出しているかのように思えるが、

決して空間の影響を受けることはない。

ただそこに存在しているだけである。

全ての空間を見終わりほっと息をすると、
自身の感情が体を巡った時にほんの少しの距離を持ってば、
自分を保つことが出来るのかもしれない。
そう言われているような気がした。

d 静寂とつながり

connection with silence

静寂の中に他者との繋がりがある。
自分の中にそっと外の世界を入れてみる、少しずつゆっくりと。

自己 ← ● → 他者



人にはそれぞれの領域があり、それは決して強要できるものではなく
互いの間で理解し合う必要がある。

違う特性を持った空間が隣同士で存在している。空間内には

それぞれの時間が流れ、互いが視界に入ることはない。

しかし他者との繋がりは完全に無くしてはいない。

腰を下ろしながらふと隣を見ると、ほんの少し隣同士を隔てる布が無かった。

そして誰かの存在を感じた。

街の中に存在するこの静寂な空間では、互いの持つ世界を尊重する。

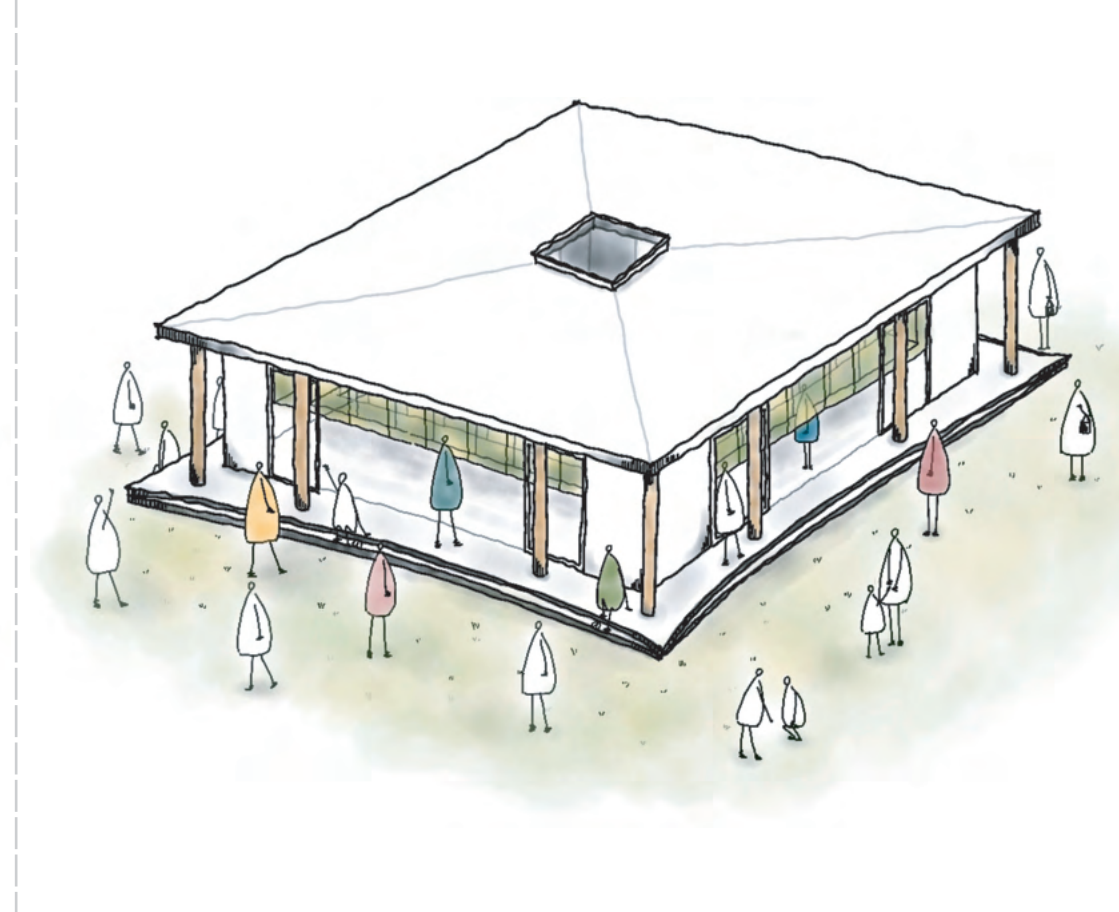
言葉や表情ではなく、空間同士がそれぞれの世界に浸りながら。

e 心の柔軟性

flexibility of mind

受け入れることの難しさを抱えながら、今日も過ごして行く。
このもどかしさはいつになったら消えるのだろうか。

自己 ← ● → 他者



人が行き交う公園にぼつんと姿を見せる。

中には様々な布が表情を見せながらが層となり、空間となる。

私たちはそれぞれの場所で個々の時間を過ごす。

座りながら空を眺めている人、隅で読書をしている人、

会話せずとも隣同士で腰を下ろしている人、

周りを見れば思い思いの過ごし方がある。

誰も強要する人はいない。互いの存在を感じながら私たちは受け入れる。

風や人が通るたびに揺れる布は自由で、私たちの心を柔軟に溶かす。

この場所に居たら他者にも自分にも優しくなれる、

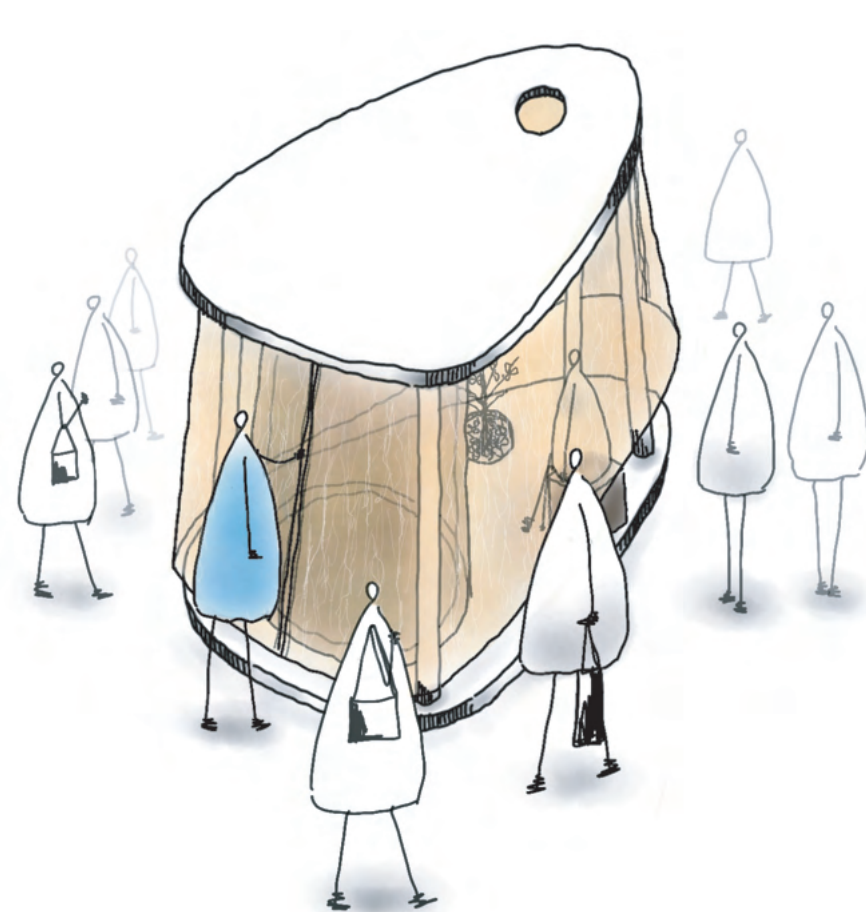
私は私のままでいい。そう思えた。

f 自己と優しさ

seld and kindness

優しさを自分に向けることはあるのだろうか？
他人に優しくありなさいと言われてきた日々は、
疑うことなく、自分に向けることはなかった。
そしてある時に自分は誰のために過ごしているのかと気づく。

自己 ← ● → 他者



急足で歩いているとふと布建築が見えた。

いやもしかするとずっと見えていなかったかもしれない。

何枚にも重ねられた布は色んな表情を見せる。

柔らかく招いているかのように、足がその先へと進んだ。

肌に触れる布たちは身体を優しく包み、布から見える

外の景色はぼやけながらも人々の過ごす時間が見える。

もう少しここに居ようかな。

そう思いながら自分の胸に手を当て時間を過ごした。

外かどうしても綺麗に見えることもある。

でもたまには自分を大切に生きていきたい。

外へと出た自分は少し優しくなれた気がした。

2. H S P 特性を包み込む心理的空間

H S P とは繊細であるがゆえに様々な環境に対して疲弊することが多い。また繊細さを短所と捉え生きづらさを抱えている。

しかしその繊細さは時に長所となり見方を変えれば幸せに生きていくための大きな力ともなり得る。

そのためには生まれ持った気質を克服すべき課題として捉えるのではなく良いものとして考える必要がある。



繊細な気質により H S P が社会活動を行っていく上で、困難な場面に陥ると想定される場面をあらかじめ想定し、
物理的に予防する休息空間建築を街中に配置すると共に、自身と向き合っていく建築からのアプローチを行う。

一時的な視覚の抑制・パーソナルスペースの確保 + 新たな公共空間での過ごし方の提案

空間構成の素材に布を使用することにより、視覚的に外環境と柔らかく分断しながら繋がりを持たせ安心感を生み出す

建築の要素と布の役割要素を合わせた布建築空間の設計 を行う

配置場所: 家と目的地の間にある不特定多数の人が集まる比較的刺激過多に陥る街の要素をピックアップし、心理的空間を配置する。

五つの街の要素 ・駅の改札口前 ・歩道 ・ショッピングモール前の広場空間 ・歩道橋 ・大公園

街の要素ごとに様々なストーリー完結型の空間を6つ用意し、体験しながら自身に優しさを少しずつ渡していく。

社会の要素の中に空間を組み込むことで、自身以外の特性を理解しながらも一人一人が自身と向き合える空間・時間を提供すること
誰もが自身に優しさを向けられるようにすることを最大の目的とする。

3. 布建築 / nuno architecture

布建築 = 布に包まれた建築

nuno architecture

architecture wrapped in cloth

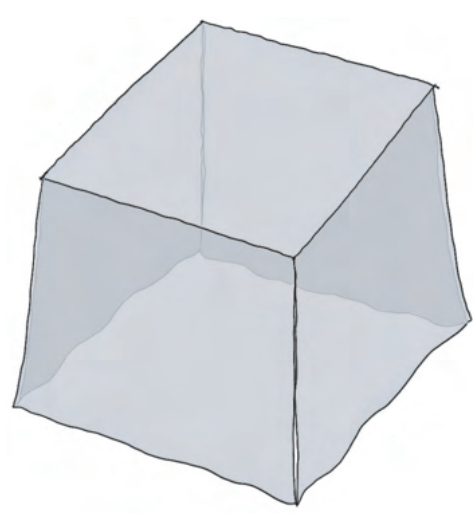
architecture

nuno

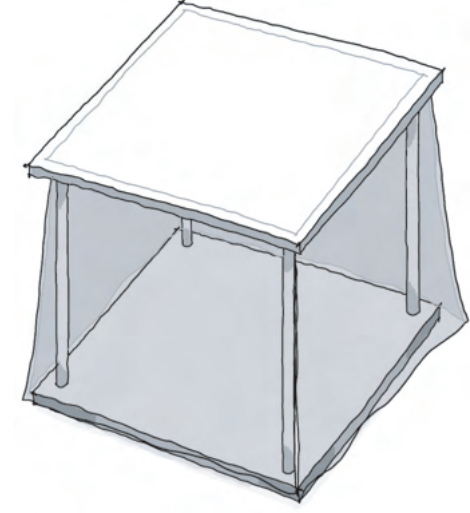
nuno architecture



+



=



要素

屋根・柱・基礎・レール

壁・空間認識

相互の要素が互いに支え合い成立する

architecture では、建築の基盤を作り支える役割を担う。

nuno では、自身を守りながら人々を繋ぐ壁の役割を担う。

空間ごとに異なる素材を使用し、自由自在に空間に様々な変化をもたらす。

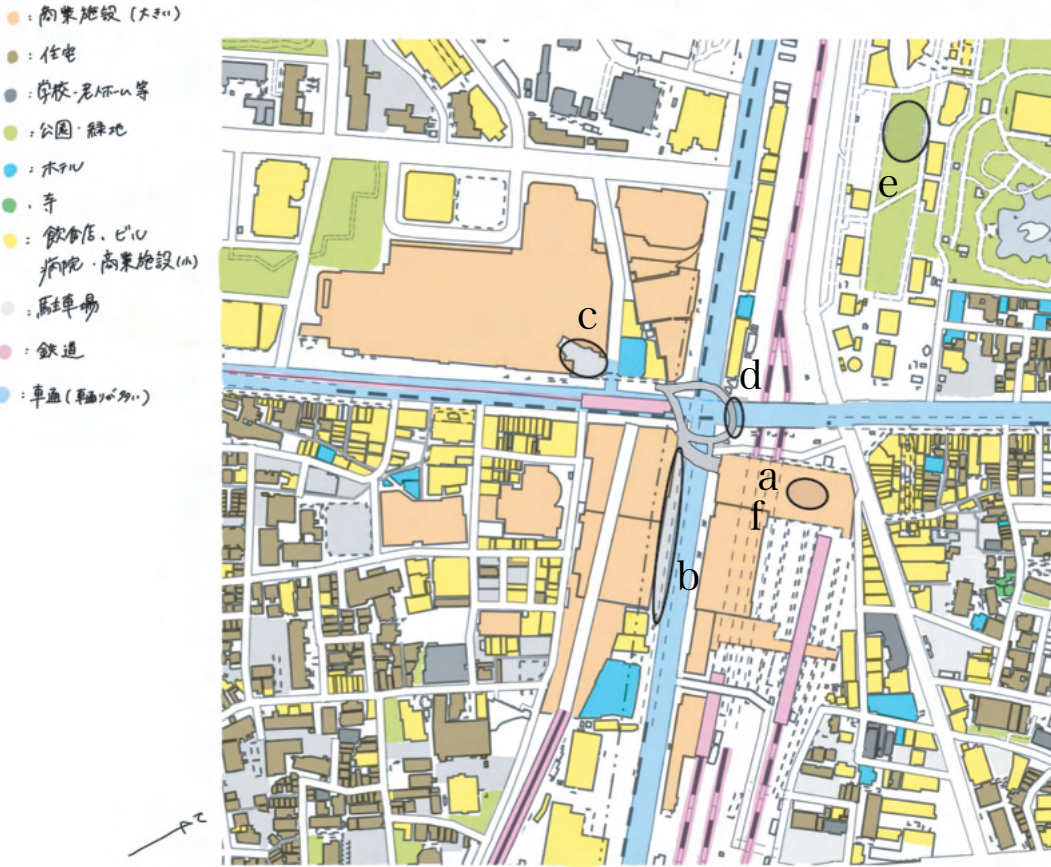
4. site

想定通行量と人の流れや街の要素詳細の考察を基に、
建築スケール・使用過程の想定ストーリー構成の決定
要素とするため、街の要素の中に設置を想定した1番
適している仮敷地を選定した。
常時建築として存在するため、布が外部環境の影響を
受けにくくさせるため、室内または半屋外空間(屋根
あり)とし、それぞれの持つストーリーに基づき決定
した街の要素の中に配置していく。



仮敷地:
大阪市天王寺区
天王寺駅周辺

天王寺ターミナルでは JR・近鉄・地下鉄(谷町線)が集結しており、
付近に高層ビル街や商業施設・動物園や美術館や天王寺公園がある
ため人々の活動の拠点にもなっている。聖徳太子の開建にあたる四
天王寺など多くの社寺が残り、病院も数多く存在している



a: 駅の改札口前(屋内) b: 歩道(半屋外) c: ショッピングモール前の広場空間(屋内)
d: 歩道橋(半屋外) or 広場空間(屋内) e: 大公園

a・f: JR 天王寺駅中央改札口前 b: 近鉄と JR を繋ぐ歩道 c: あべのキューズモール地下一階に
位置する入口前の広場空間 d: 全ての商業施設を繋ぐ大歩道 e: 天王寺芝生公園内にある大空間



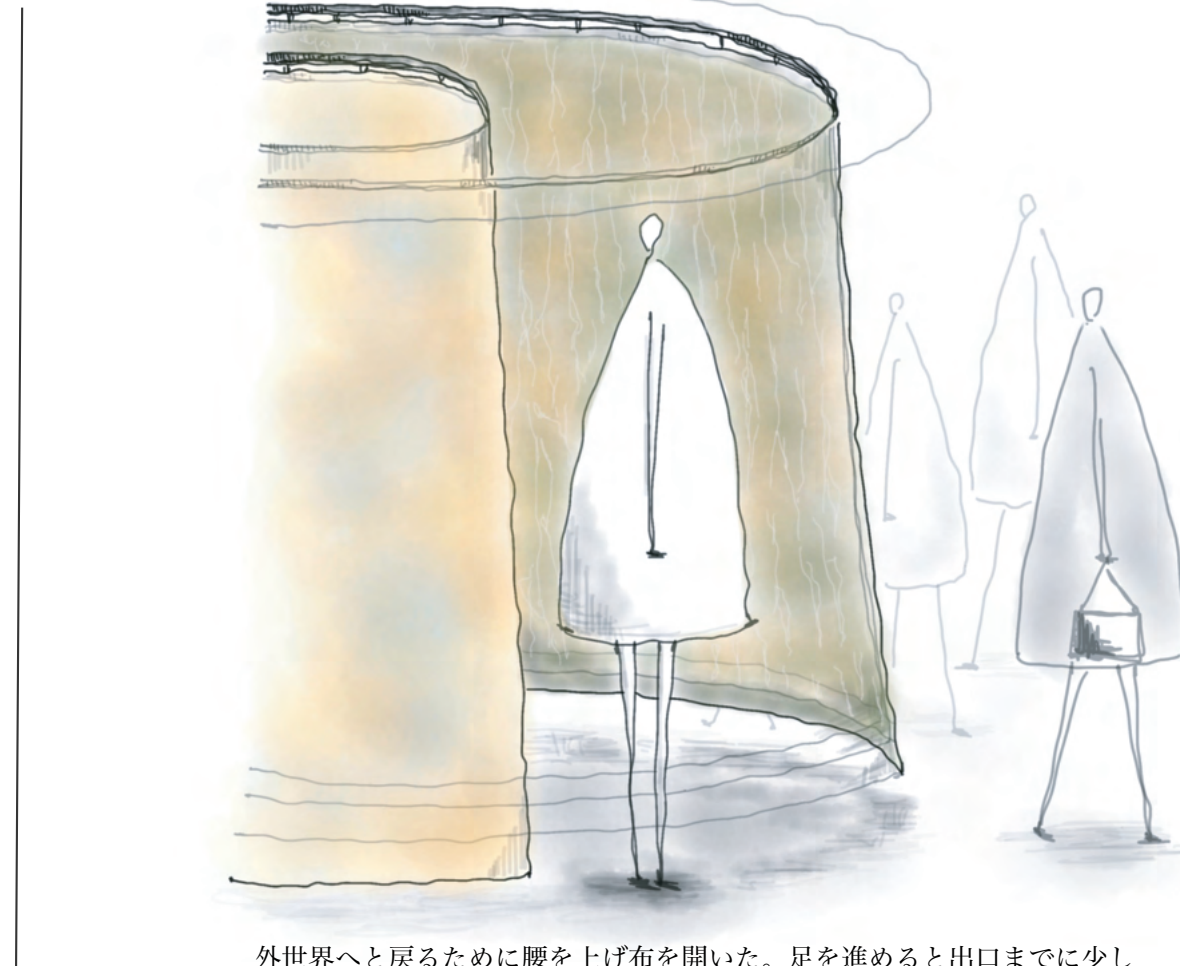
I
街の中にふと現れたように感じた存在。何故か今日はよく見える。
人々が通り過ぎて行く中で私は前に進むのを止めた。
柔らかく包まれた存在に触れたいと思った。



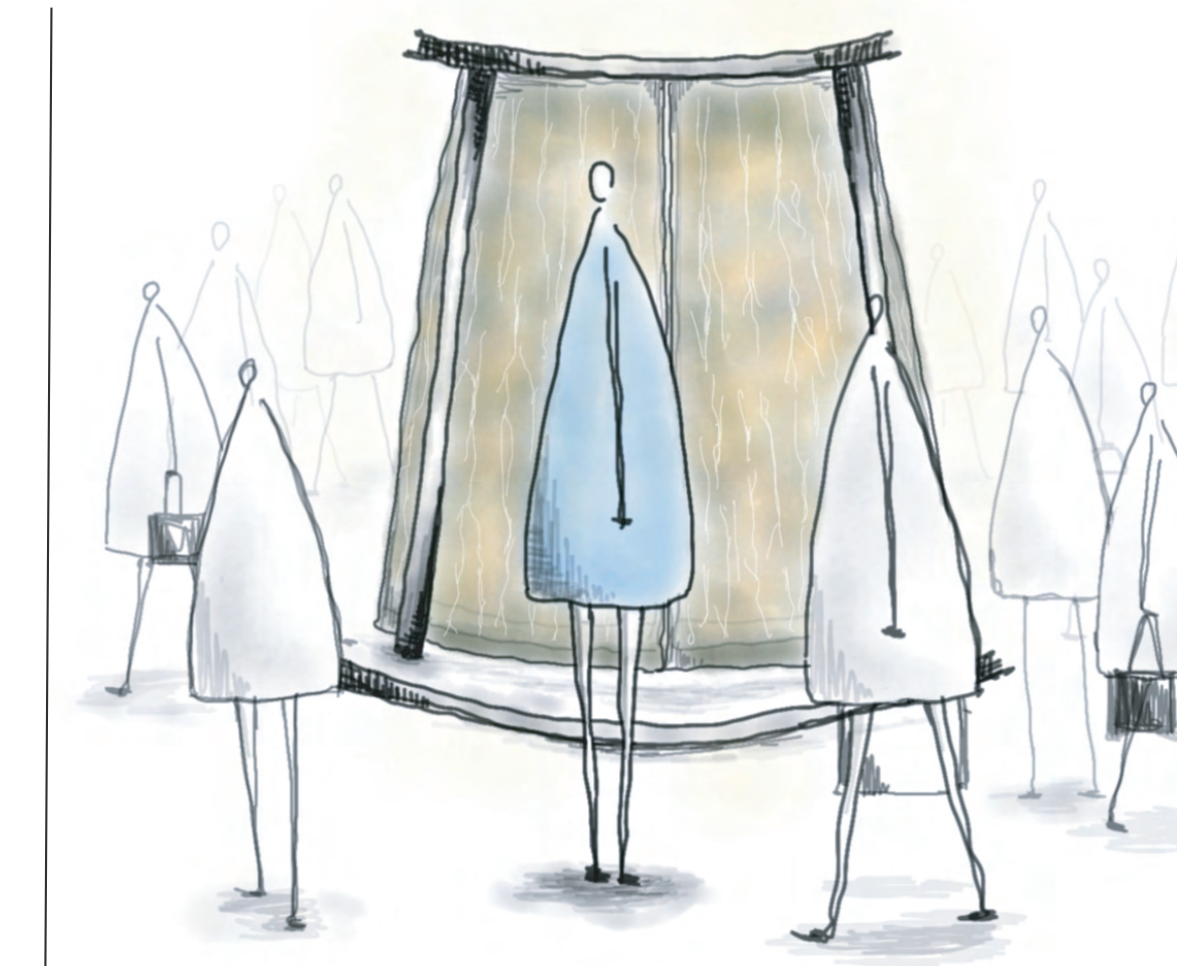
II
これは入口なのか？よく見てみると布の先には椅子が置かれている。
中に入るための布に触れると、それは柔らかくてそれは心地良かった。
そして知らぬ間に中へと足を進めている自分がいた。



III
布を開けた瞬間あたり一面布で包まれていた。腰を下ろすと外世界から切り離されたような気がした。誰もいない自分だけの世界。
それはずっと前を進んできた自分にとって、時には休んでもいい。
そう言ってくれているような気がして、心に少し余裕が生まれた。
ずっとそう言ってくれることを待っていたのかもしれない。そう感じた。



V
外世界へと戻るために腰を上げ布を開いた。足を進めると出口までに少しの空間が存在している。周りを見渡すと人々の歩く姿がぼやけながらも見えた。布をかえしながら見る外世界は自分との距離を保ってくれていた。
そして最後に深呼吸をし、また歩いていこうと思った。

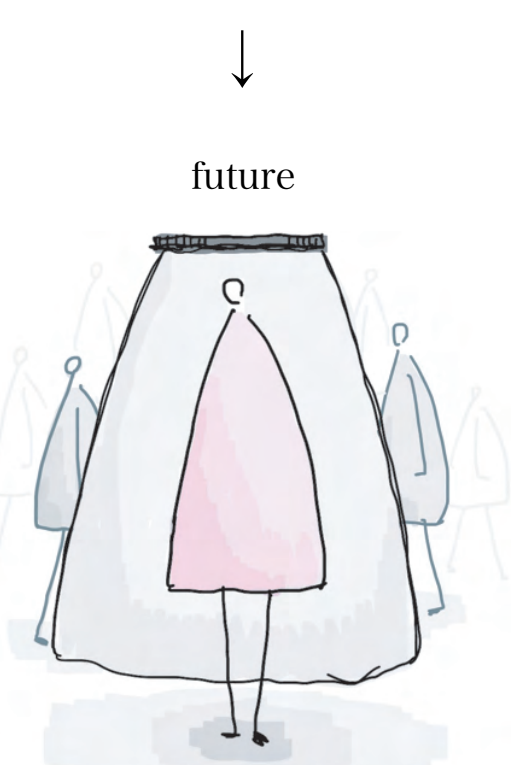


VI
最後の布を開け外世界へと足を踏み入れた。後ろを振り返ると布建築は人々が側を通るたびに、表情を変えながらもただ存在していた。
いつでも戻ってきていいとも言うように。

Program

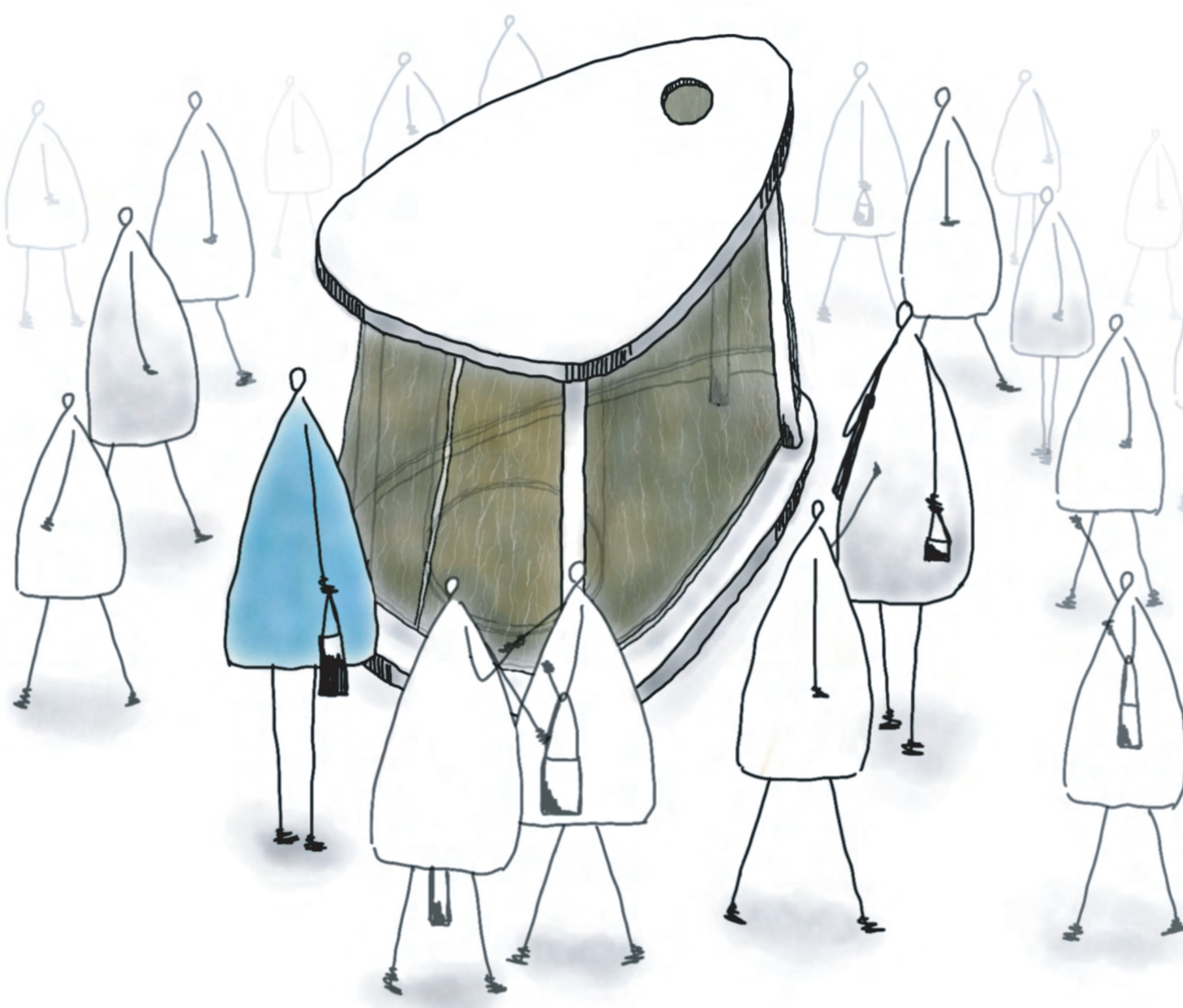


街中では様々な刺激が存在しており、受けすぎると心身ともに疲弊する。
外世界で刺激から守れる場所はほとんど見当たらない。

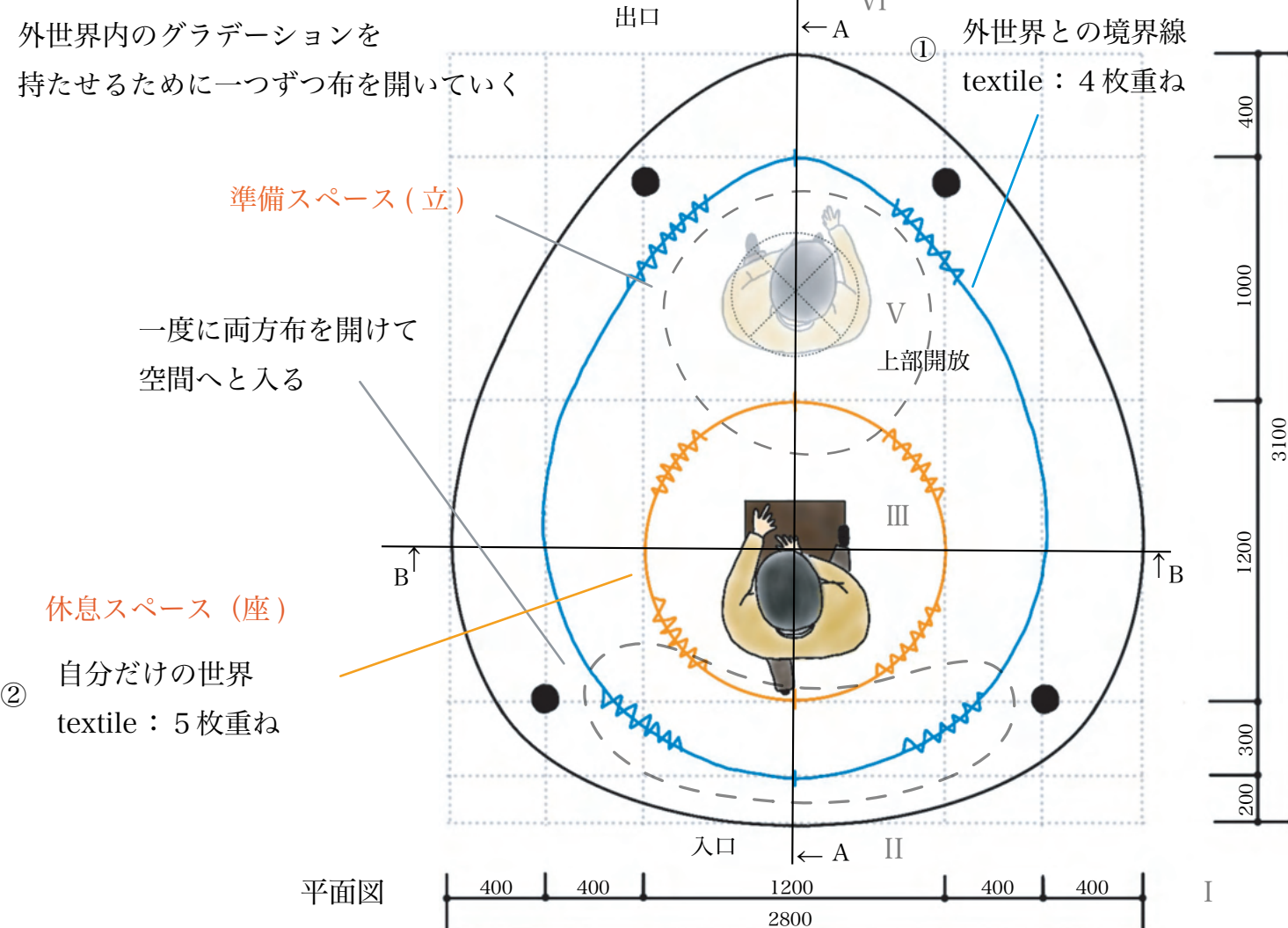


街中に身体を包む布建築空間を配置。
一時的に外世界から距離を置き、
心身ともに休息を取ることが可能な空間を。

a 休息と距離
rest and distance

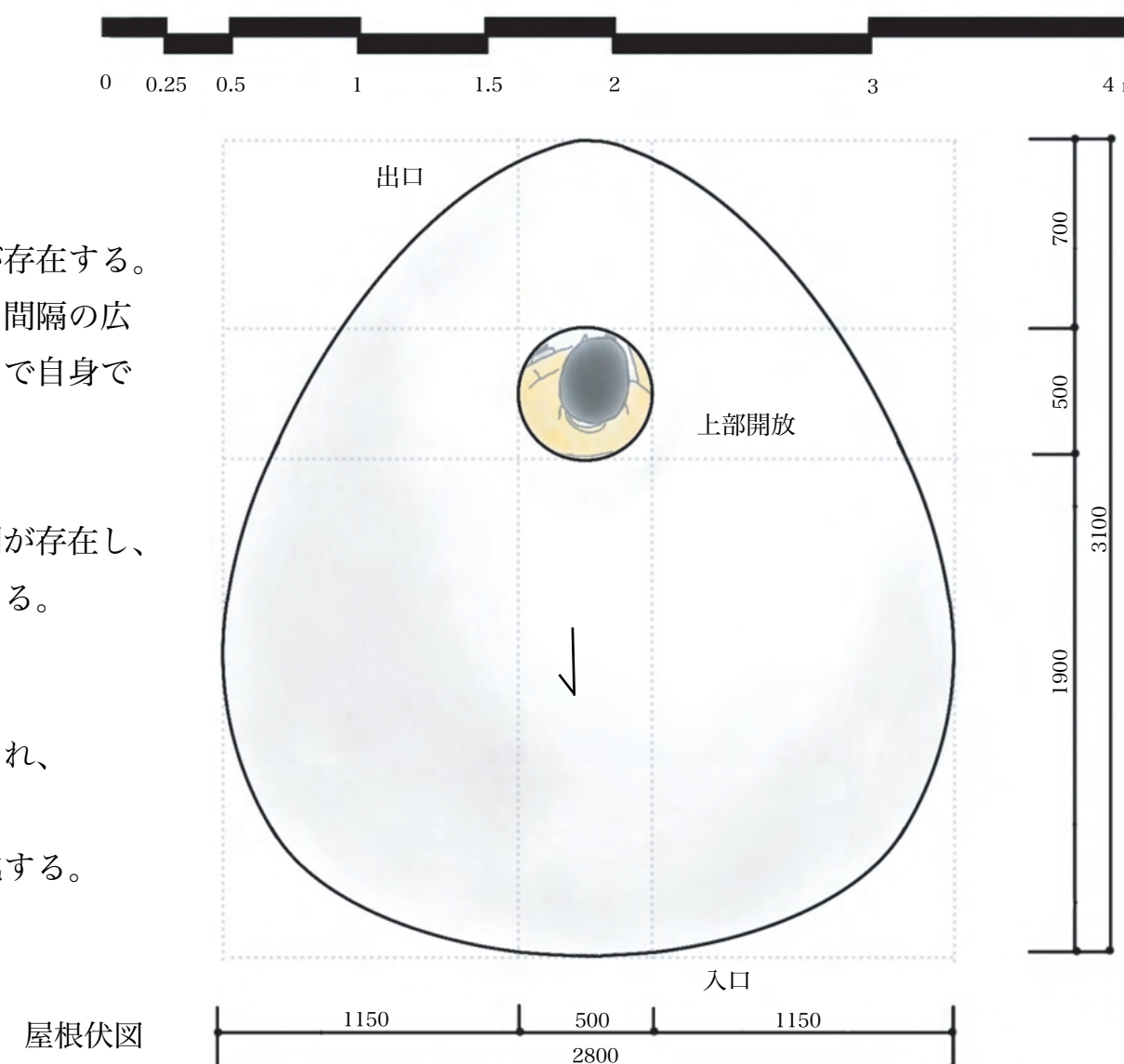


Space Plan

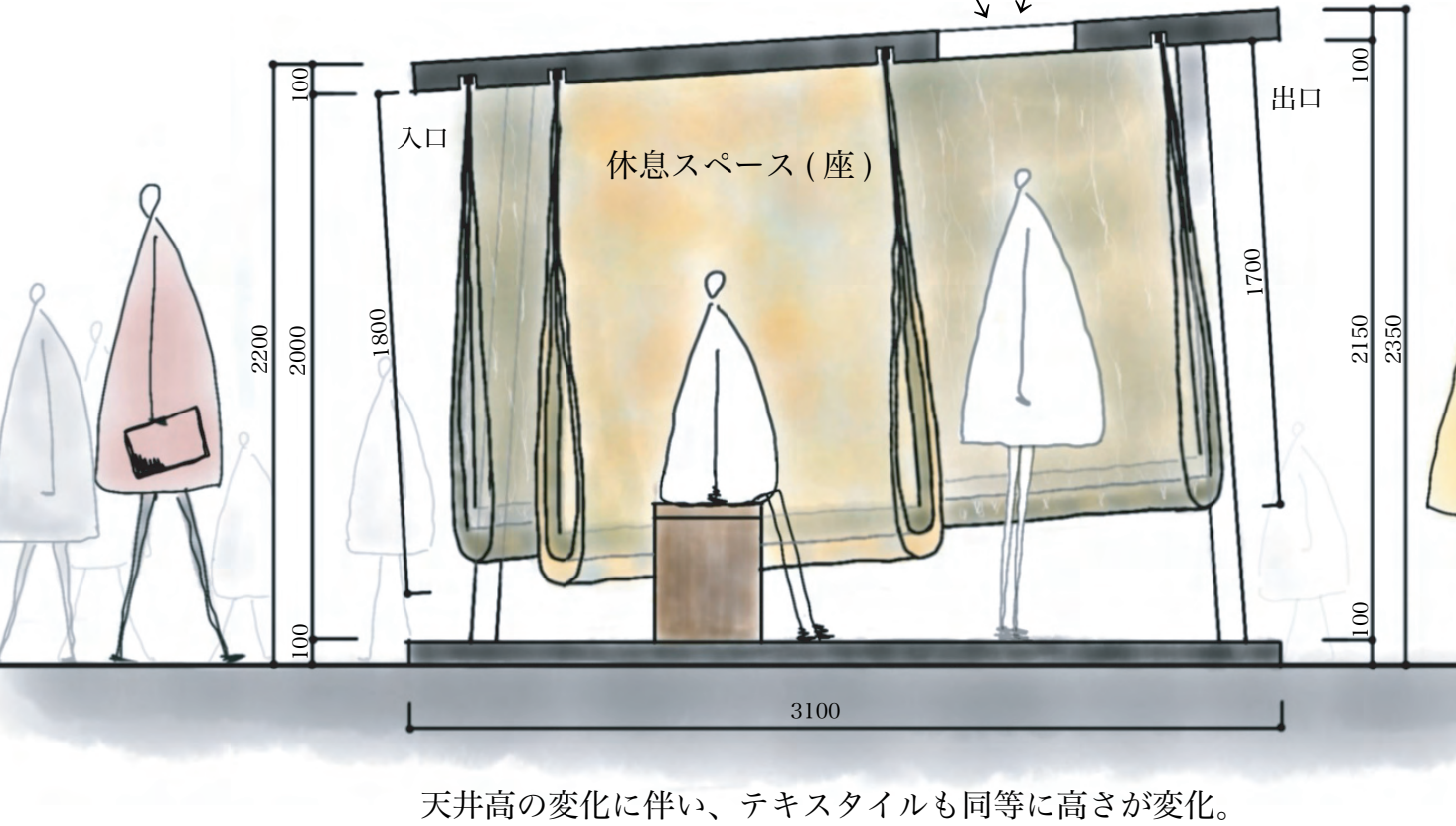


たまご型の平面に二層のテキスタイル空間が存在する。
4本の柱で構造とテキスタイルを支え、柱の間隔の広い方が入口で、中の二層目のテキスタイルまで自身で布を広げ空間へと入る。
空間内には“休息スペース”と外世界へ戻る“準備スペース”の2つの空間が存在し、休息スペースのみ空間内に椅子が置かれている。

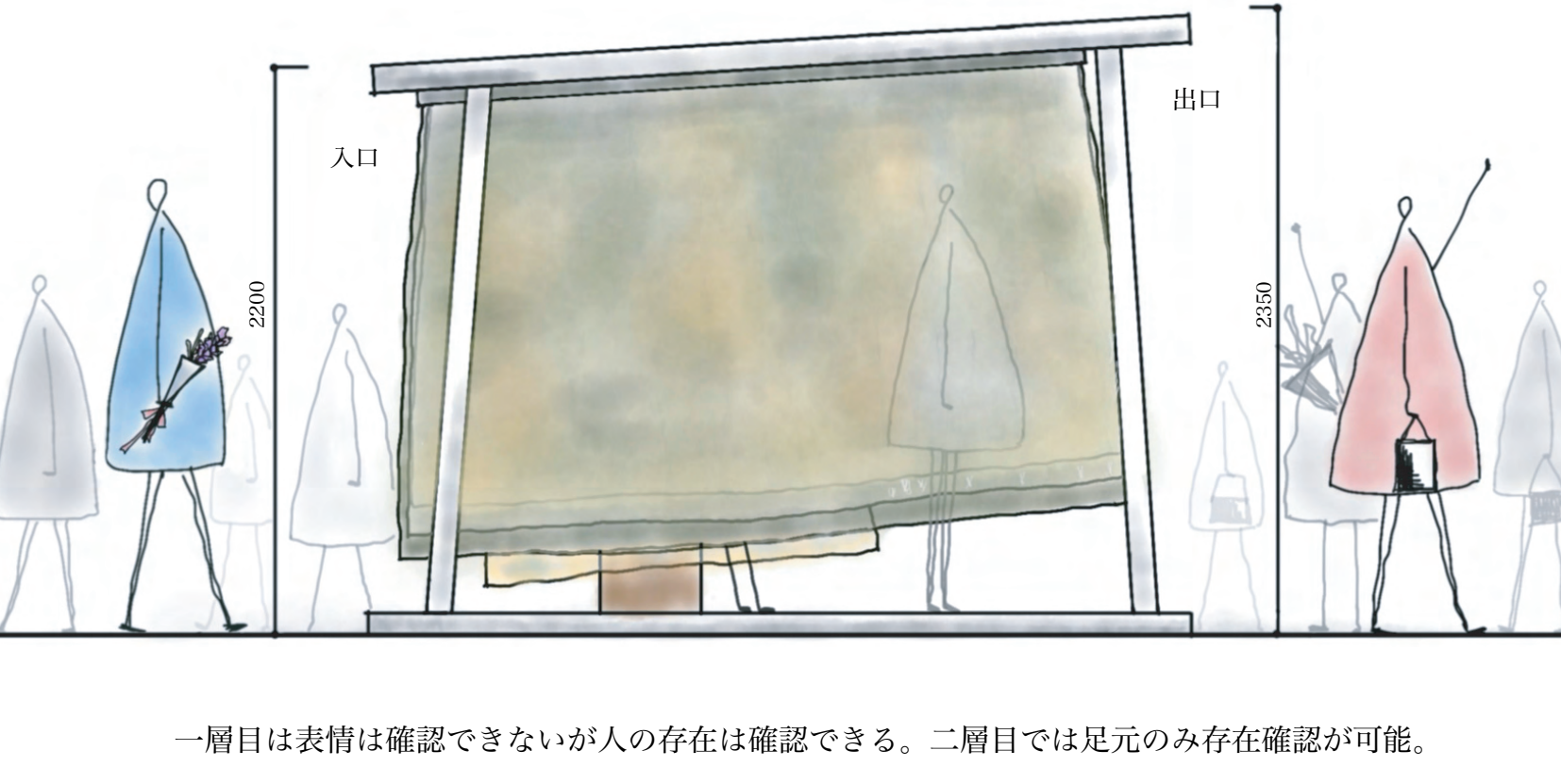
②出る準備スペースの上部には天窓が設けられ、外部の光が空間内へと降り注ぎ、入口から出口まで天井高が少し高くなり変化する。



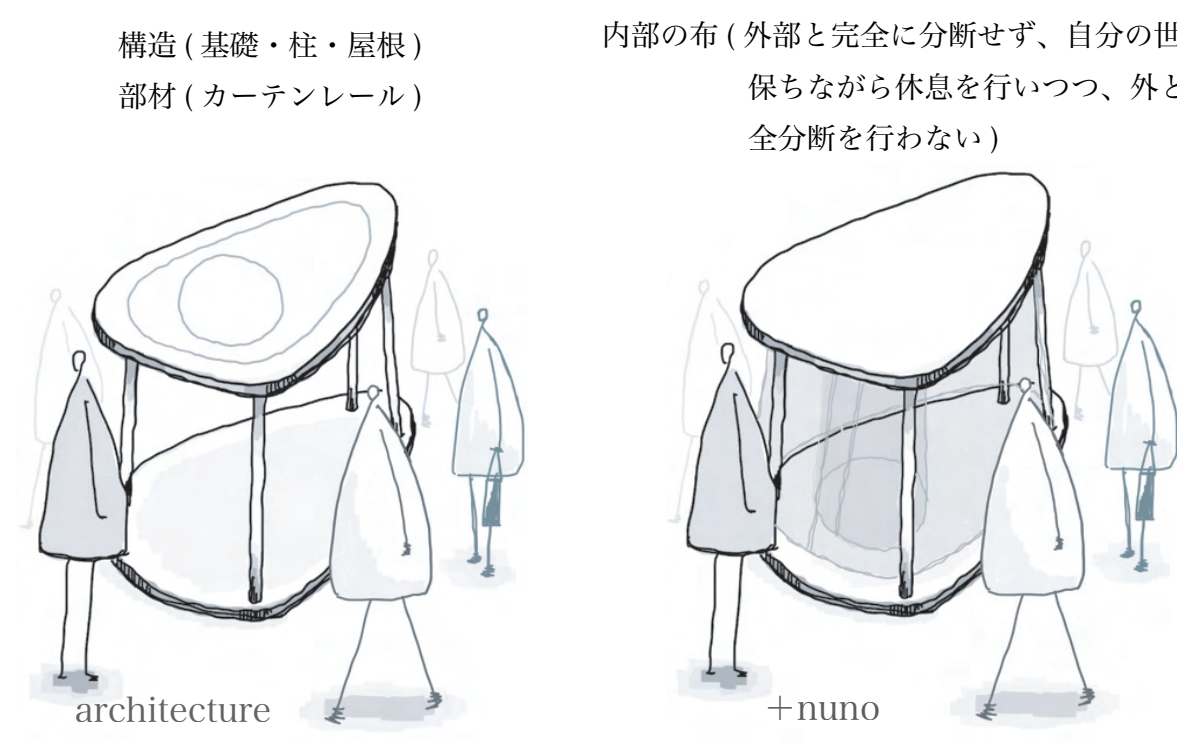
断面図A



立面図

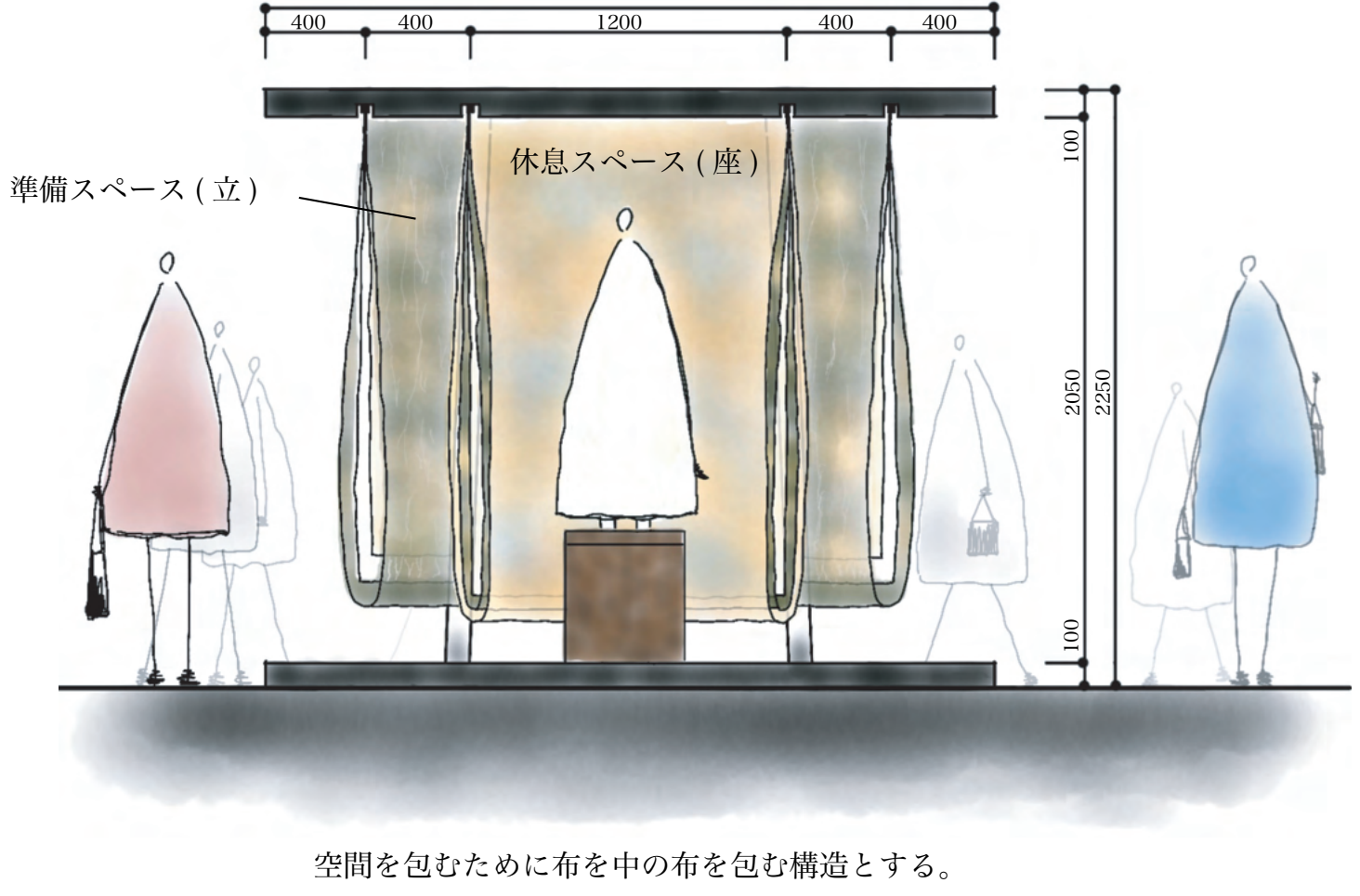


設計ストーリー

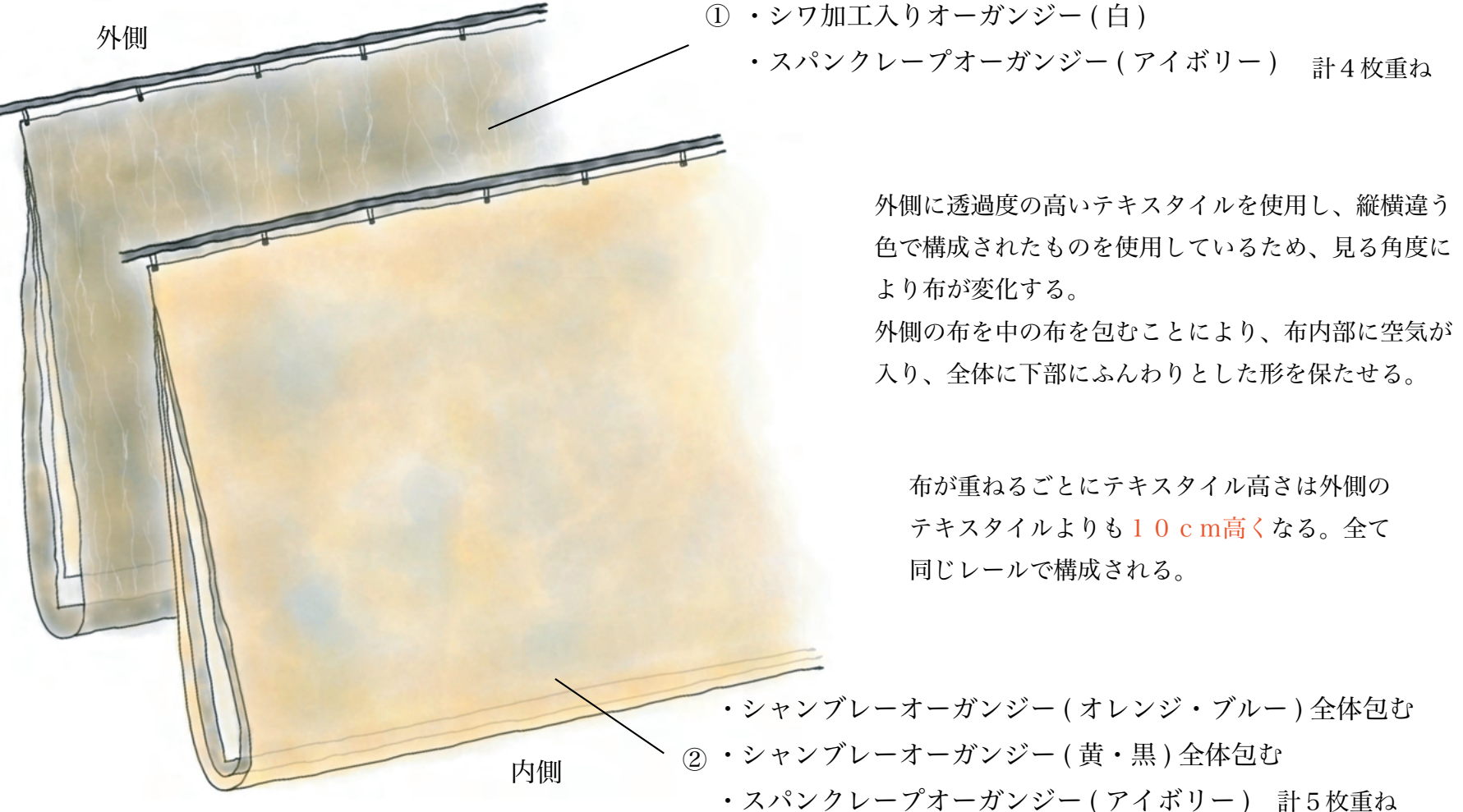


site：駅の改札口前
(立ち止まる人・進む人が混在し一時的に集まる空間)都心部に位置する10万人/日以上の利用駅とし、通行の妨げとならないように改札口から少し距離を保った人々が待ち合わせ場所とする3m×3.5mスペース確保が望めることが配置基準。

断面図B



テキスタイル詳細



- ・シャンブレーオーガンジー (黄・黒) 全体包む
- ①・シワ加工入りオーガンジー (白)
- ・スパンクレープオーガンジー (アイボリー) 計4枚重ね

外側に透過度の高いテキスタイルを使用し、縦横違う色で構成されたものを使用しているため、見る角度により布が変化する。
外側の布を中の布を包むことにより、布内部に空気が入り、全体に下部にふんわりとした形を保たせる。

布が重ねるごとにテキスタイル高さは外側のテキスタイルよりも10cm高くなる。全て同じレールで構成される。

- ・シャンブレーオーガンジー (オレンジ・ブルー) 全体包む
- ②・シャンブレーオーガンジー (黄・黒) 全体包む
- ・スパンクレープオーガンジー (アイボリー) 計5枚重ね

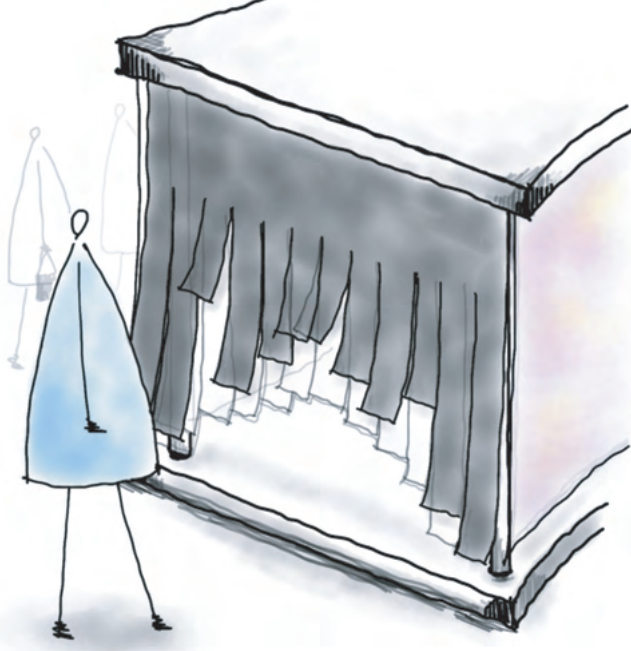
布の高さ

- ① 外側のテキスタイルでは足元での中の人々の存在確認を行い、使用可能かどうかの確認を行うために、足元上部から入口は30cm上げ、出口では起立状態での使用となるため45cm上部からテキスタイルが始まる。
- ② 内側のテキスタイル内では着席状態で空間を過ごし遮断効果を強めるため、外側のテキスタイルよりも布の高さが低くなり、足元上部から20cmからテキスタイルが始まる。

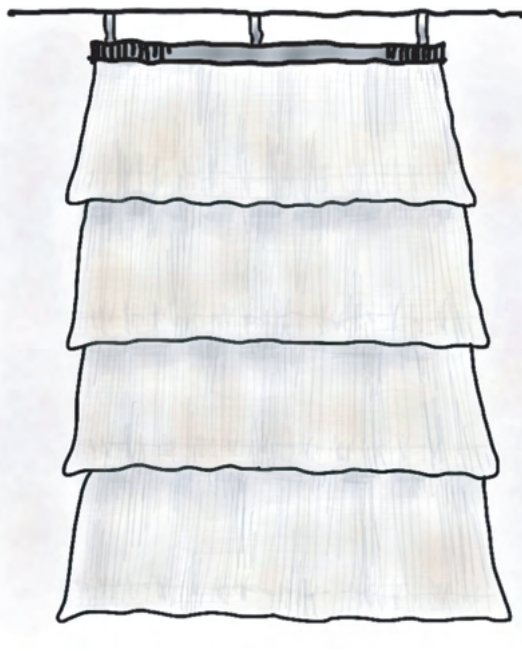
布の選定理由

外側のテキスタイルを外世界と分断するために無彩色に近い色彩と、空間に光を与える黄色が組み合わさるオーガンジーを使用。
① 外世界との境界線を持たせるためにシワ加工や透過度の低い凸凹表面のテキスタイルを中に入れることで、遠くから見た時により厚い壁を表現。

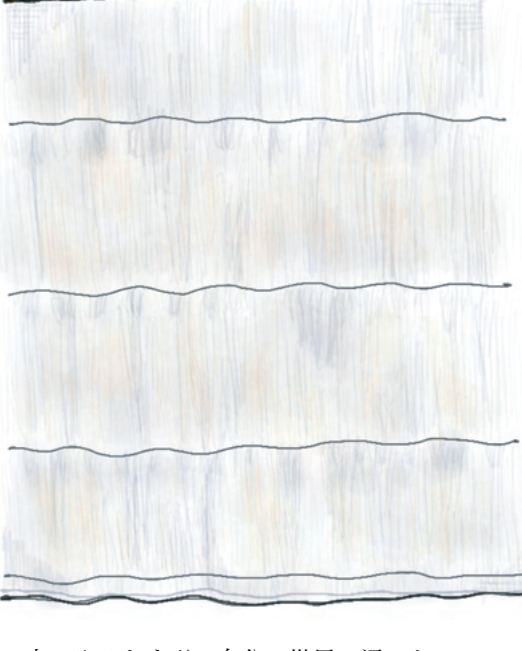
休息スペースとして少しの時間過ごすため、外側よりも空間に光を与えるため明るさのあるオレンジ×ブルーのテキスタイルで肌の外側を包む。そして外との遮断を図るためその中に外側に使用したオーガンジーと凹凸表面のテキスタイルを包み、分断を試みる。



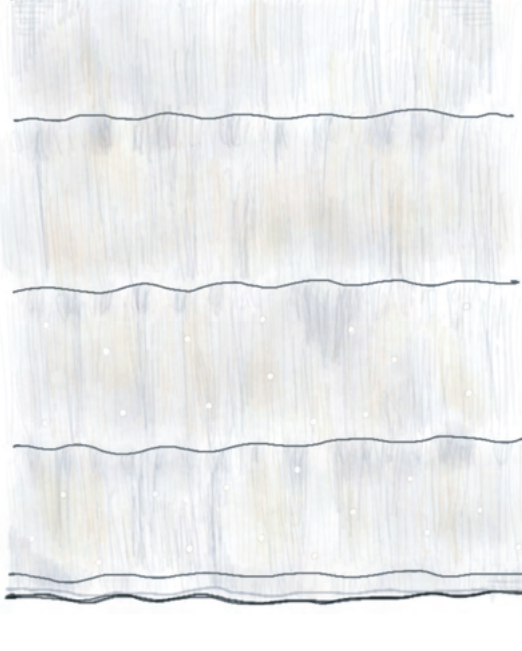
I
歩道を歩いているとふと目に入った。
風にやって揺れる柔らかい暖簾のような布は自分を
迎えられるかのように、様々な表情を見る。
少し入ってみようかと私は足を進めた。



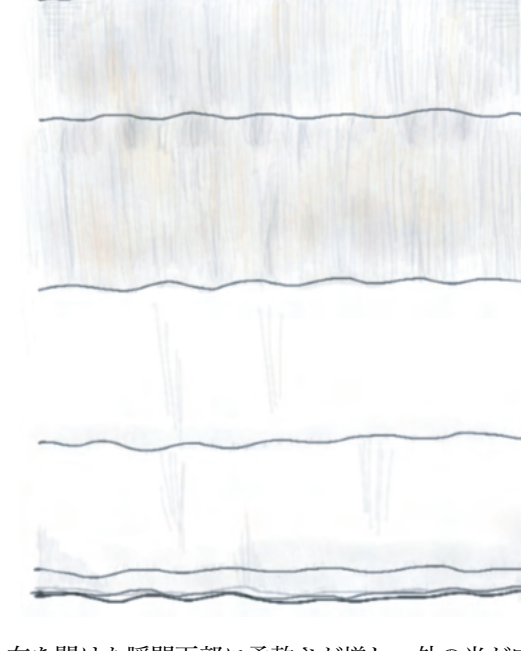
II
一つ目の布を開けた瞬間、
布で包まれた空間が私を待ち受けていた。
中の様子は分からない。でも柔らかく包まれた
空間は心地良く見え、私を中へと誘った。



III
中に入るとすぐに自分の世界に浸った。
周りの情報がない時間は私の心を落ち着かせてくれた。
そして少しずつ自分の中にある感情が姿を見せた。
自分の中にこんなに感情が溢れていたのか、
そう気づいただけで心にも静寂が訪れた。



IV
次の空間に入ると足元に少しの光が入ってくる。誰もいないこの
空間はまた自分の世界へと誘うように、自分の中の感情と向き合
う時間をくれた。記憶を思い起こしながら自分の感情を少しずつ
受け入れ、柔らかい布の間で見守ってくれていた。



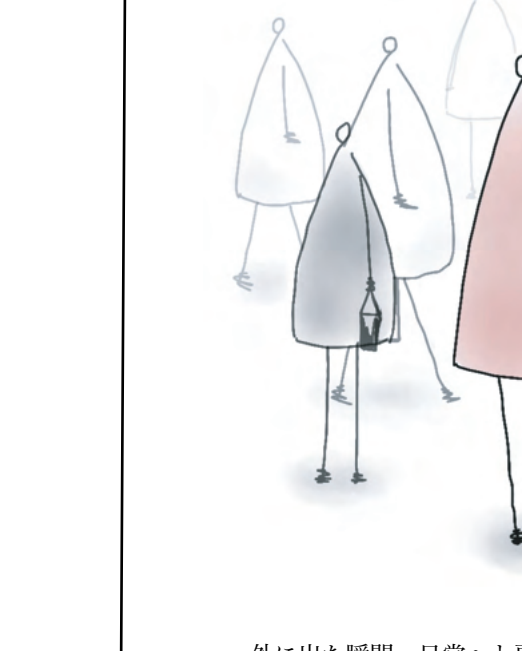
V
布を開けた瞬間下部に柔軟さが増し、外の光が内側にも
伝わってきた。少し時が流れるのを感じながら、感情の
先にある物語を振り返っていた。すると普段では忘れて
いた、感情の奥にある事柄の数々が整理され、線となり
腑に落ちたように心が軽くなった気がした。



VI
ここは最後の空間みだ。
360度柔軟な布へと変化した空間は、全体に外側の光が
布の壁を伝わって私に光を与えてくれた。少しの時を過
ごし、私は自分の中にある感情に居場所を与えた。

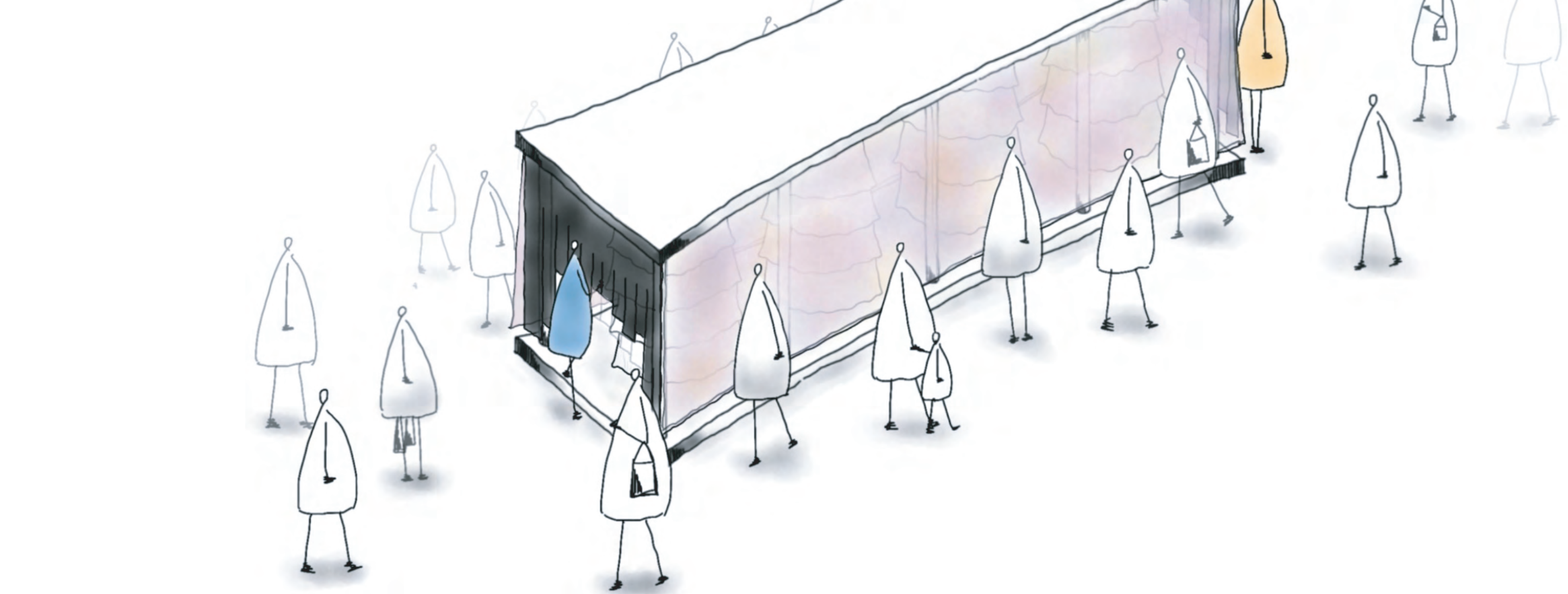


VII
そしてつい出口の一步手前の空間。
外の光と共に人々が進み続ける現実が布の内側からも伝わる。空間の余韻を感じ
ながら身体の中を巡っていた感情の数々を忘れていた自分に気づいた。忘れていた
たという、頭の中に居場所を見つけたのかもしれない。そう思いながら最後
の出口へと手を伸ばした。

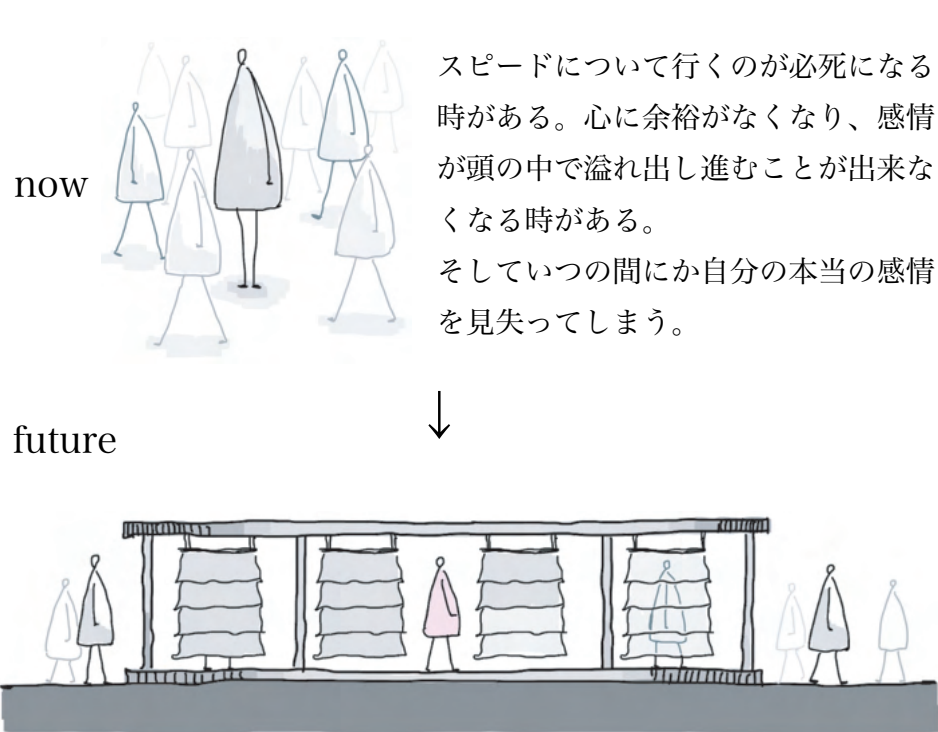


VIII
外に出た瞬間、日常へと戻った。
何してたんだった？と思うような時間でもあった。
でも心が軽くなっている自分には気づいていた。
またいつか戻ってくるかもしれない。そう思いながら最後
の時までまた頑張ろう。そしてまた私は足を進めた。

b 感情の居場所 place of emotions

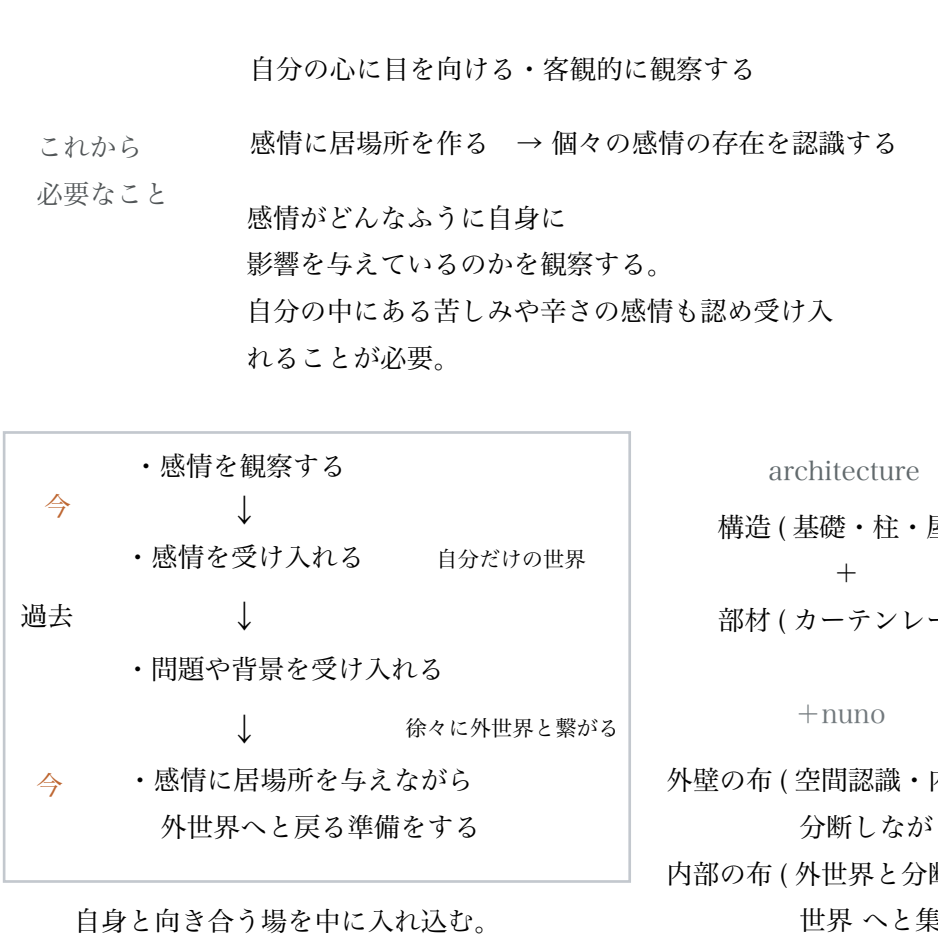


Program

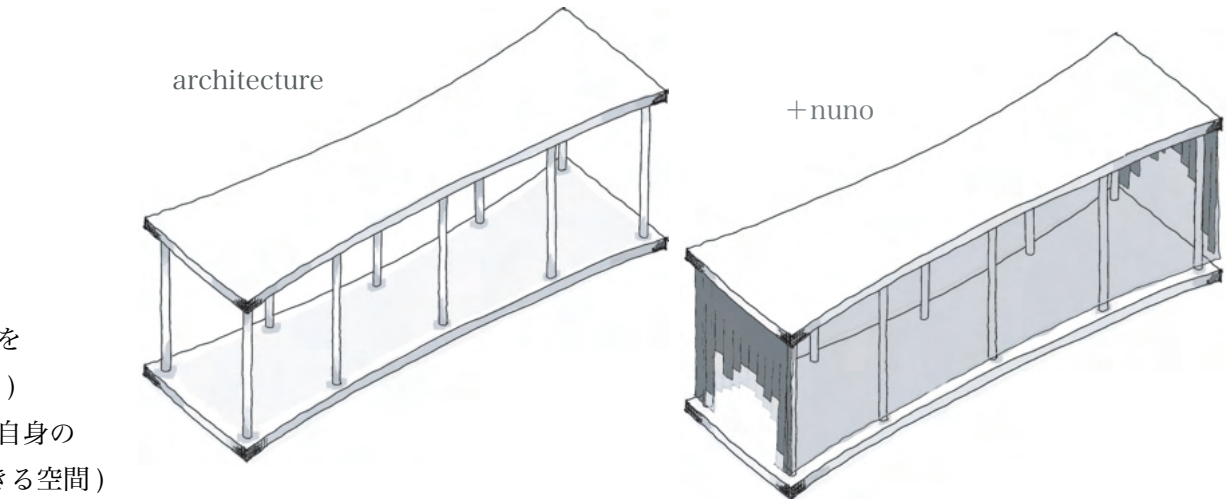
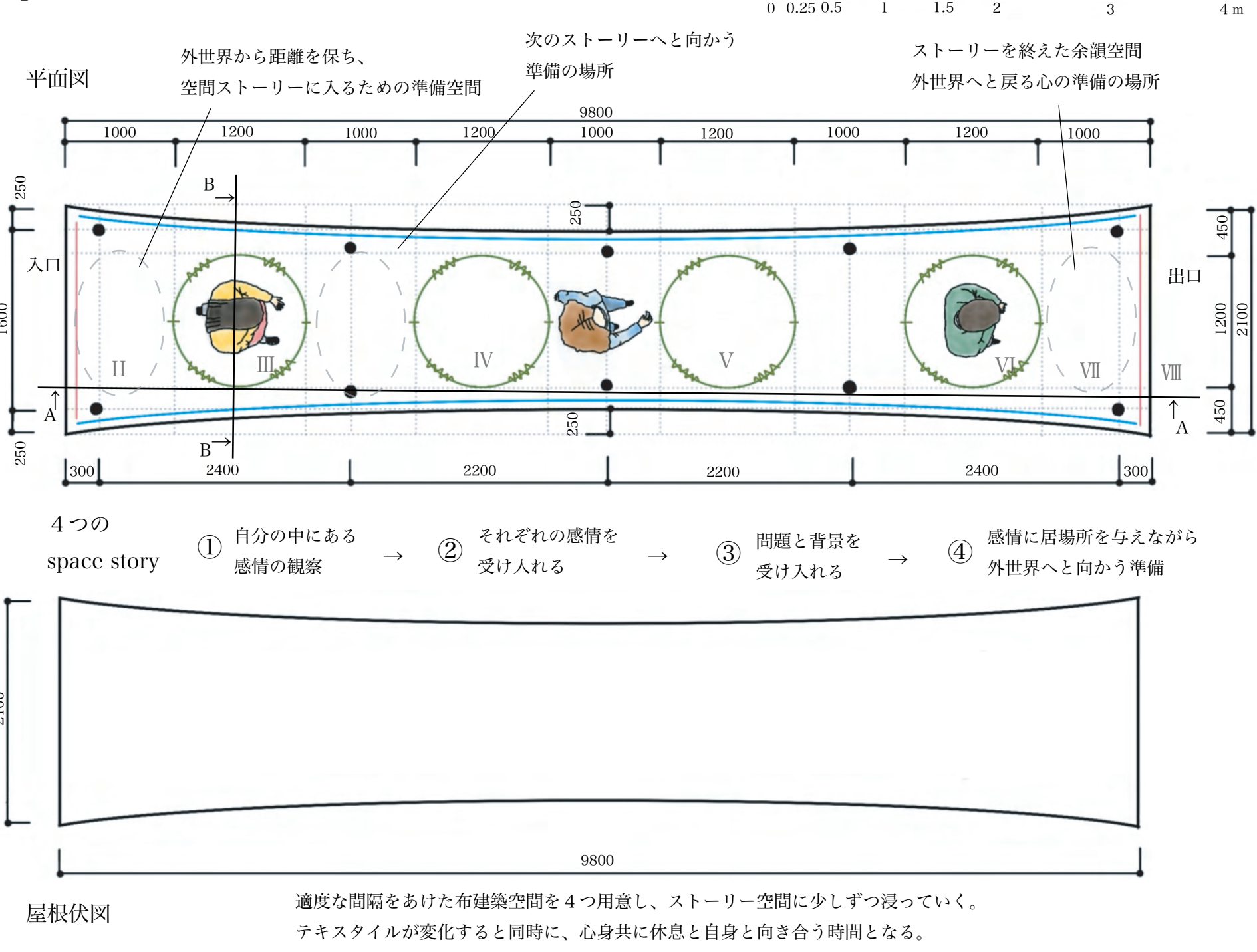


街中の刺激から離れ一度立ち止まる。
ゆっくりと流れる時の中で、自身の感情と向き合う。

設計ストーリー



Space Plan



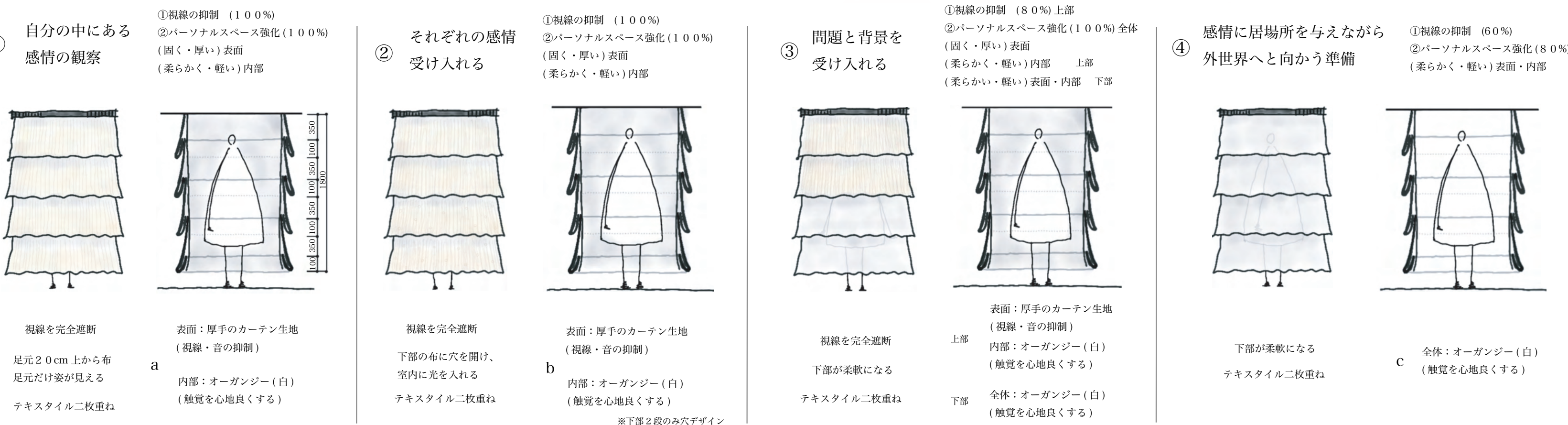
site: 歩道 (半屋外または室内)

都心部に位置する街中でスピードが止まること
のない不特定多数が目的地へ向かう通行のため
の空間。幅5m以上で2.5×1.0mスペース確
保が望めることが配置基準。

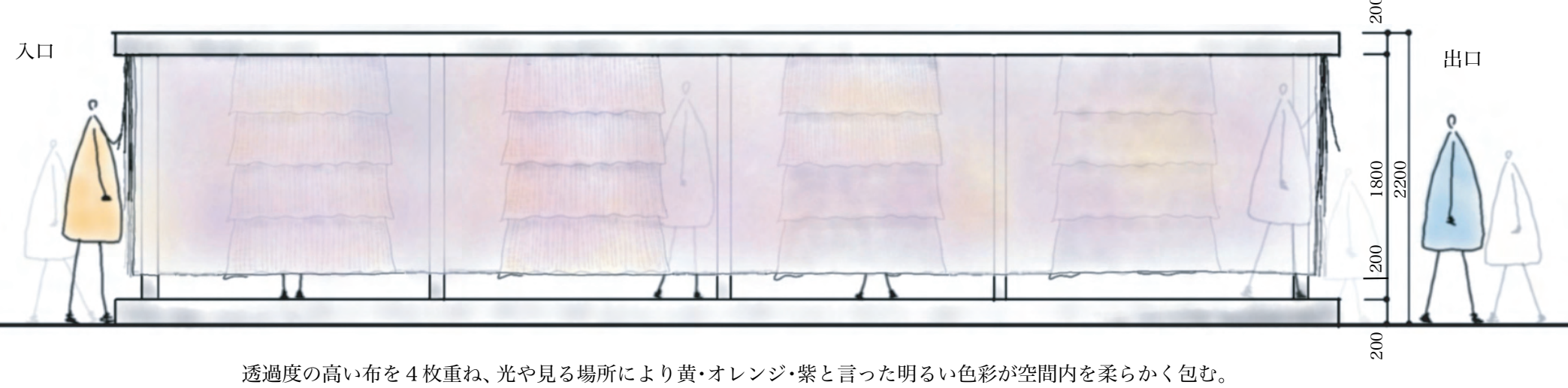
4つの布建築空間の詳細

約1.0mの長方形の平面の中に適度な間隔を空けた円型
の布建築空間が4つ存在する。それぞれに**ストーリー**
を**設け体験し、自身の感情と向き合いながら、感情の経緯**
に**思いを馳せ自己を受け入れていく**。布は外世界から守
り、素材が変化するとストーリーも変化していく。

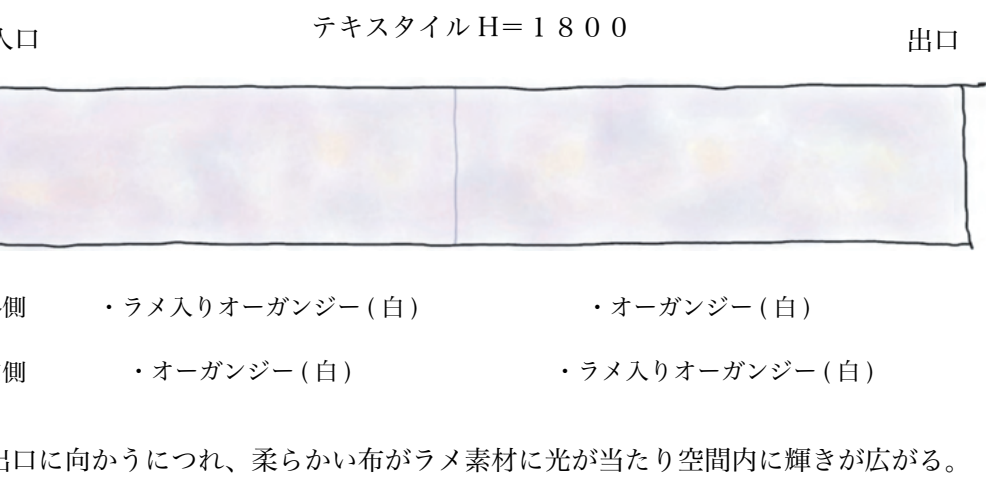
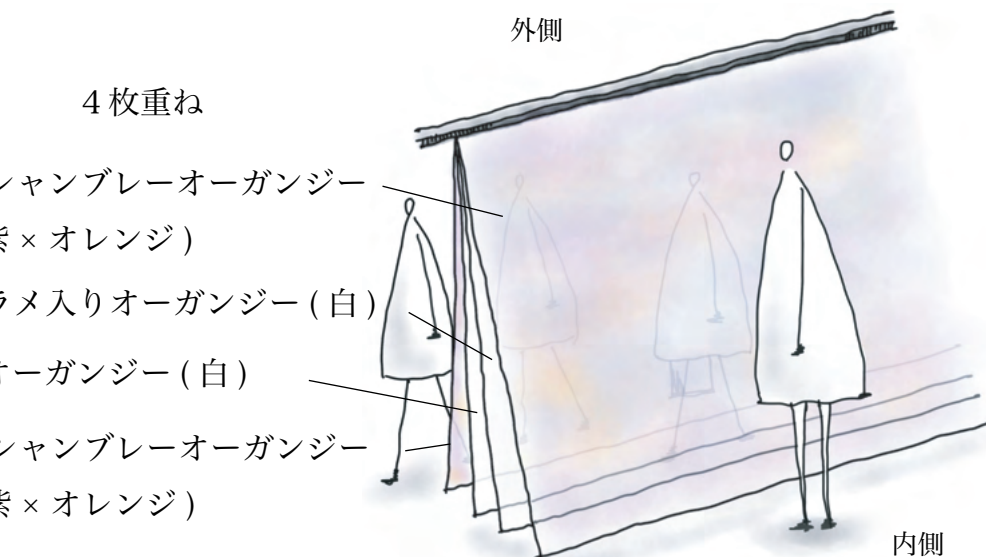
4つの space story



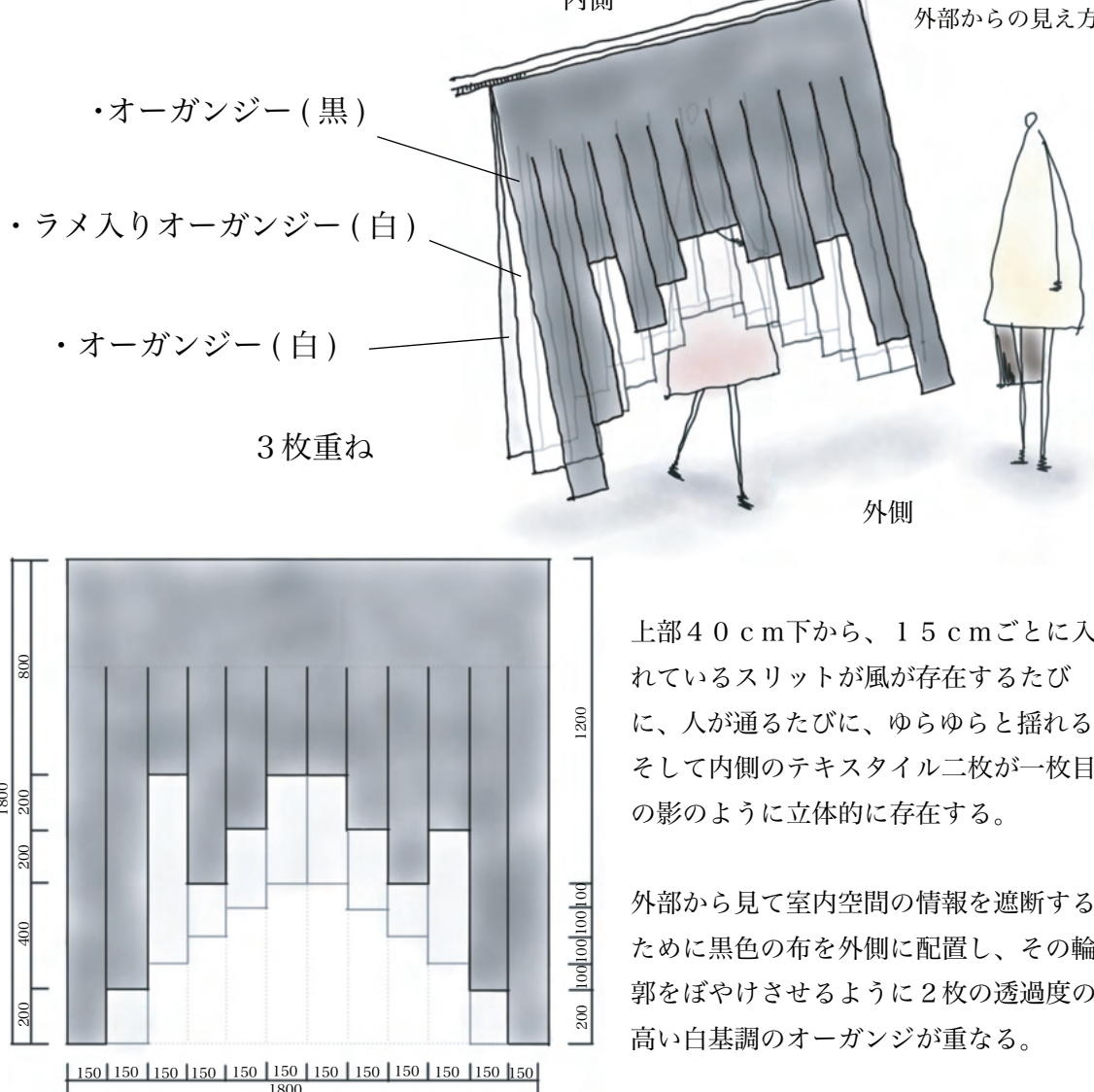
立面図



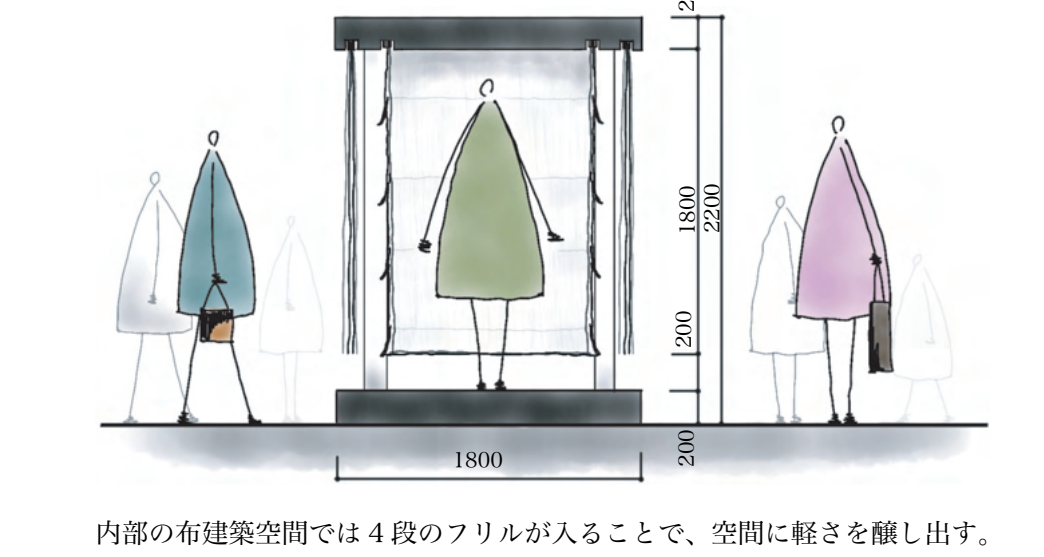
外側のテキスタイル詳細図



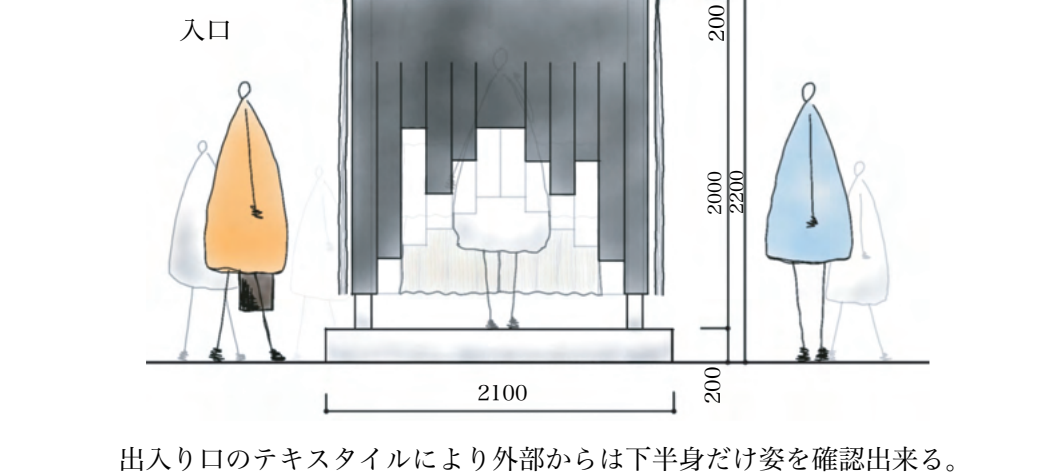
出入口のテキスタイル詳細図



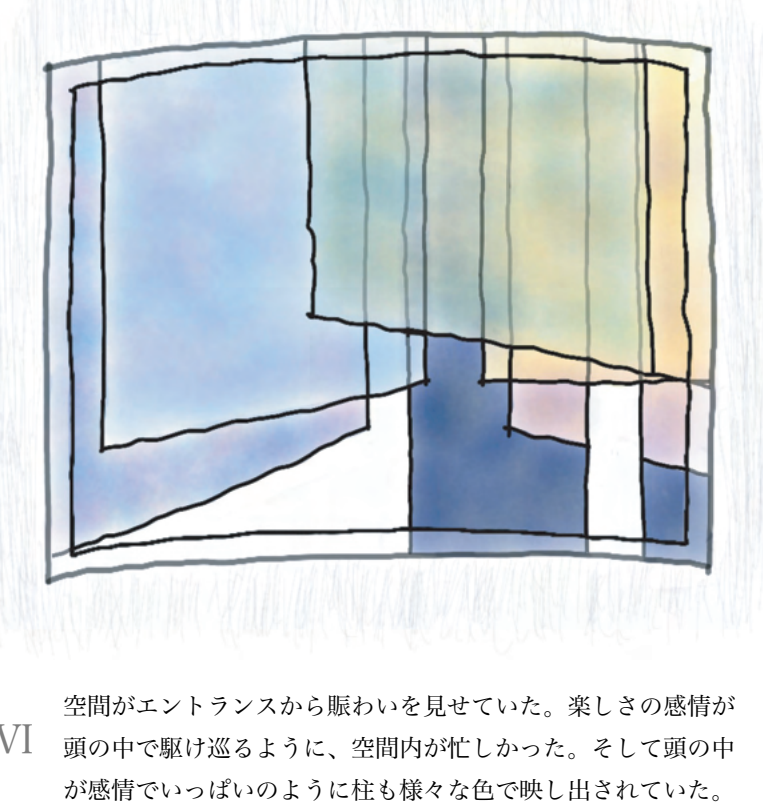
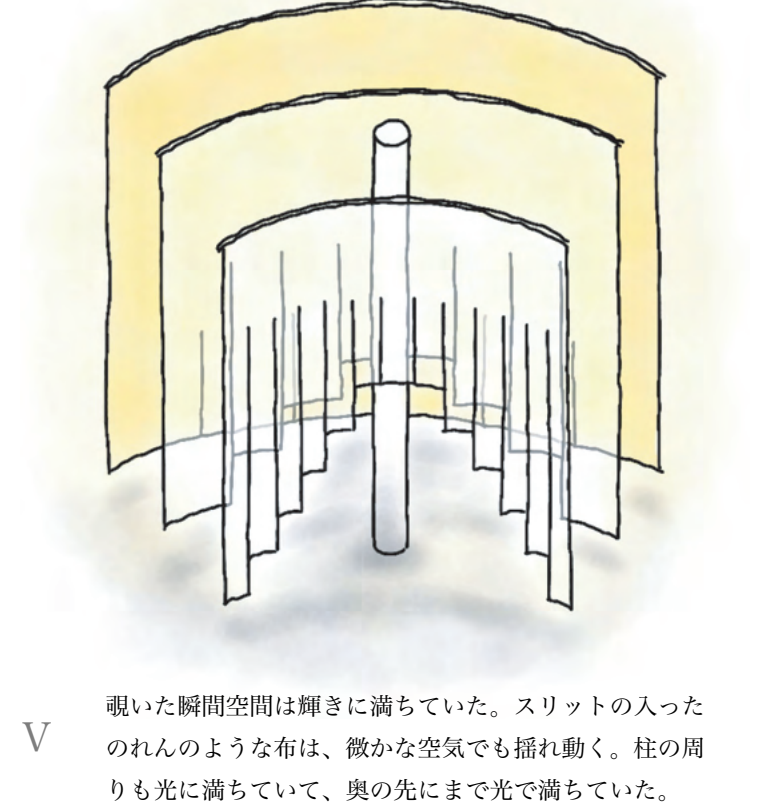
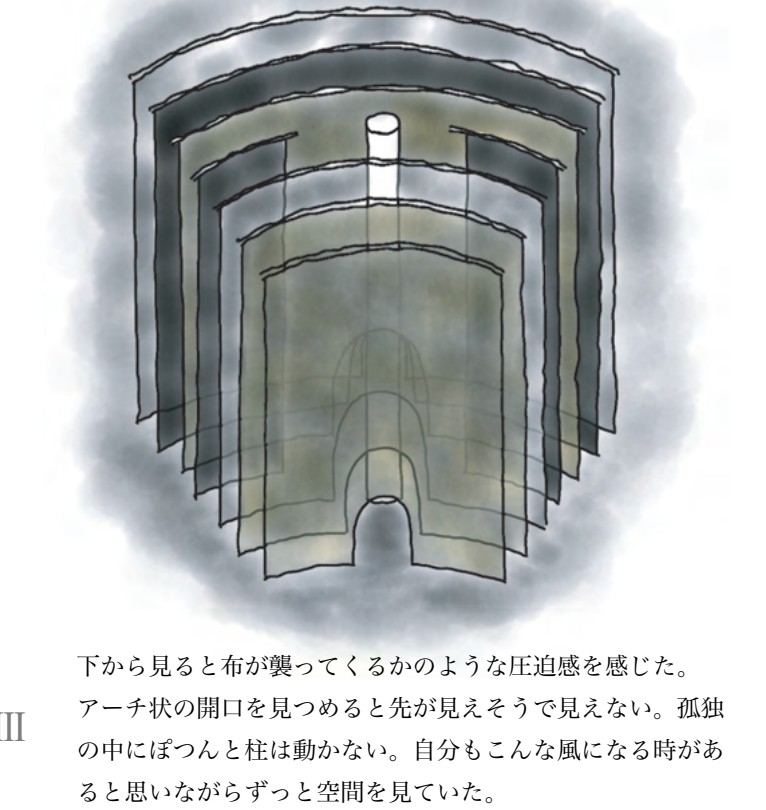
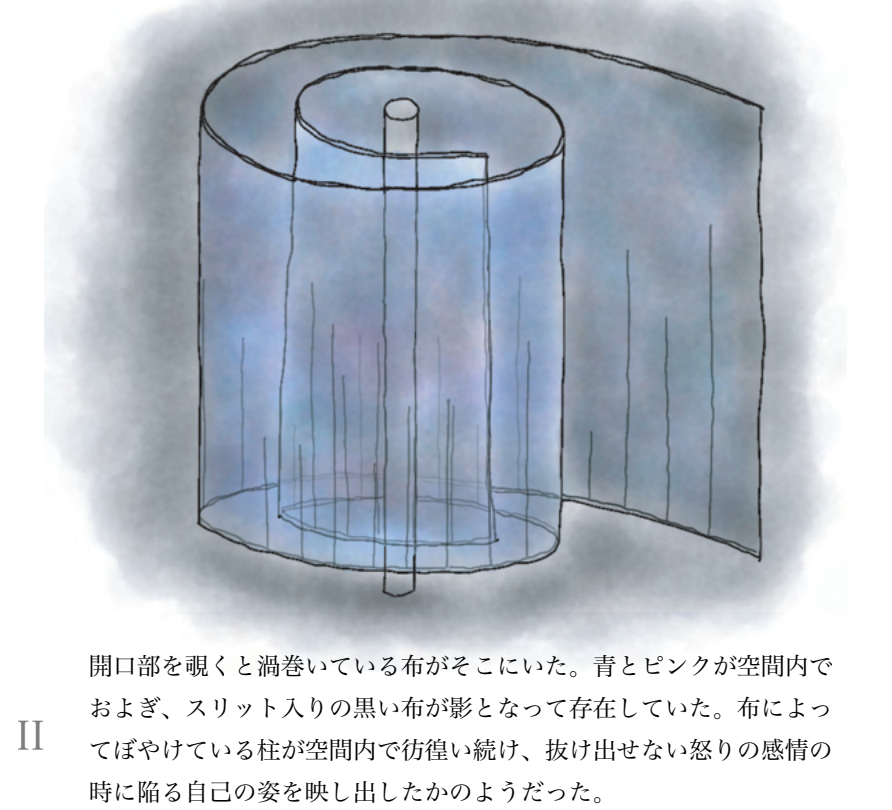
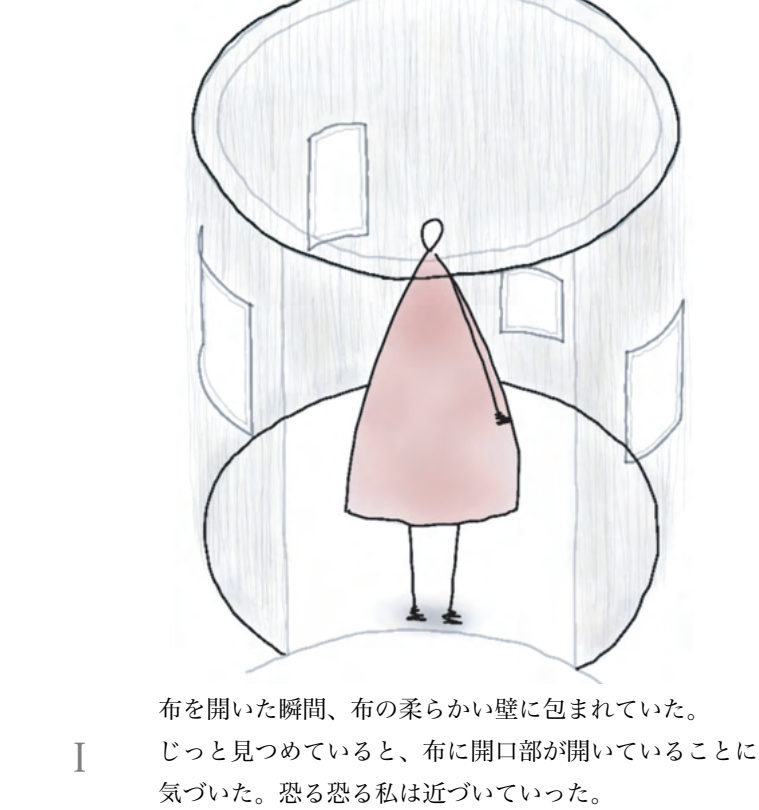
断面図B



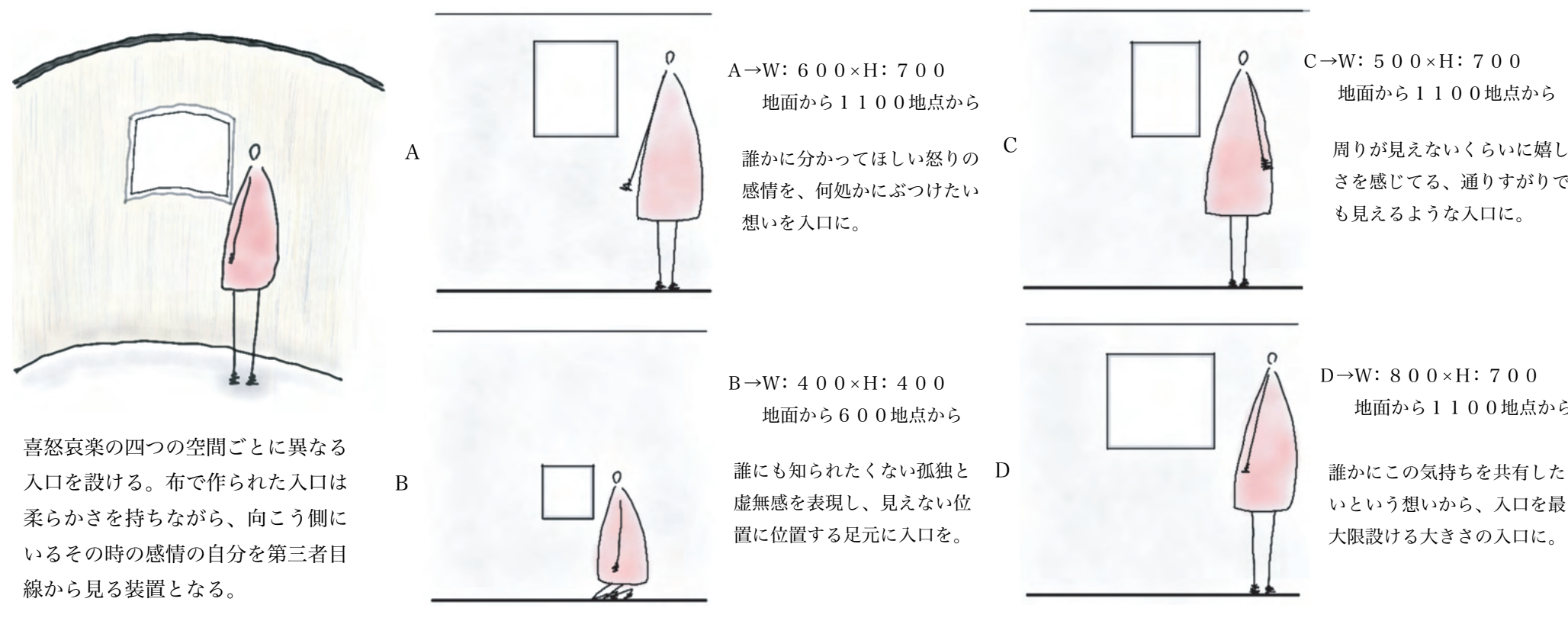
立面図



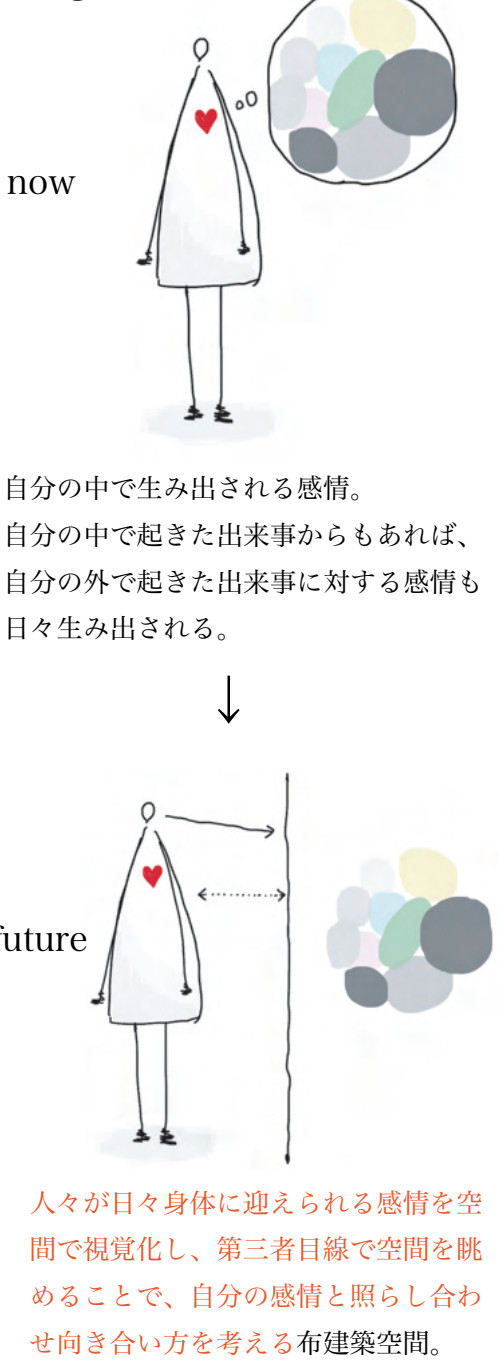
Space story



story entrance 布詳細 2

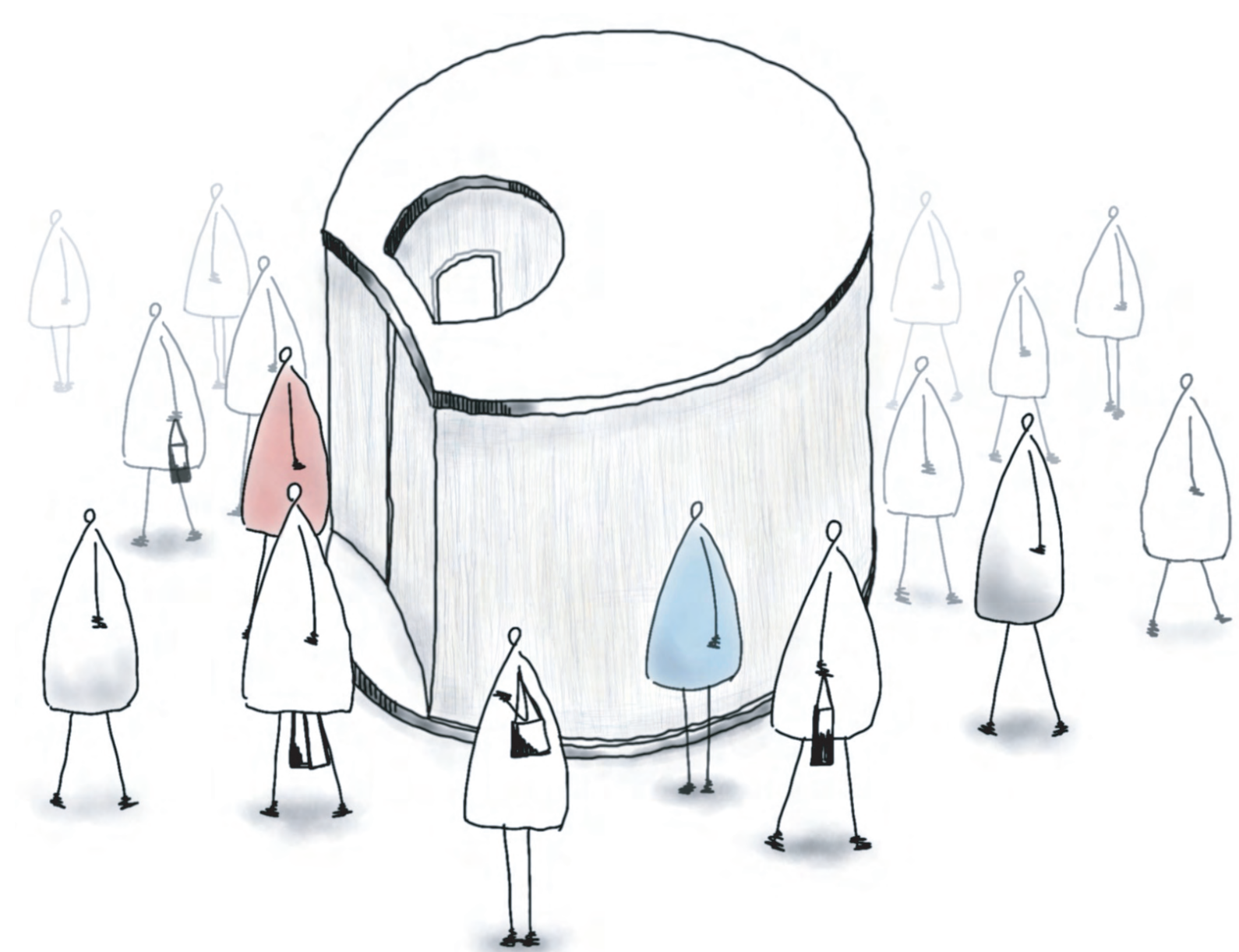


Program

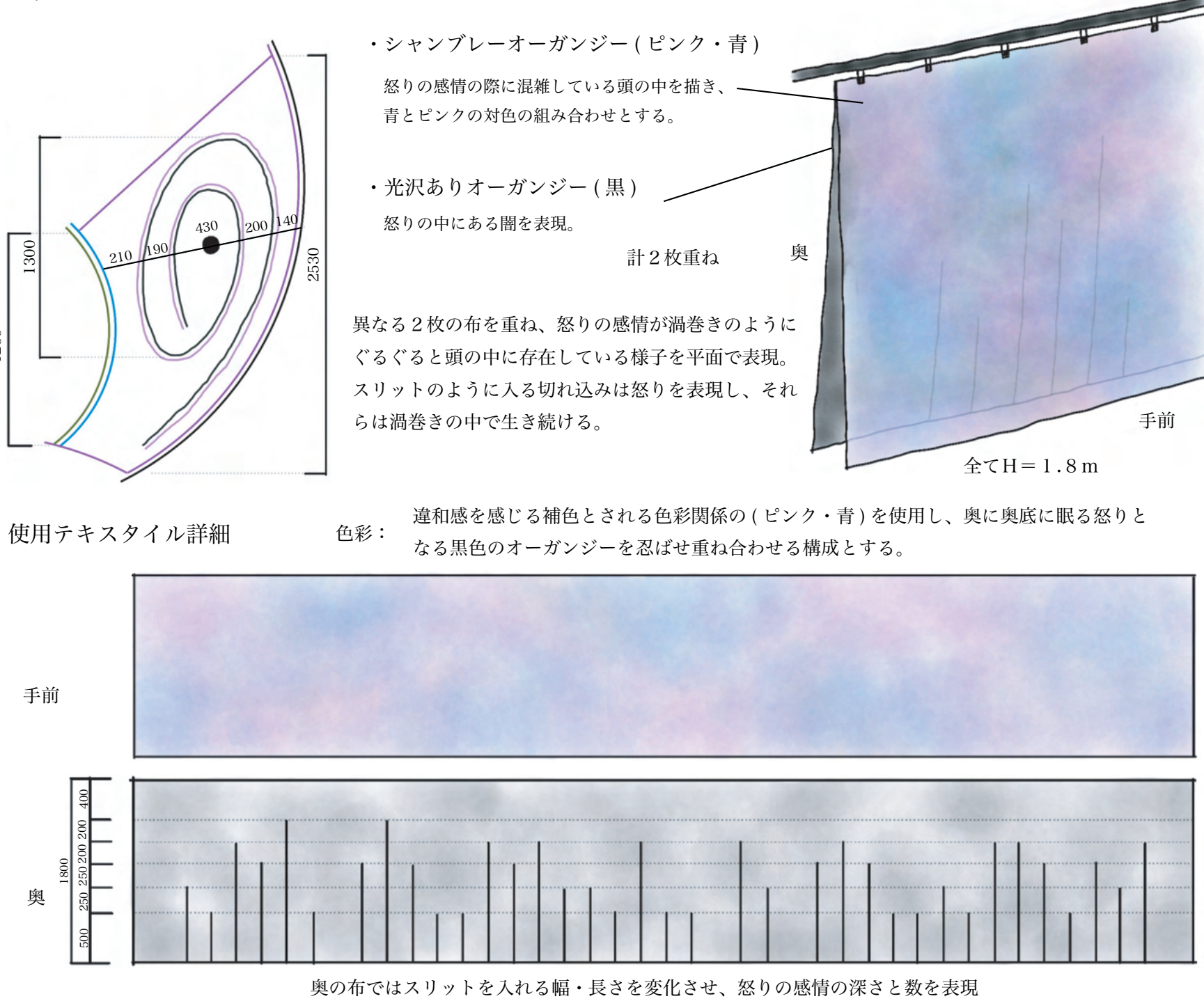


c 思考 (感情) との距離

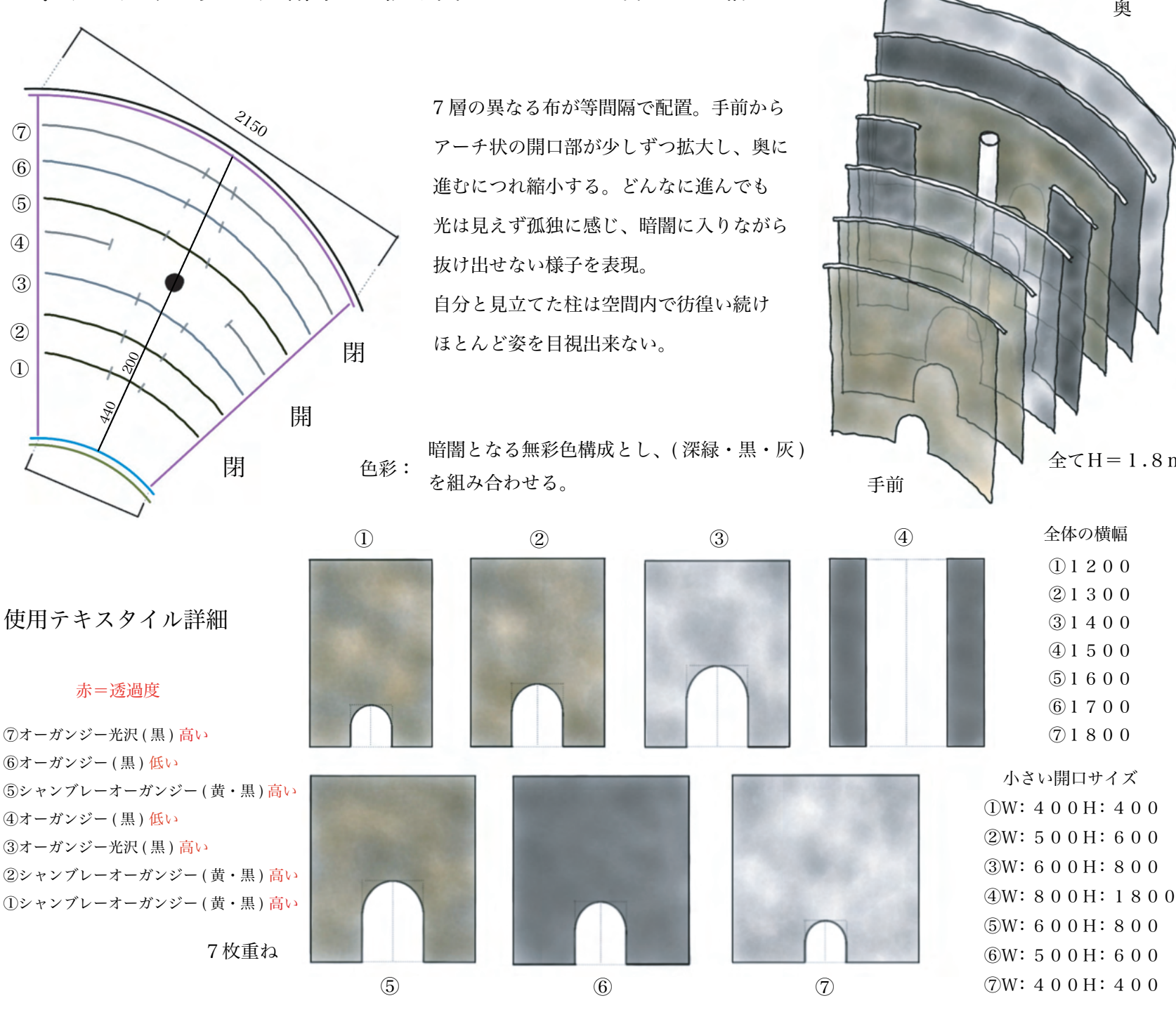
distance from emotions



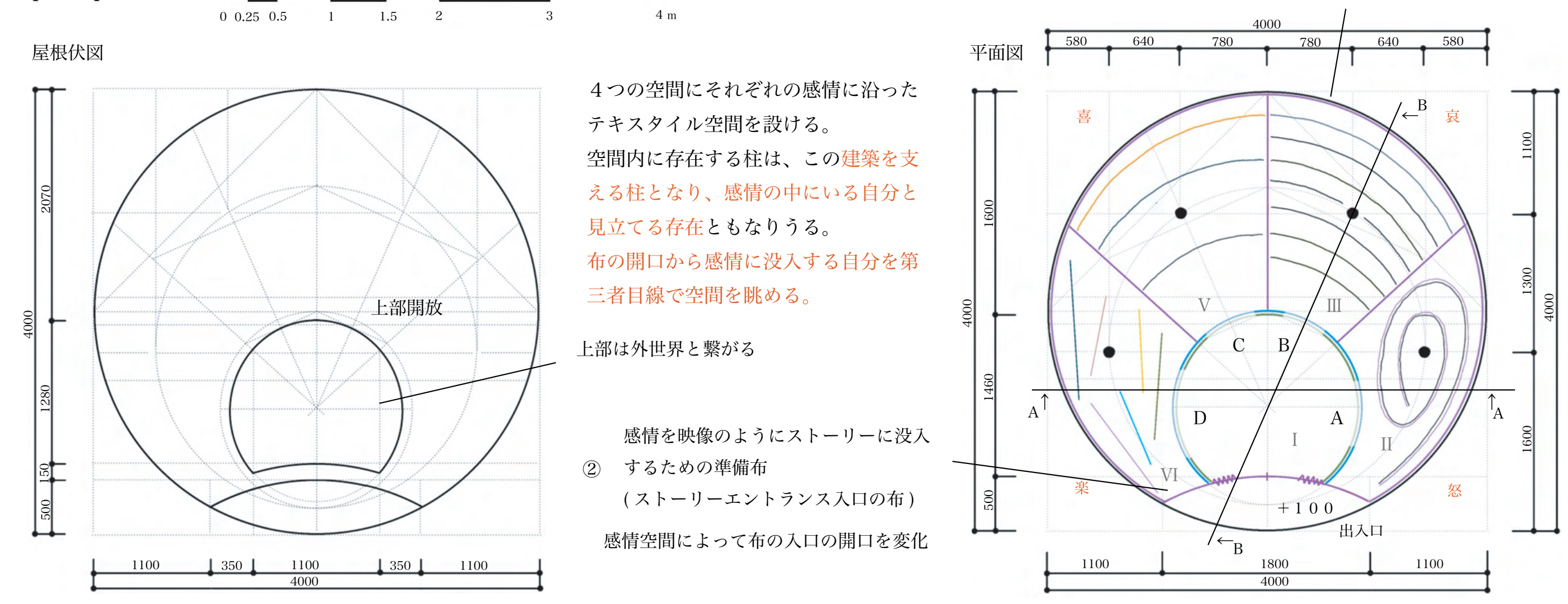
A. 怒→怒りの感情が頭の中に居続け自分を保てない感情



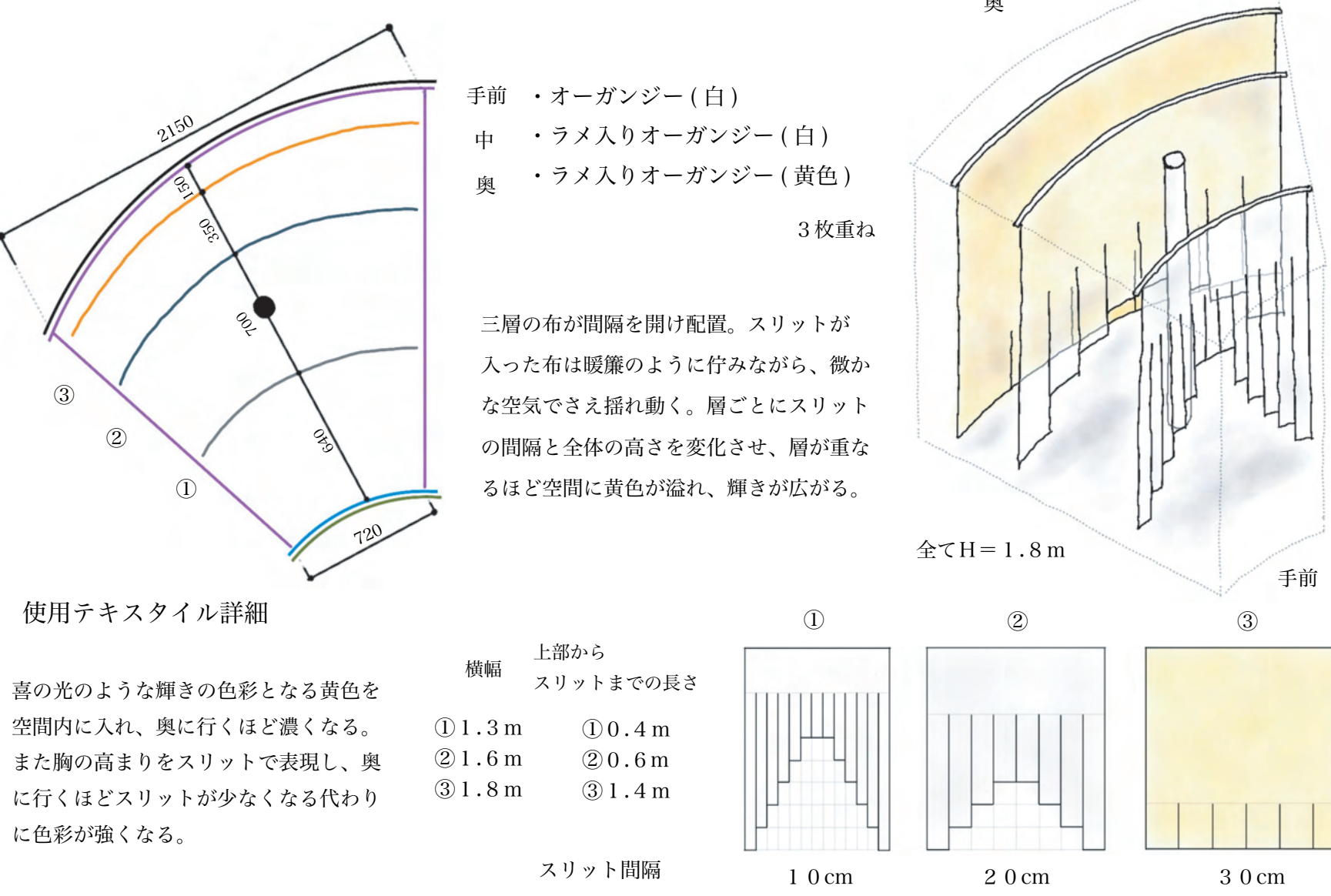
B. 哀→周りが見えず暗闇から抜け出せないくらい苦しい感情



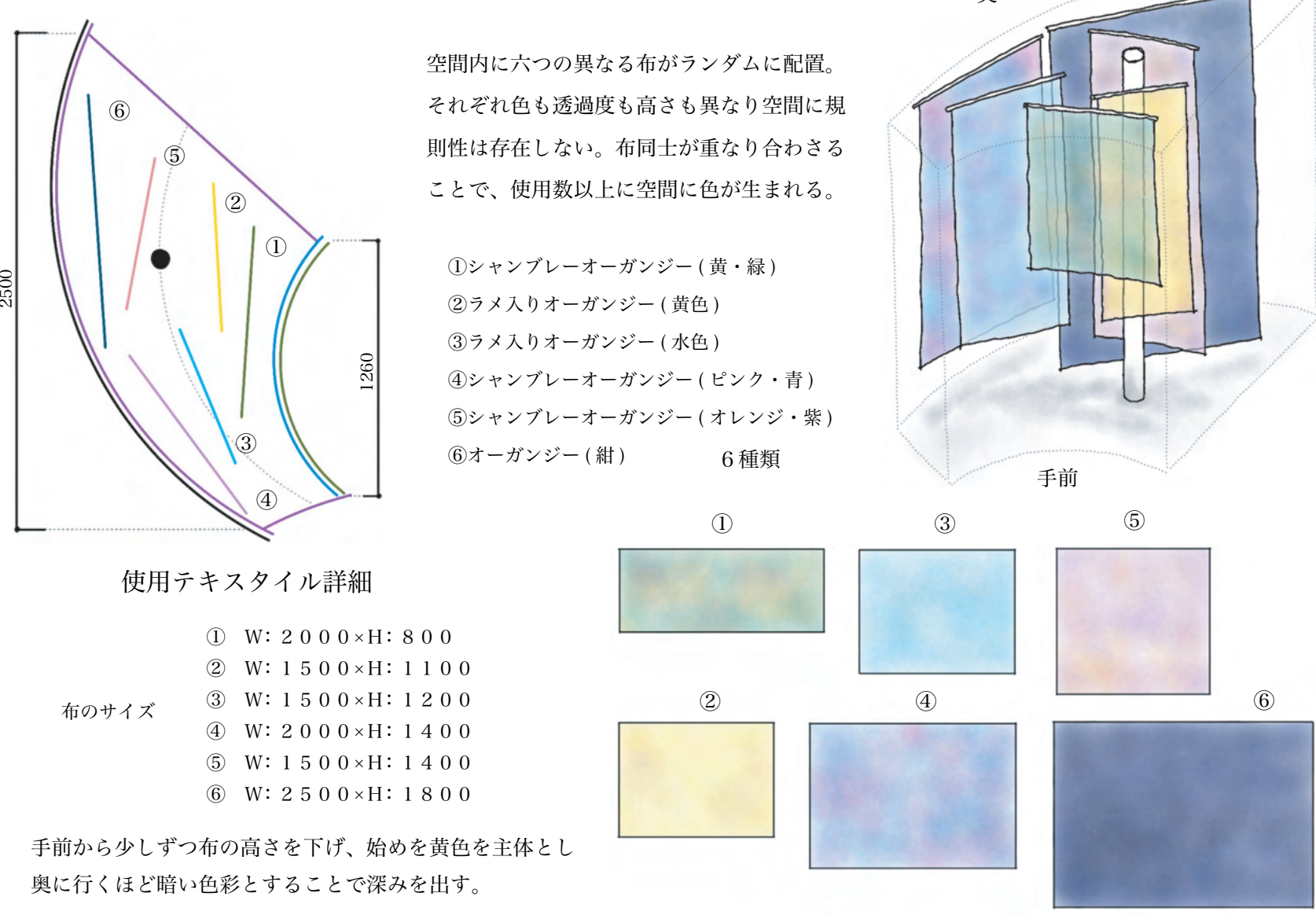
Space plan



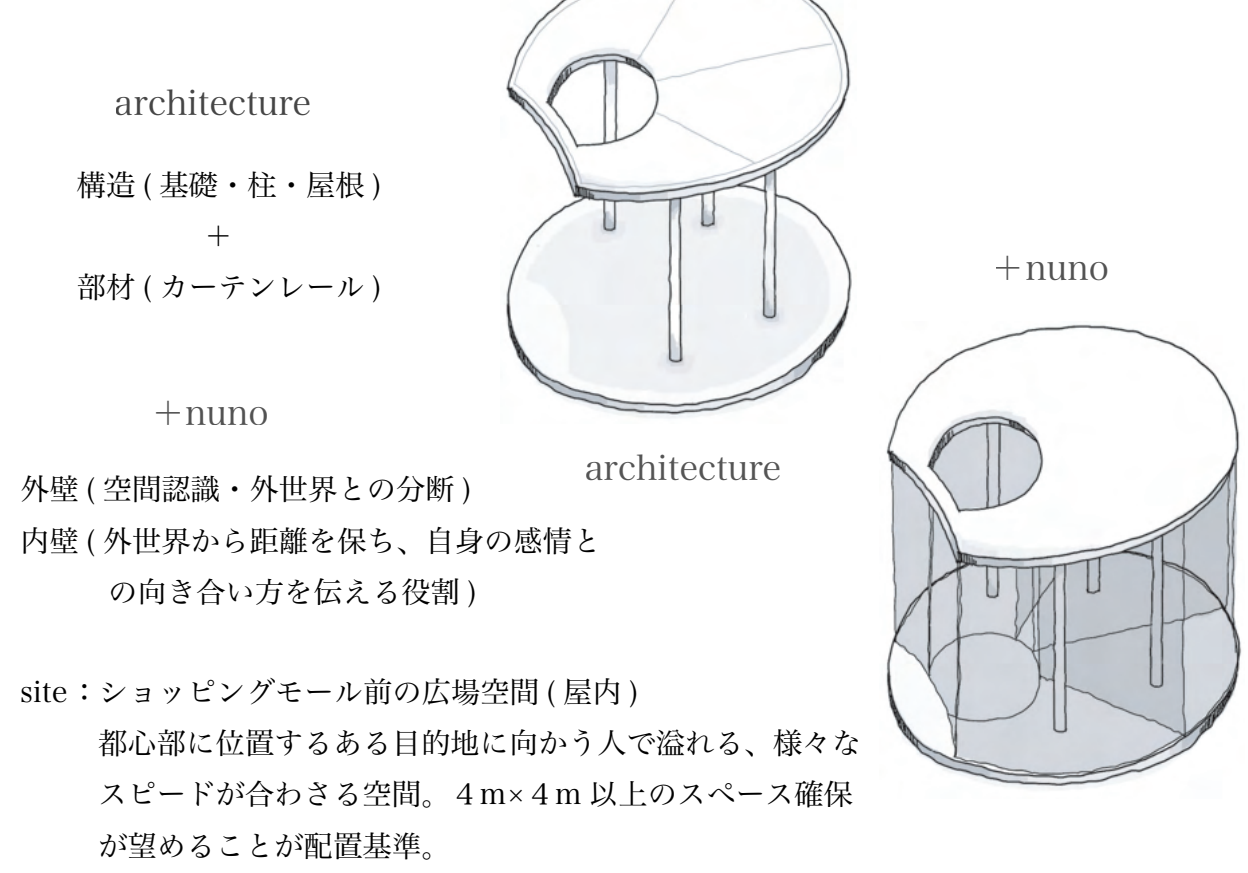
C. 喜→嬉しくて未来に光を感じ、胸が高まる感情



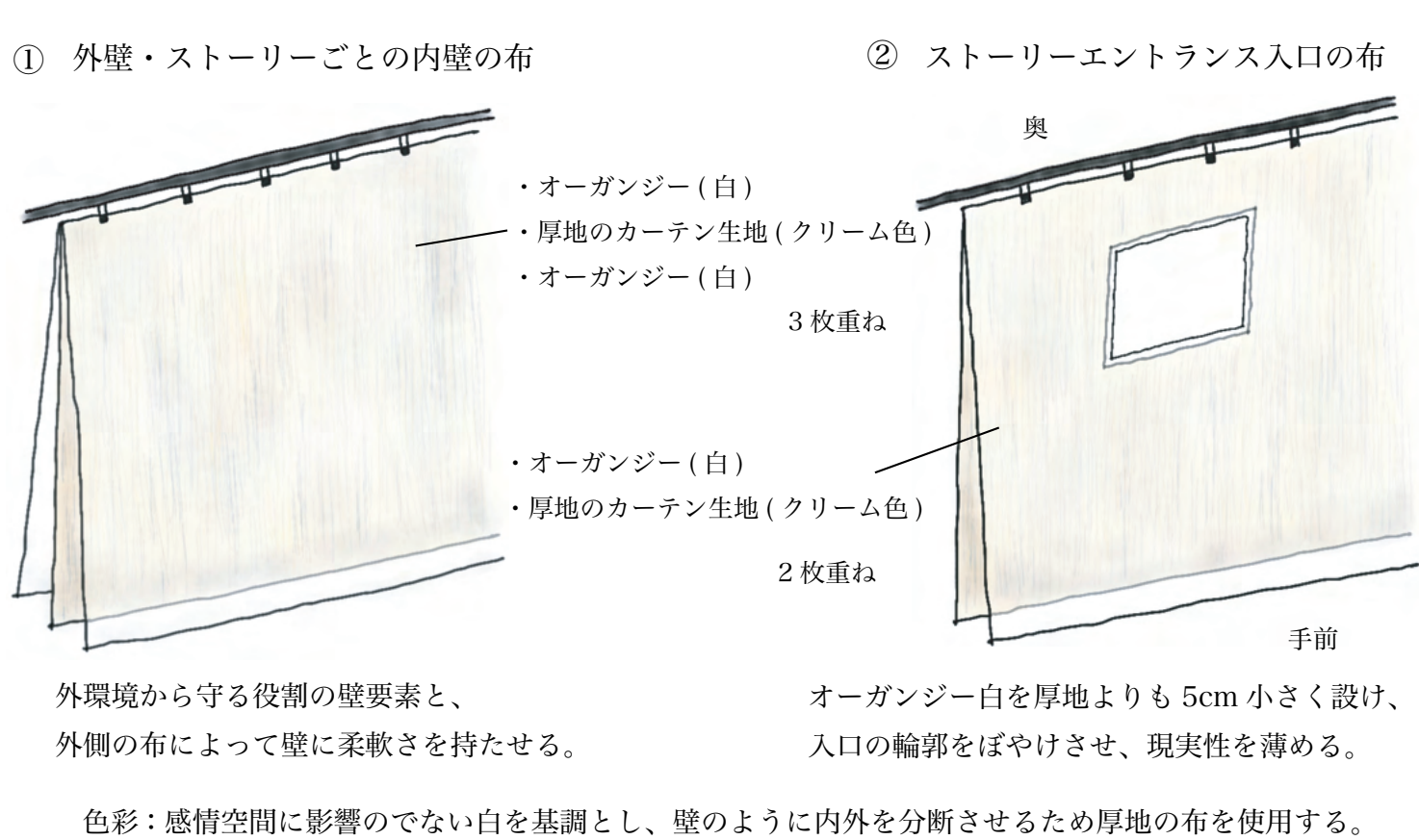
D. 楽→周りが見えないほど楽しく自分に自信が持てる感情



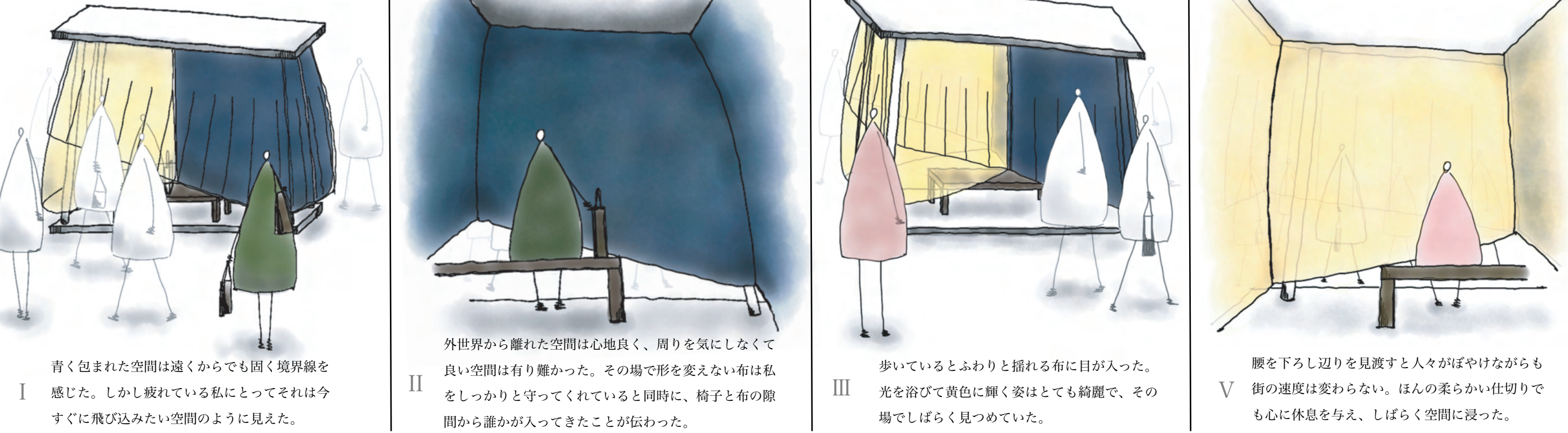
設計ストーリー



外壁・エントランス布詳細 1



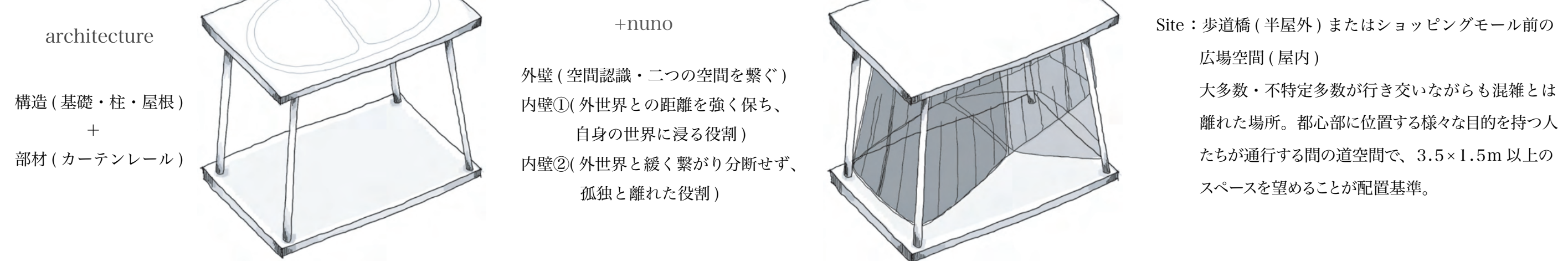
Space story



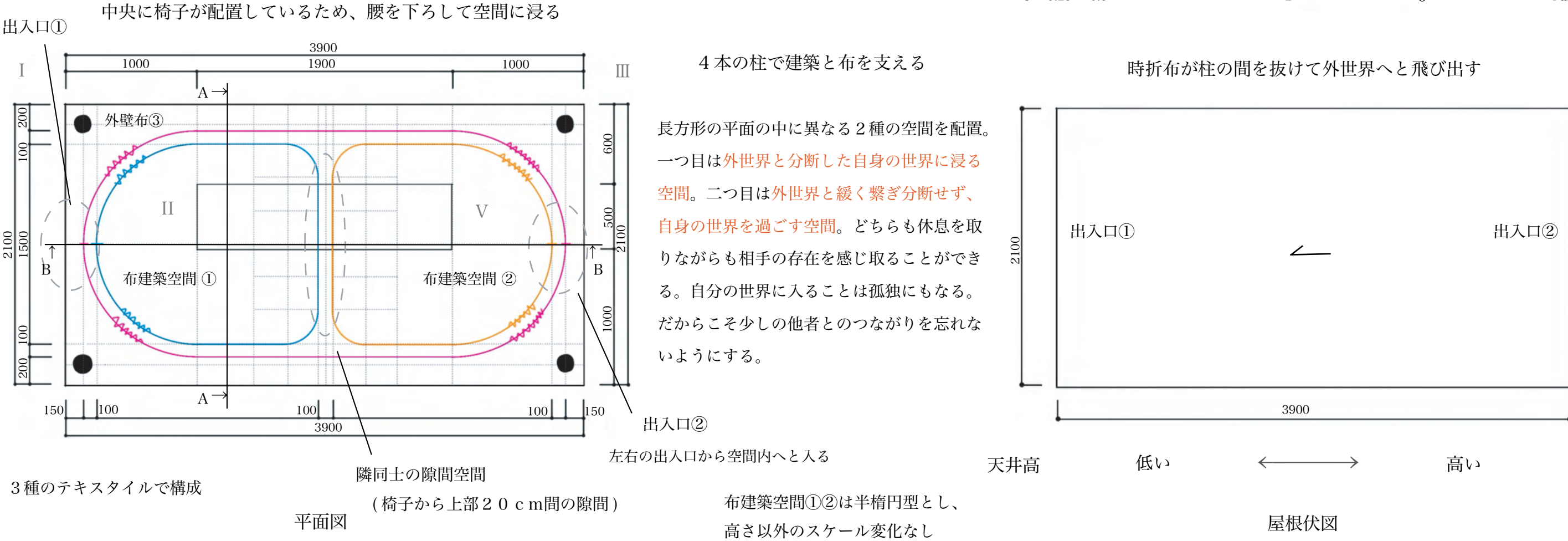
Program



設計ストーリー

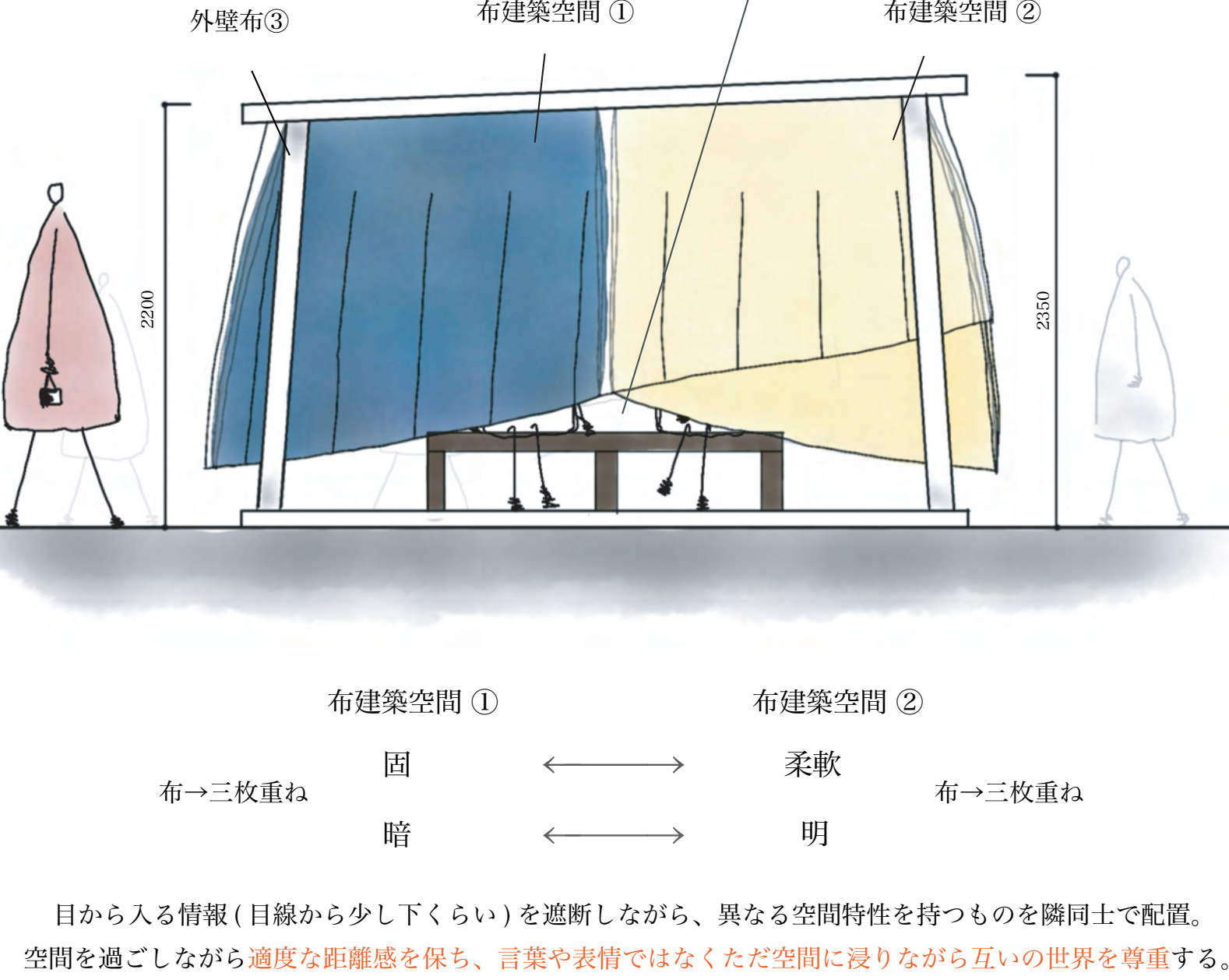


Space plan



Space program

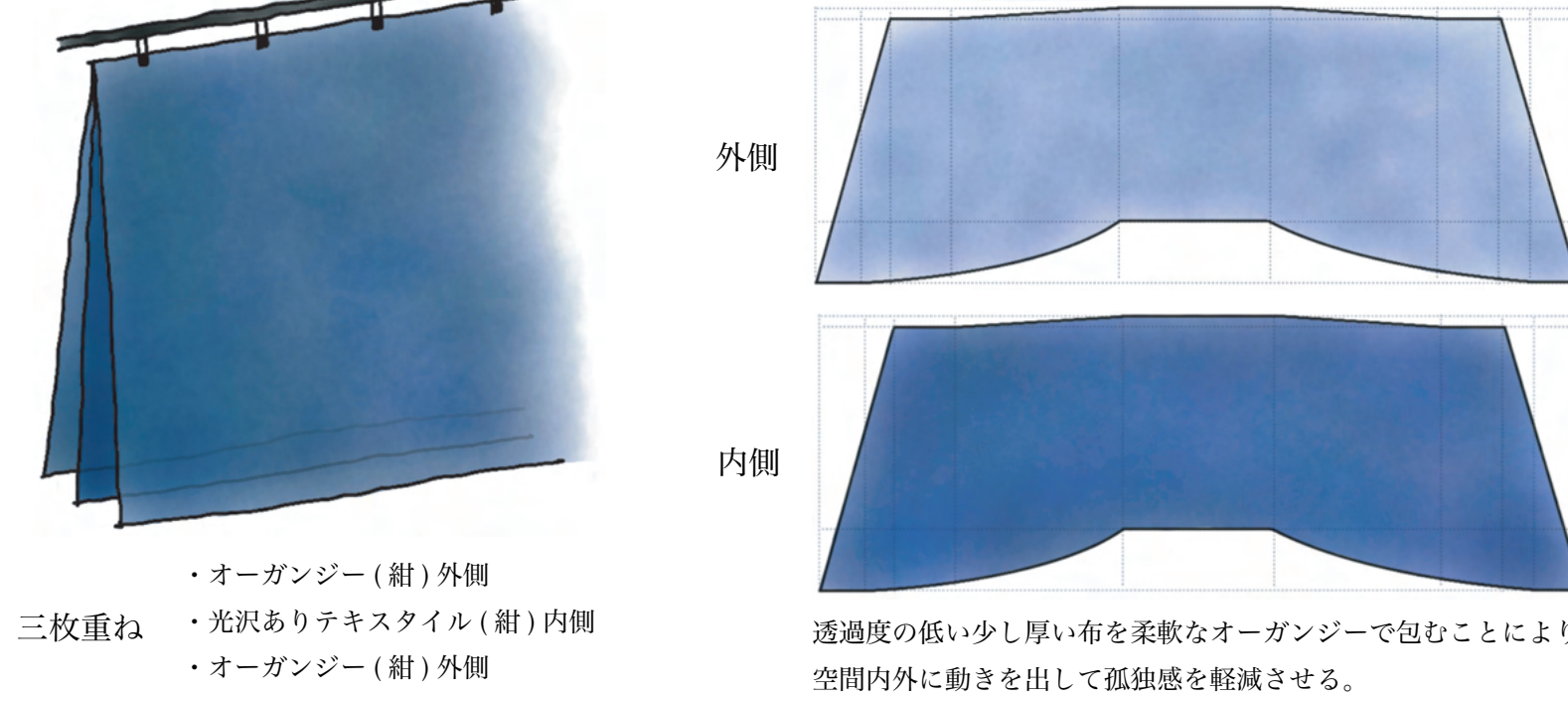
立面図



布建築空間 ①

透過度が低く、外世界とは距離が強く保たれている。
三枚重ねのブルーのテキスタイルが空間に重みを出しながら、両端のオーガンジーで柔軟さを醸し出す。
布に包まれているような安心感と共に、静寂が生まれる。
自分の世界に没入しながら、時折隣の存在が隙間空間を通して伝わってくる。
色彩： 外世界との分断を強く保つために、透過度の低い
暗色 / 寒色とし青色を中心にテキスタイルを選定。

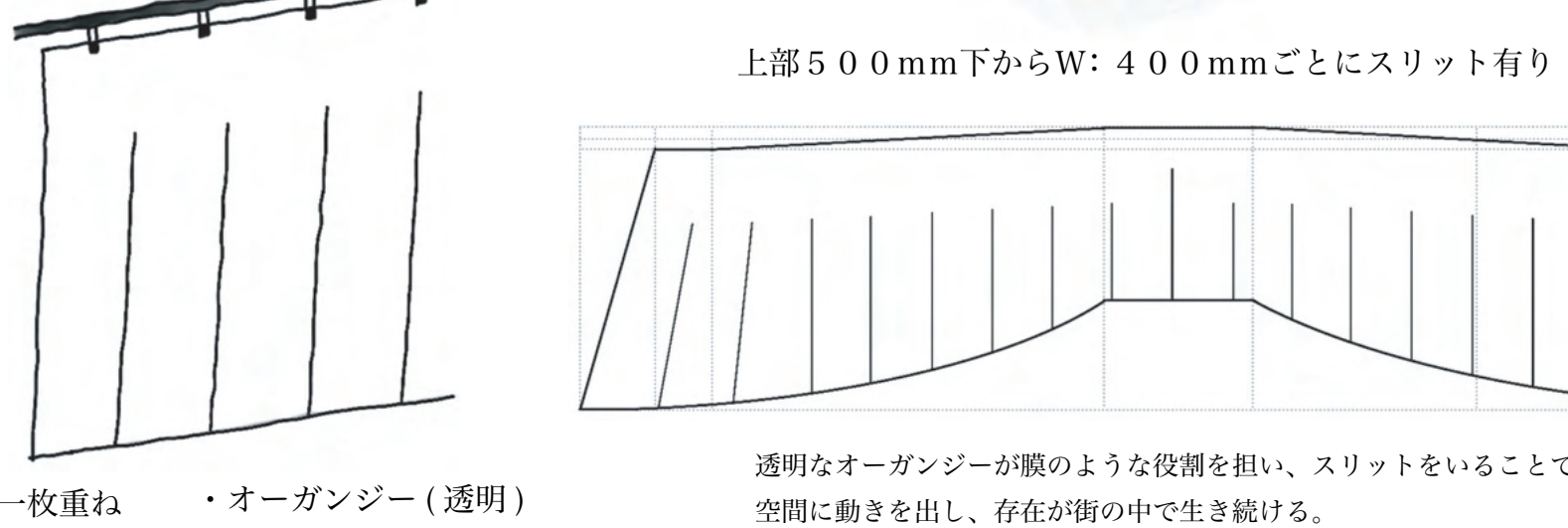
テキスタイル詳細図



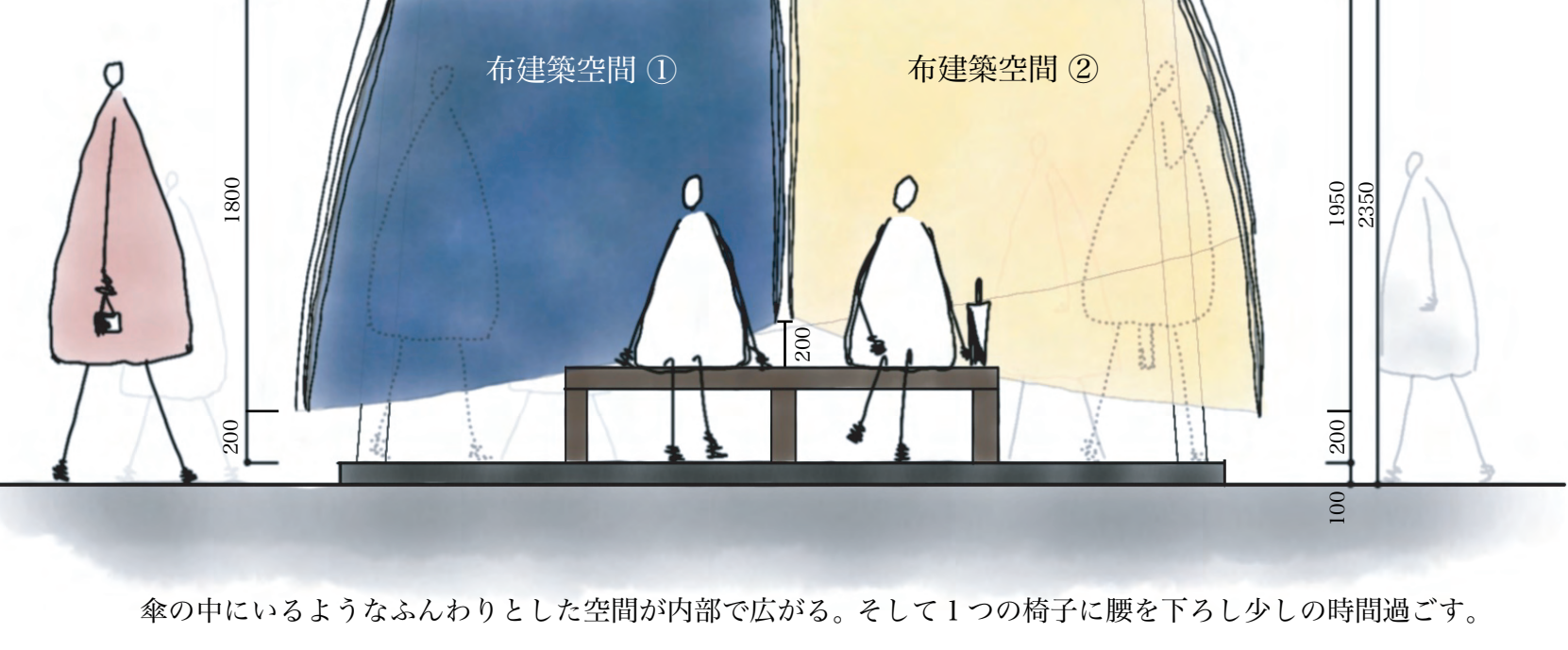
外壁布③

透過度が高く膜のようなテキスタイルは、二つの空間を包むように外側を覆う。
①の方が大きく包まれ、②に行くにつれて空間半分を包み込む。
布に入っているスリットが人が通るたび・風が吹くたびに揺れ動き、まるで生きているかのような表情を見せる。
同じ空間ではなくともお互いが寄り添うように、柔らかに空間を繋ぎ合わせる。
色彩： 双方の空間の形をぼやかしながらも、空間に影が出ない透明オーガンジーで包み込む。

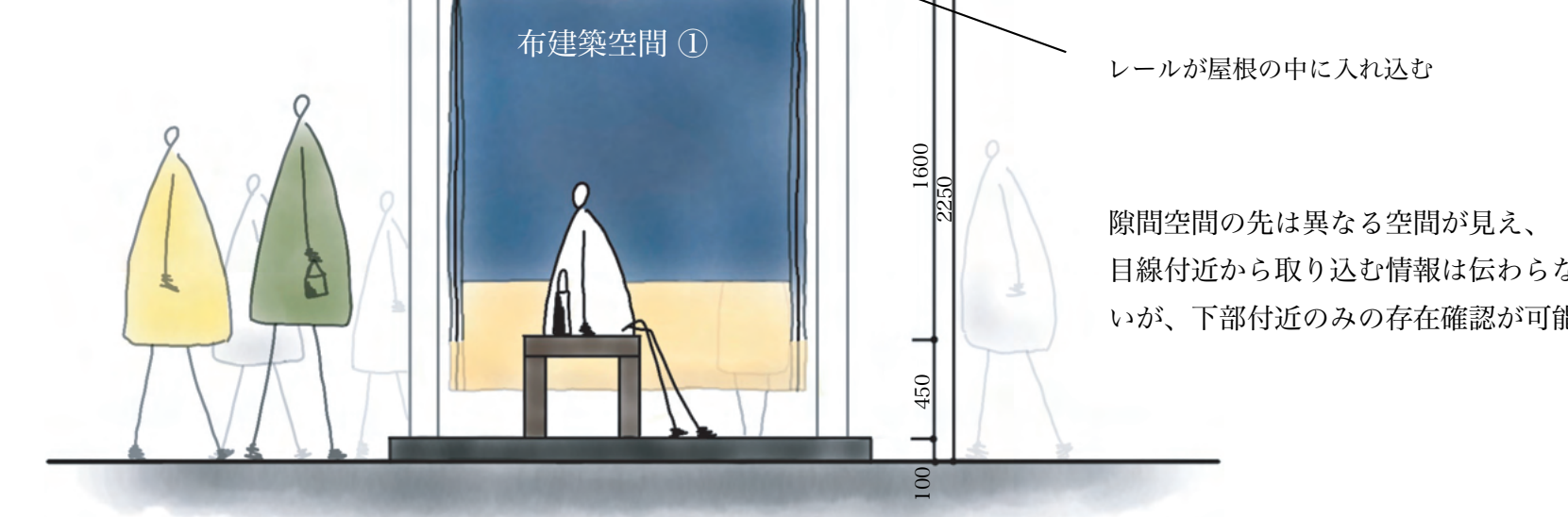
テキスタイル詳細図



断面図 A



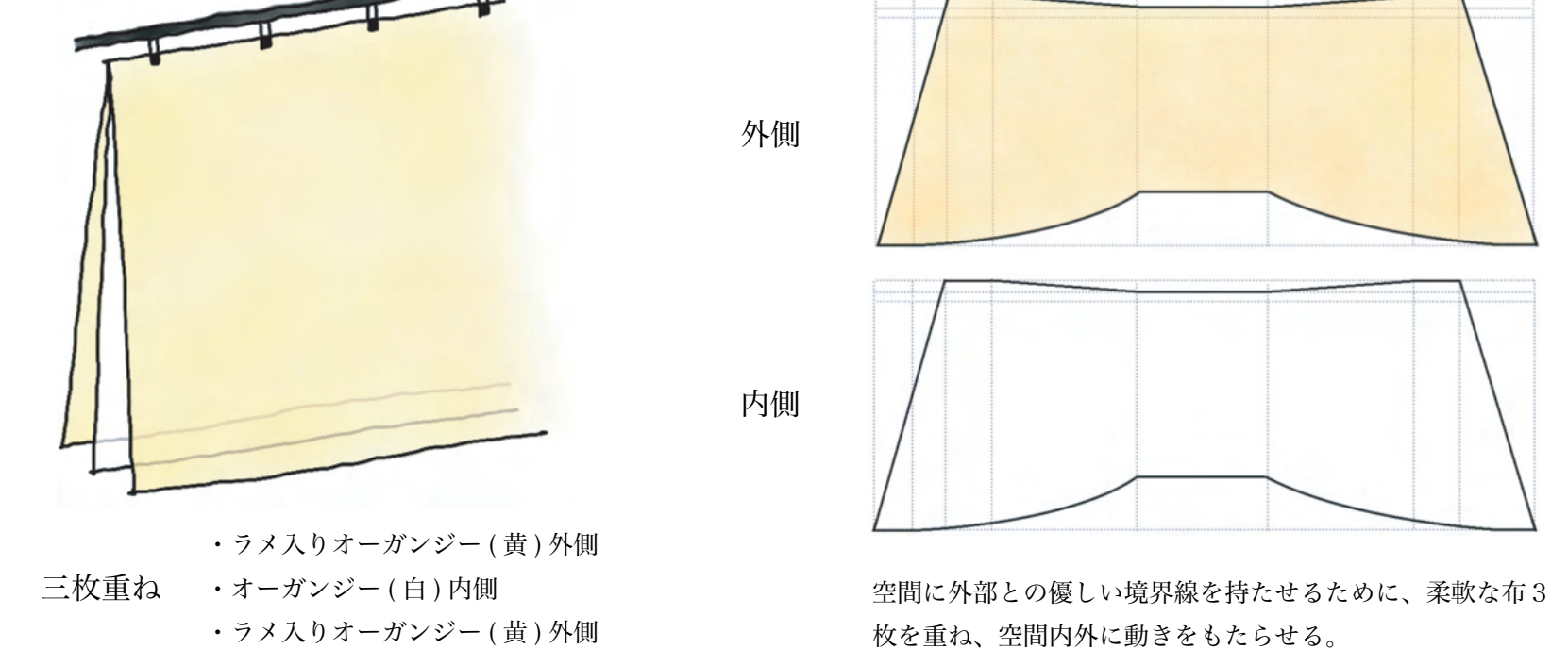
断面図 B



布建築空間 ②

透過度が高く、外世界と緩く繋がっている。
三枚重ねのテキスタイルは両端が黄色のラメオーガンジーで、中央の白い布で中和されながらも空間内や外空間にも輝きを与える。柔軟な布空間は時折揺れながら人々の存在が空間内からぼやけて見える。そして隙間空間から少しの情報が伝わるたびに存在を感じ取る。
色彩： 外世界との分断を緩く保たせるため、透過度の高い暖色とされる黄色と両端に配置し中に白ラメオーガンジーを配置する。

テキスタイル詳細図

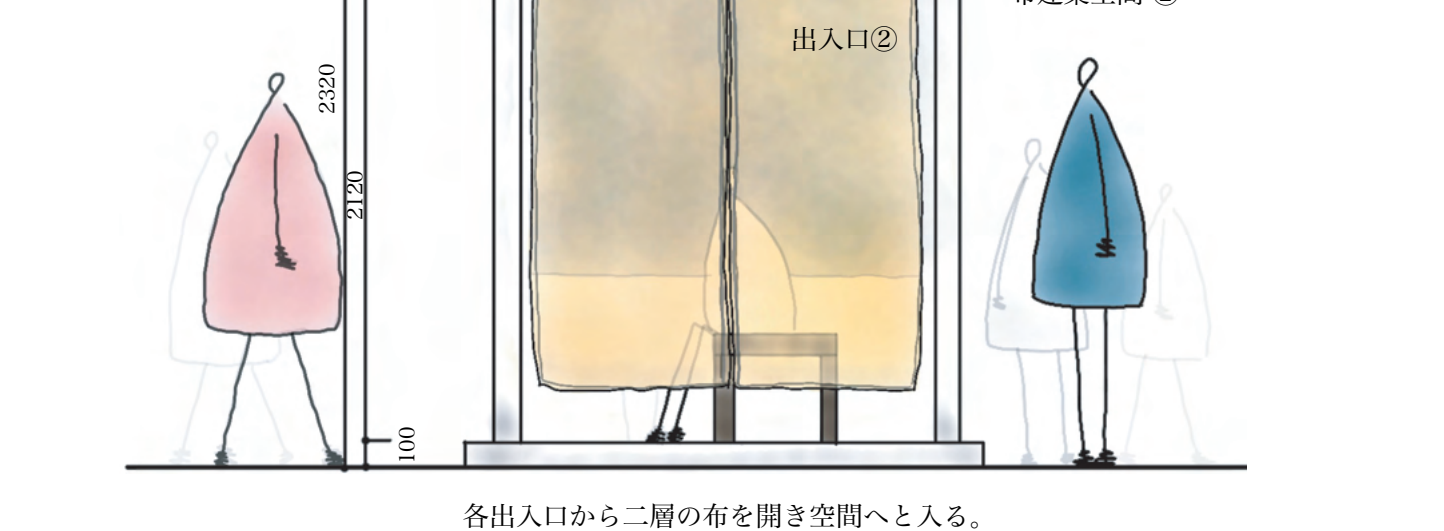


出入口②

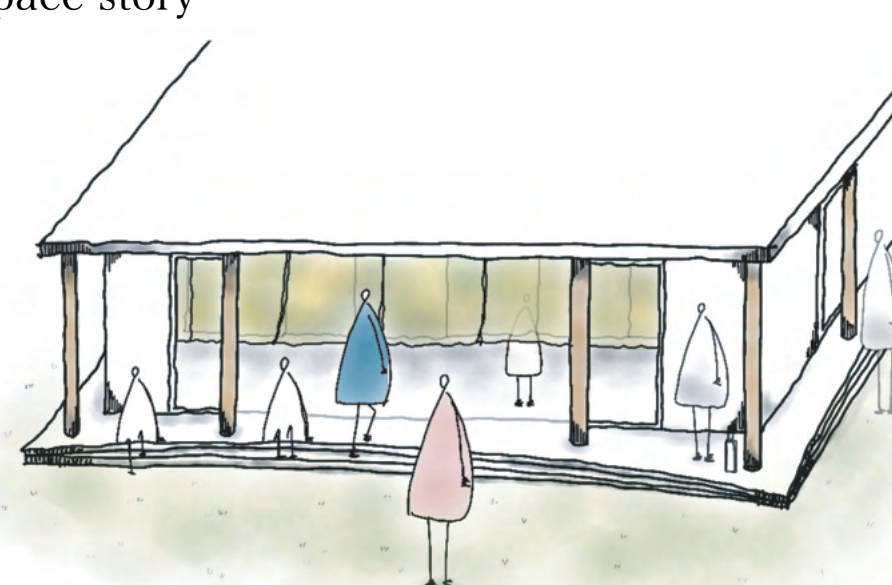
全体布建築空間詳細図

外壁布の楕円形の平面の中に半分ずつとなった平面が隣同士で配置。
布建築空間②に行くにつれて天井高さを上げ、外環境へと開く。互いの空間は平面と空間形は同等となり、それ以外の構成で空間に変化を与えている。

立面図

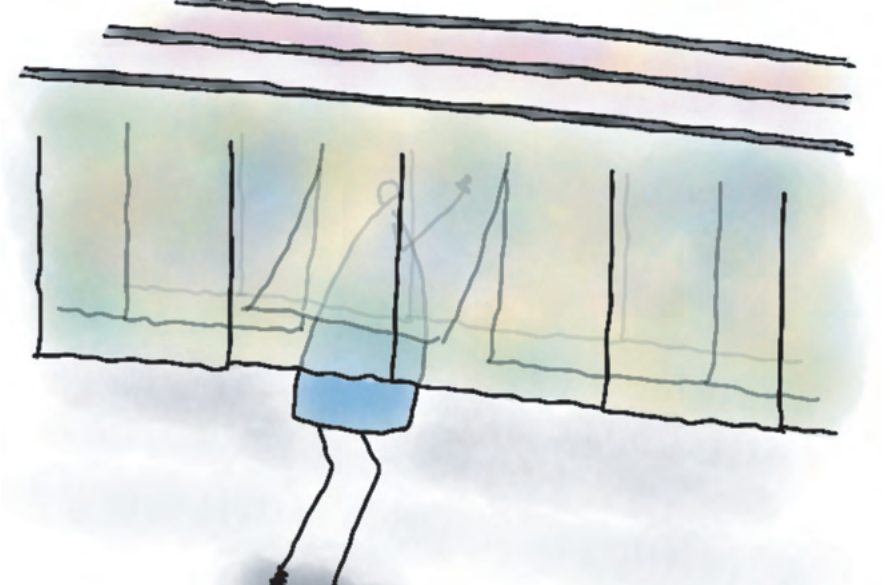


Space story



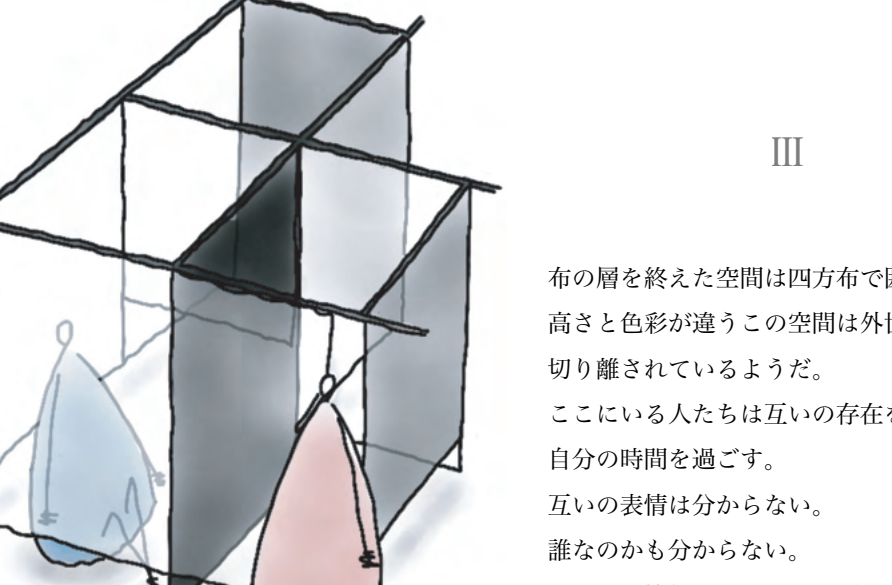
公園の中にたどず布建築。風によって布がひらひらと舞い、こちらに顔を出している。誰かが覗い込まれるように布の中へと入っていった。少しずつ見えなくなっていく、人が影へと変化した時、その中には何があるのだろうと、私も足を踏み入れたくなった。

I



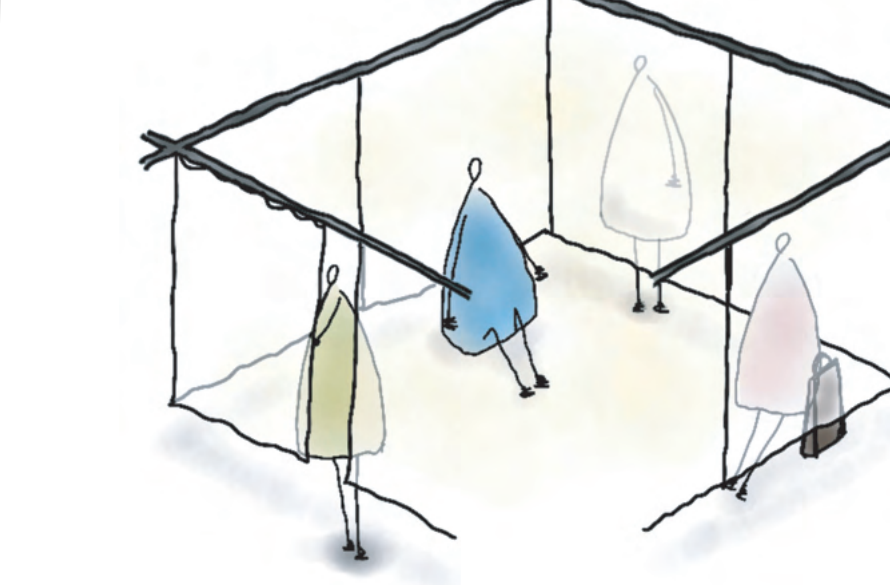
足を踏み入れ、布に触れた。のれんのような布を持ち上げ、頭を少し低くして歩いた。歩くとたびに布の壁が私の前に現れた。どれも触れているのか分からないくらいに柔かく、色が変化しながら先の空間が少しずつ姿を現す。少し立ち止まりその様子に意識を向けると、誰かが腰を下ろし空間に浸っているようだ。

II



布の層を終えた空間は四方布で囲まれている。高さや色彩が違ふこの空間は外世界とは切り離されているようだ。ここにいる人たちは互いの存在を感じながら、自分の時間を過ごす。互いの表情は分からない。誰なのかも分からない。でもその情報はここでは必要ない。ただ皆互いの存在を感じながら時を過ごした。

III



そして最後の空間へとやってきたみたいだ。上部から降り注ぐ光は外世界を思い出させる。ここでは他者との仕切りの壁はない。しかし誰も言葉交わさず、ただ目が合えば会釈をする。取り繕う必要もない、自分のために時間を過ごしているような気がして、嬉しさが込み上げた。そして皆しばらくの時間過ごした後また日常へと戻っていった。

V

設計ストーリー

architecture

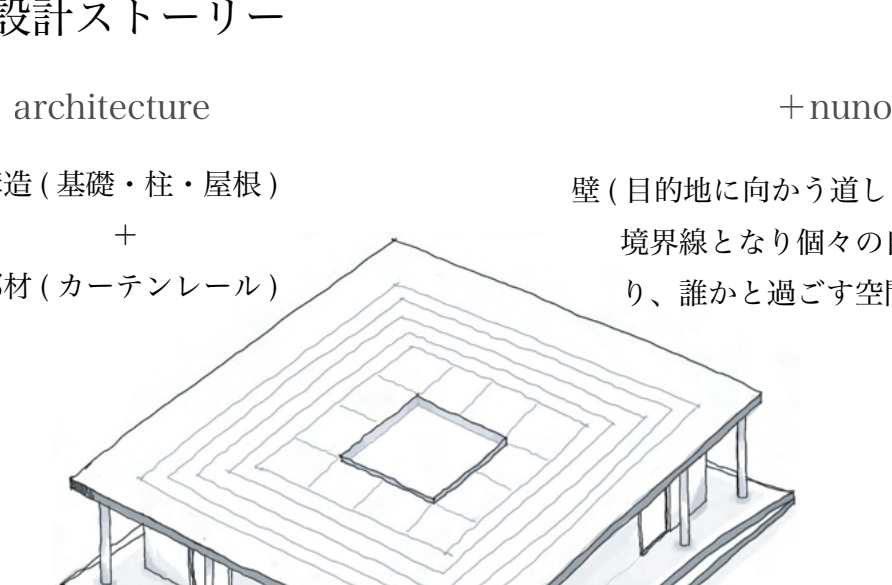
構造 (基礎・柱・屋根)

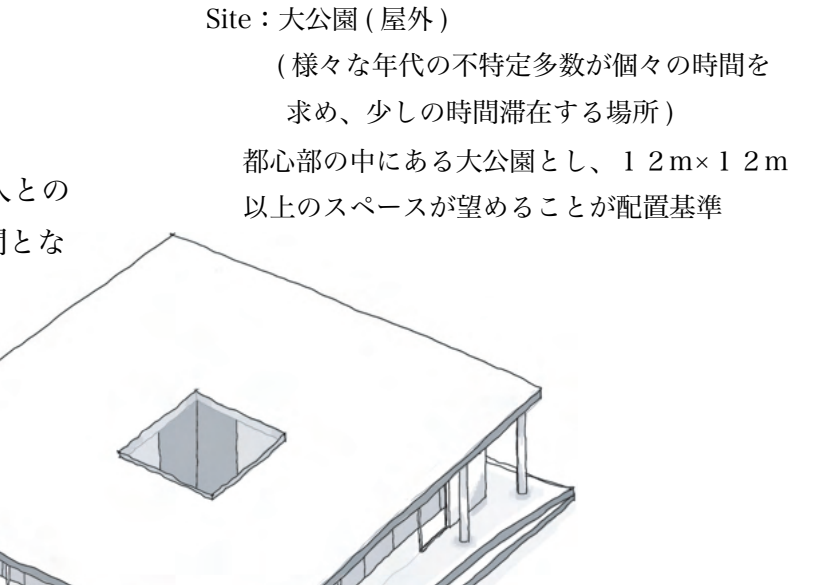
+

部材 (カーテンレール)

+ nuno

壁 (目的地に向かう道しるべとなり、人との境界線となり個々の自分だけの空間となり、誰かと過ごす空間となる)





Site : 大公園 (屋外)
(様々な年代の不特定多数が個々の時間を求め、少しの時間滞在する場所)
都心部の中にある大公園とし、1.2m×1.2m以上のスペースが望めることが配置基準

Program

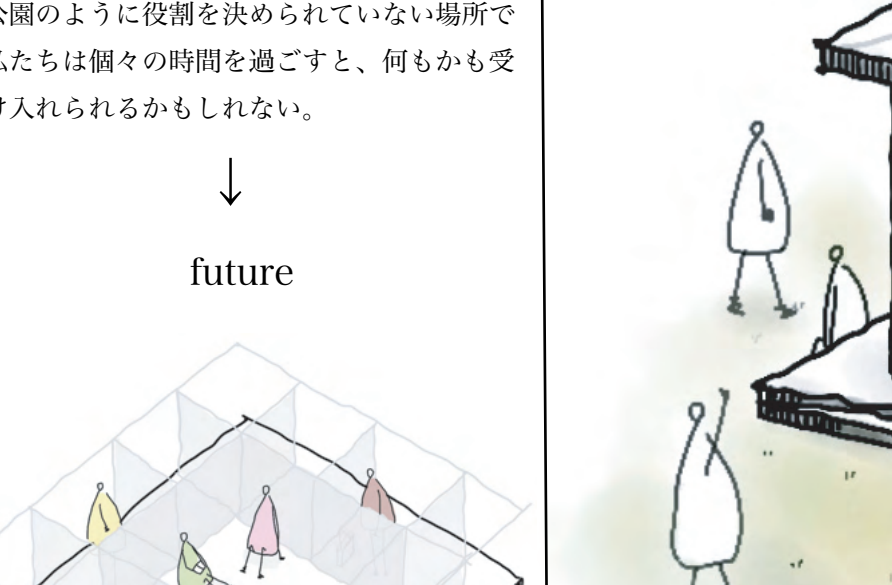
now



人それぞれ違う特性を持ち、互いに受け入れることの難しさを抱えながら過ごしている。公園のように役割を決められていない場所で私たちは個々の時間を過ごす、何もかも受け入れられるかもしれない。

↓

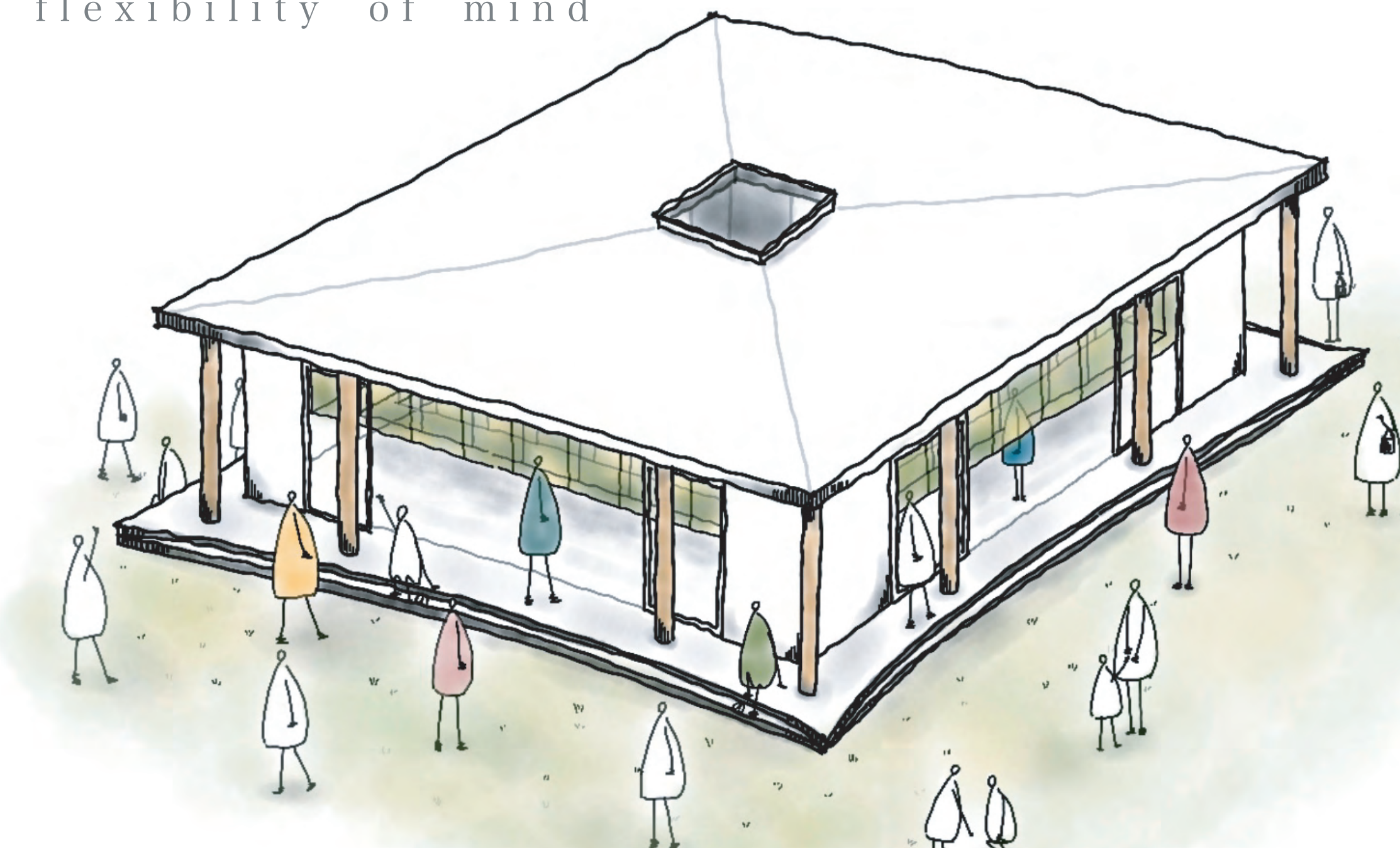
future



一つの大きな空間内に様々な布空間を用意する。時を過ごす中で他者との心地よい距離感を掴みながら、他者の価値観に寄り添う布建築空間。

e 心の柔軟性

flexibility of mind



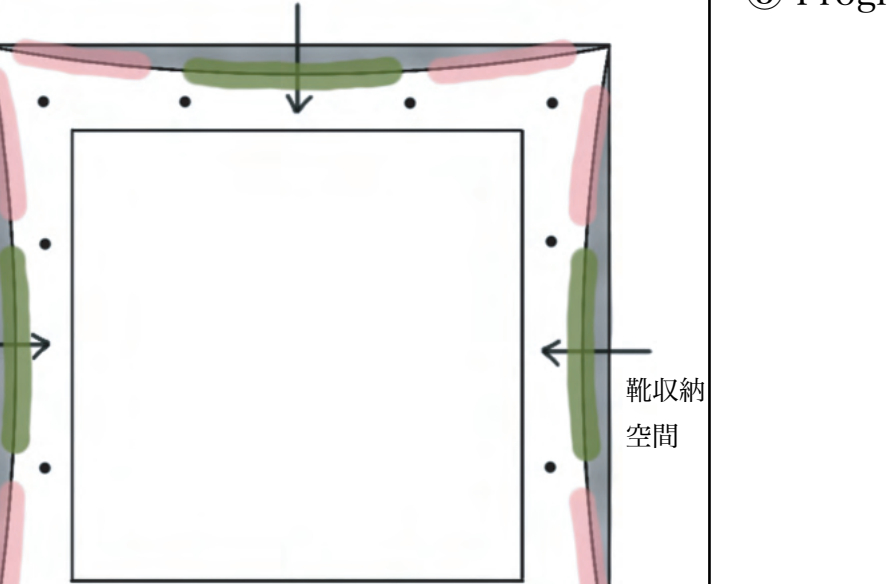
② Program plan

空間の出入口前空間



靴収納空間

中の空間へと入る人たちが集まる場所



カーブ状の平面が中に入る人を中央へと引き寄せる

公園のベンチのように少しの休息を取れる場所

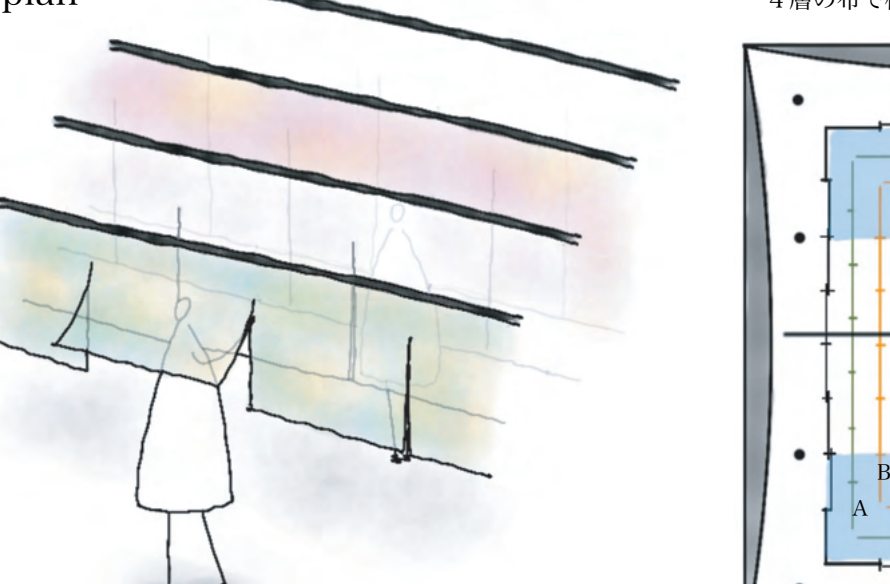
engawa space (休息スペース)

建物の四方の橋の空間では縁側のように休息スペースとしての要素が街に開く。腰を下ろし、不特定多数が個々の時間を過ごすこの場所では、誰も気に留めないくらいに自分の時間が流れている。

③の布の層の初めの位置に立つ時に、奥行き布高さ： を持たせながら空間の先を想起させるように、徐々に布の高さが奥に向けて低くなる。

③ Program plan

4層の布で構成



布同士が集まる結合場所 人が集まりにくい陰の空間

布の層を一つずつめぐり前へと進む。透明度の高い布が重なり合う空間は、厚く先の空間が分からない。しかし進むにつれて空間が姿を現す。ここでは布に触れ布の層をかき分けて歩いて行く。

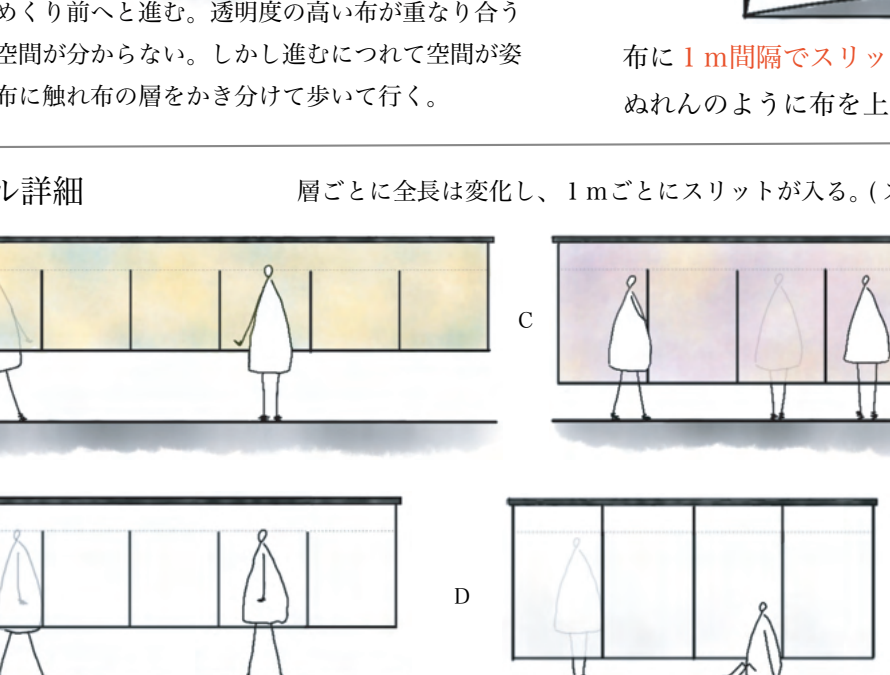
布に1m間隔でスリットを設ける

ぬれんのように布を上げ進んでいく

等間隔に布を吊っている

テキスタイル詳細

層ごとに全長は変化した、1mごとにスリットが入る。(スリットは上部から30cm下から)



A → 7m B → 6m C → 5m D → 4m

1スリットサイズ

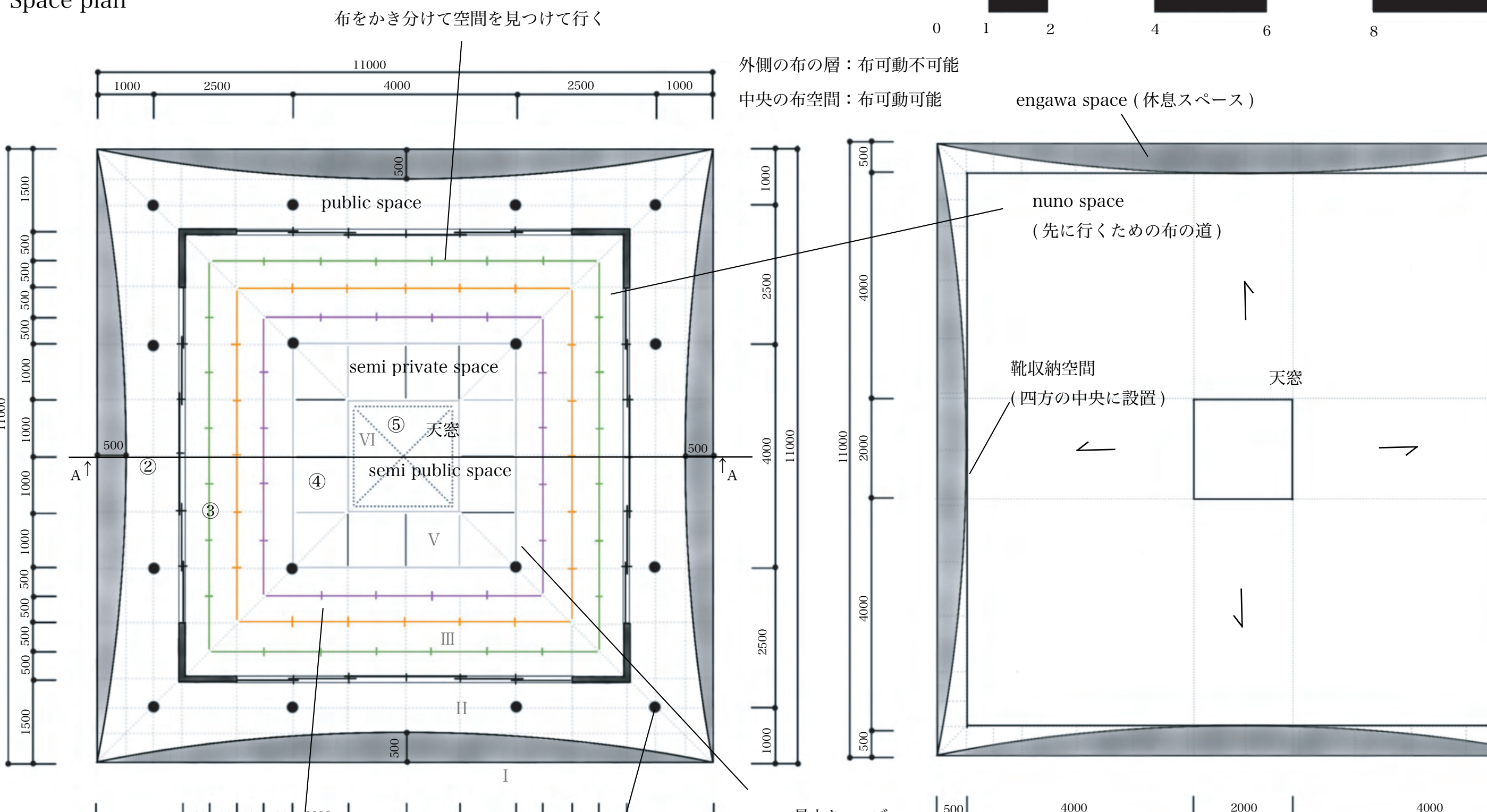
A=W: 100×H: 120 B=W: 100×H: 140 C=W: 100×H: 160 D=W: 100×H: 180

A: シャンブレオーガンジー (黄色・緑) B: オーガンジー (透明白) 2枚重ね C: シャンブレオーガンジー (オレンジ・紫) D: オーガンジー (白)

公園の芝生を基調とした緑から始まり、透明・黄・紫といった色彩が空間に入り、黄色がそれぞれの布の繋がりとなる。

Space plan

4層となる布の層の布をかき分けて空間を見つけて行く



外側の布の層：布可動不可能

中央の布空間：布可動可能

engawa space (休息スペース)

nuno space (先に行くための布の道)

靴収納空間 (四方の中央に設置)

天窓

public space

semi private space

semi public space

nuno 最小キューブスペース (変化可能)

遠くから見ると壁のように分厚く感じていたものが、近づくにつれ柔らかく心地良いものに変化する

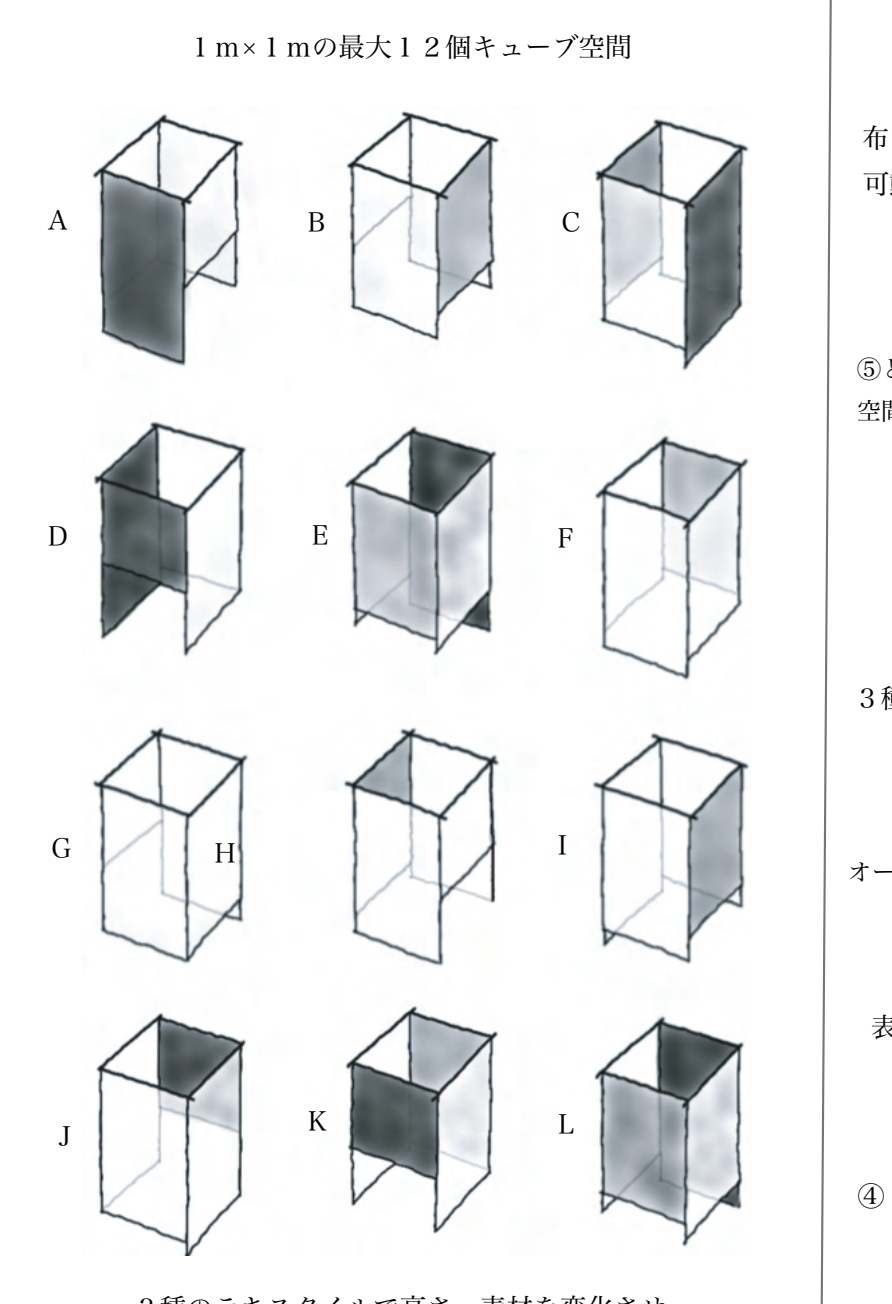
柱が建物全体を支え、人と人との距離を適度な間隔にする

四方の中央部分から出入りが可能

大布建築空間の中に4つのスペースが存在する。四方のどこから入っても同じ空間が待ち受けながら、陽と陰の空間が混在する。

④ Program plan

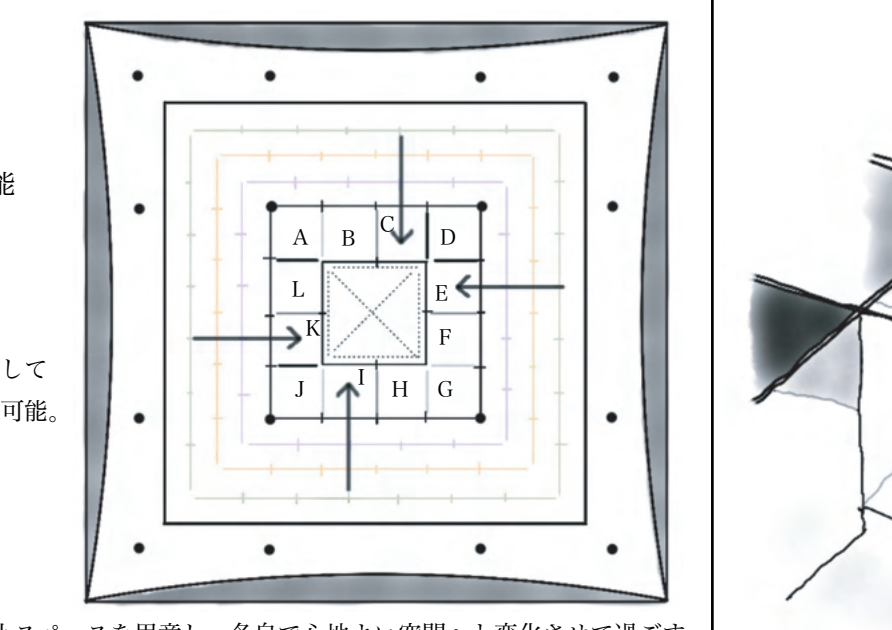
1m×1mの最大12個キューブ空間



布は可動可能

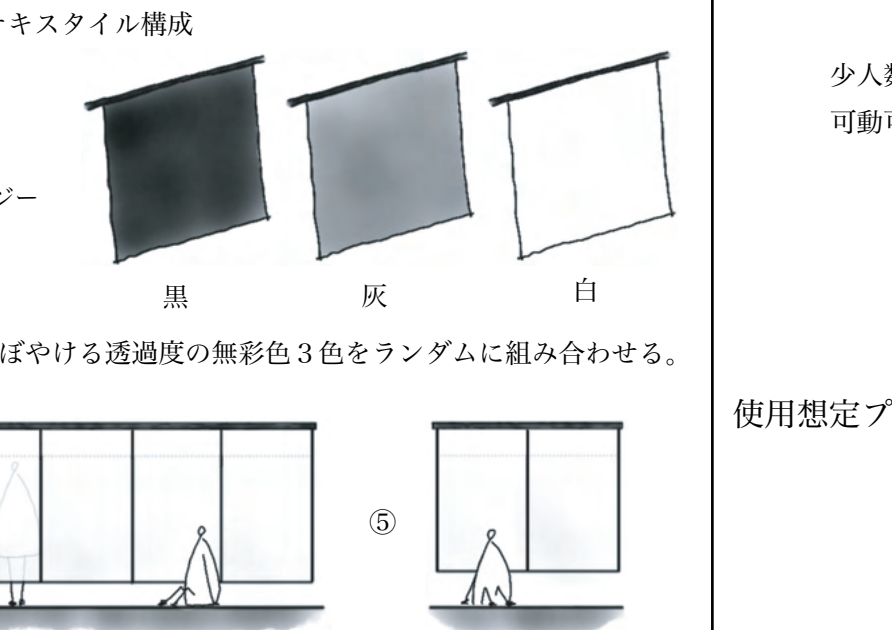
⑤と合体して空間使用可能。

自由に空間を仕切り開け空間を作ることが出来る



最小スペースを用意し、各自で心地よい空間へと変化させて過ごす。

3種のテキスタイル構成



オーガンジー

黒 灰 白

表情がばやける透過度の無彩色3色をランダムに組み合わせる。

④と⑤

④=W: 100×H: 180 ⑤=W: 100×H: 160

3種のテキスタイルで高さ・素材を変化させ、12種類の違いがある空間スペースを設ける

⑤ Program plan

2m×2mのキューブ空間



上部に天窓を設けているため、光が降り注ぐ

布は可動可能

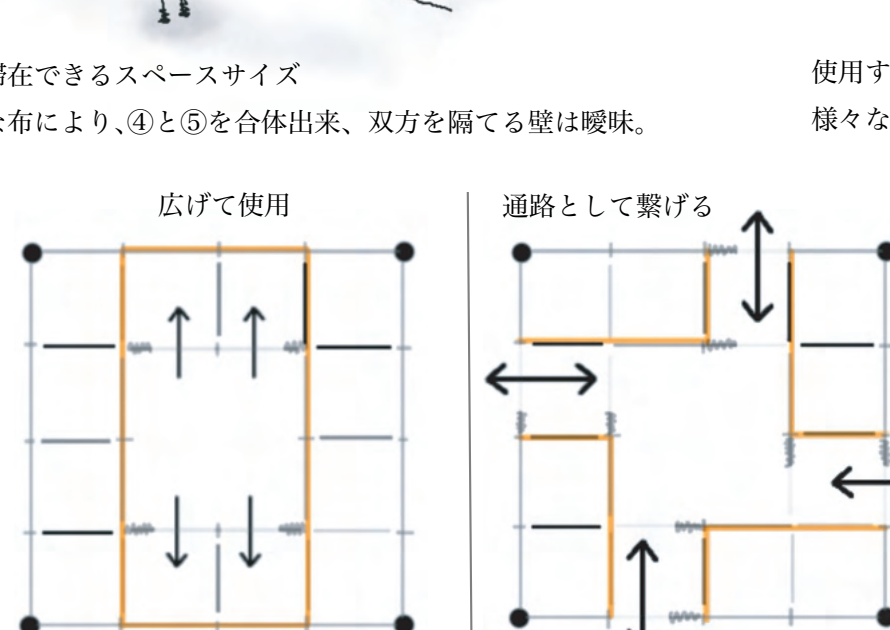
4～6人利用想定

使用する人それぞれによって布空間が変化し、様々な空間パターンが生まれる。

少人数が滞在できるスペースサイズ

可動可能な布により、④と⑤を合体出来、双方を隔てる壁は曖昧。

使用想定プラン



④は semi private space ⑤は semi public space

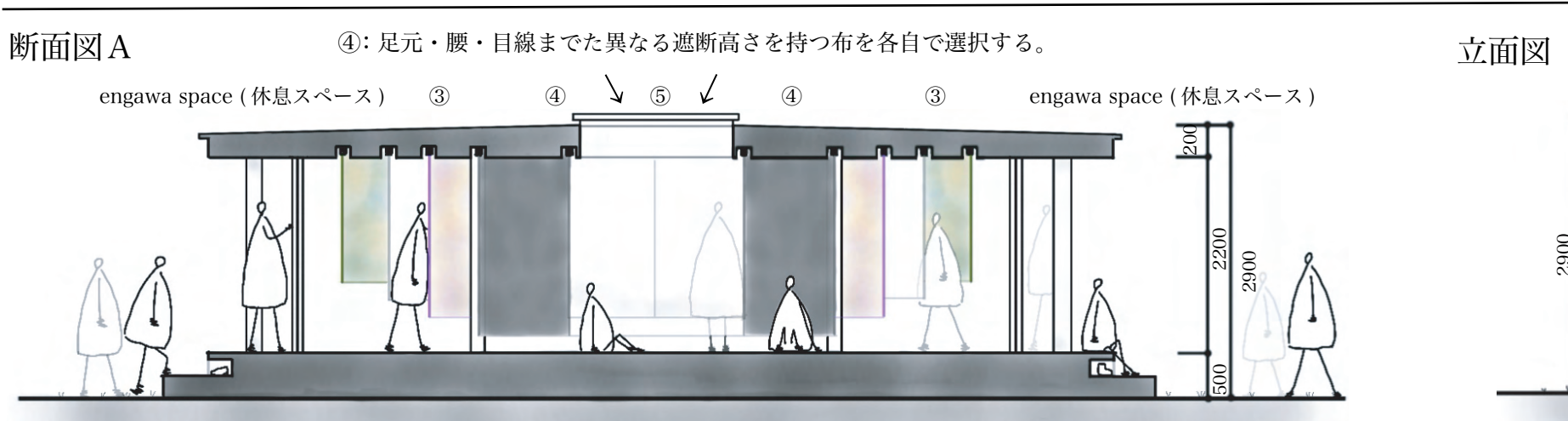
⑤

⑤=W: 100×H: 160 オーガンジー白使用

色彩：外部から腰上あたりまでの情報を遮断する高さとし、空間の影響を受けさせない白を使用。

断面図A

④：足元・腰・目線までの異なる遮断高さを持つ布を各自で選択する。

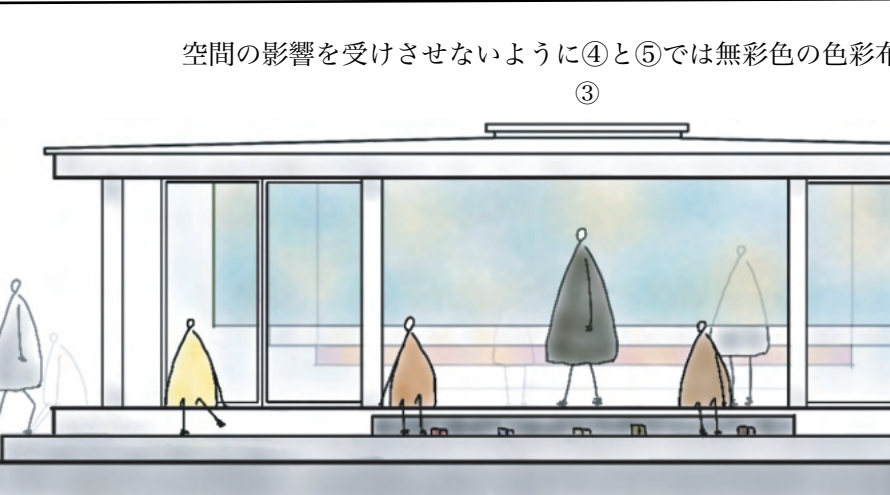


engawa space (休息スペース) ③ ④ ⑤ ④ ③ engawa space (休息スペース)

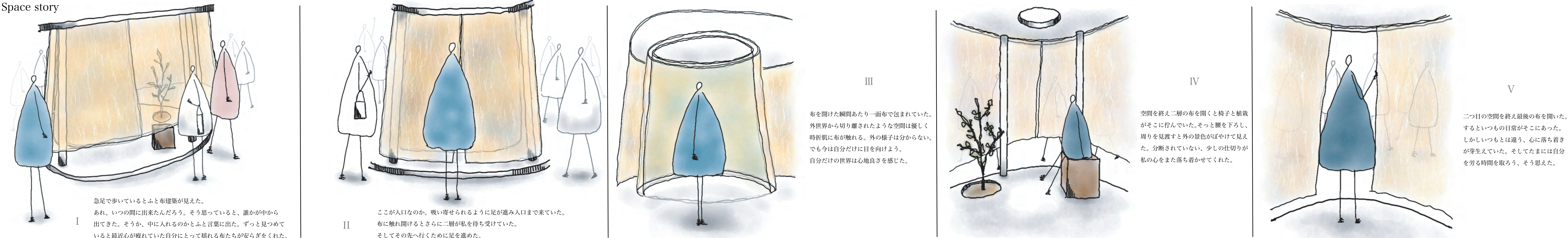
四方のどこから出入りしても同じ順番の空間要素に出会える。

立面図

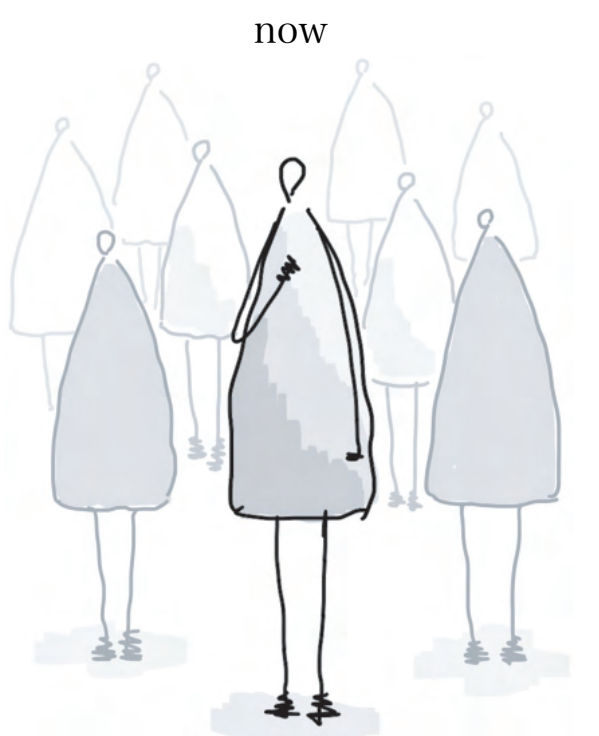
空間の影響を受けさせないように④と⑤では無彩色の色糸布を使用する。



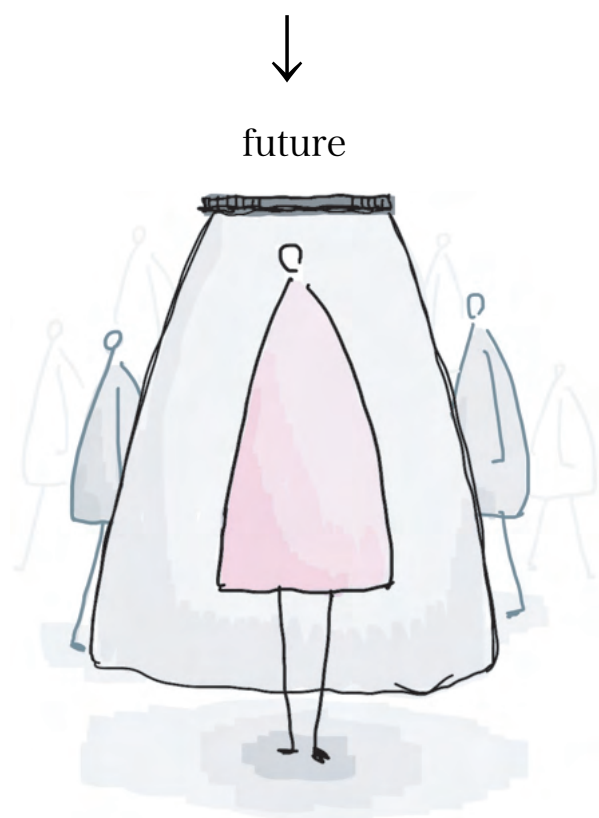
engawa space (休息スペース)



Program

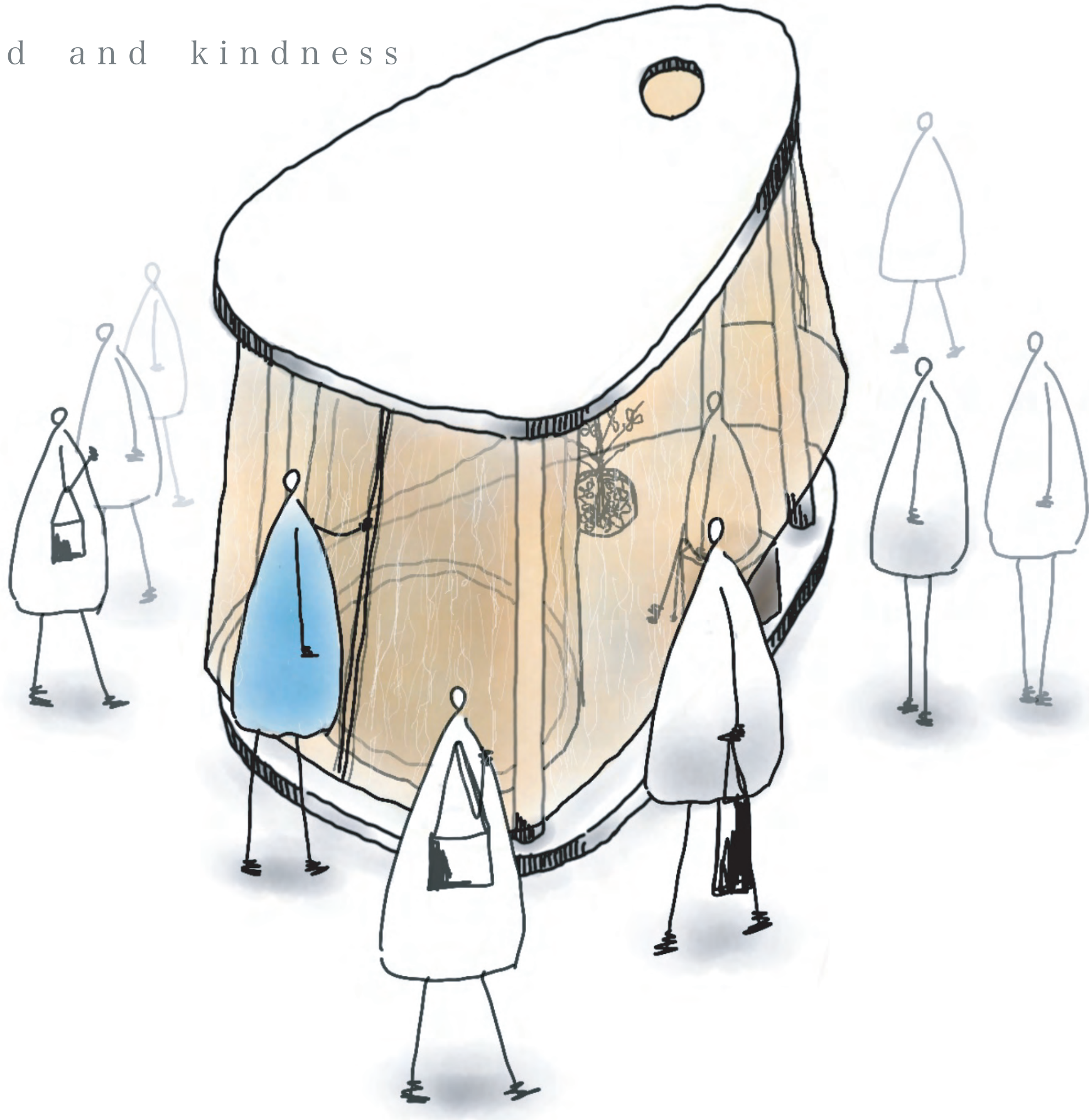


not
不定多数の人が行き交う混在の空間。
誰かを待つために立ち止まる人もいれば、
目的地を急ぎ進む人もいる。
そんな中で一人心が緩れ立ちすくんでいる。



future
街中に自身の身体を包む布建築空間を配置。
aとは異なる布や空間構成とし、空間内に二
つの空間が存在しながら、外世界との距離を
保ち心身共に休息を取りながら、自身に優し
さを向ける布建築空間。

f 自己と優しさ
seld and kindness



設計ストーリー

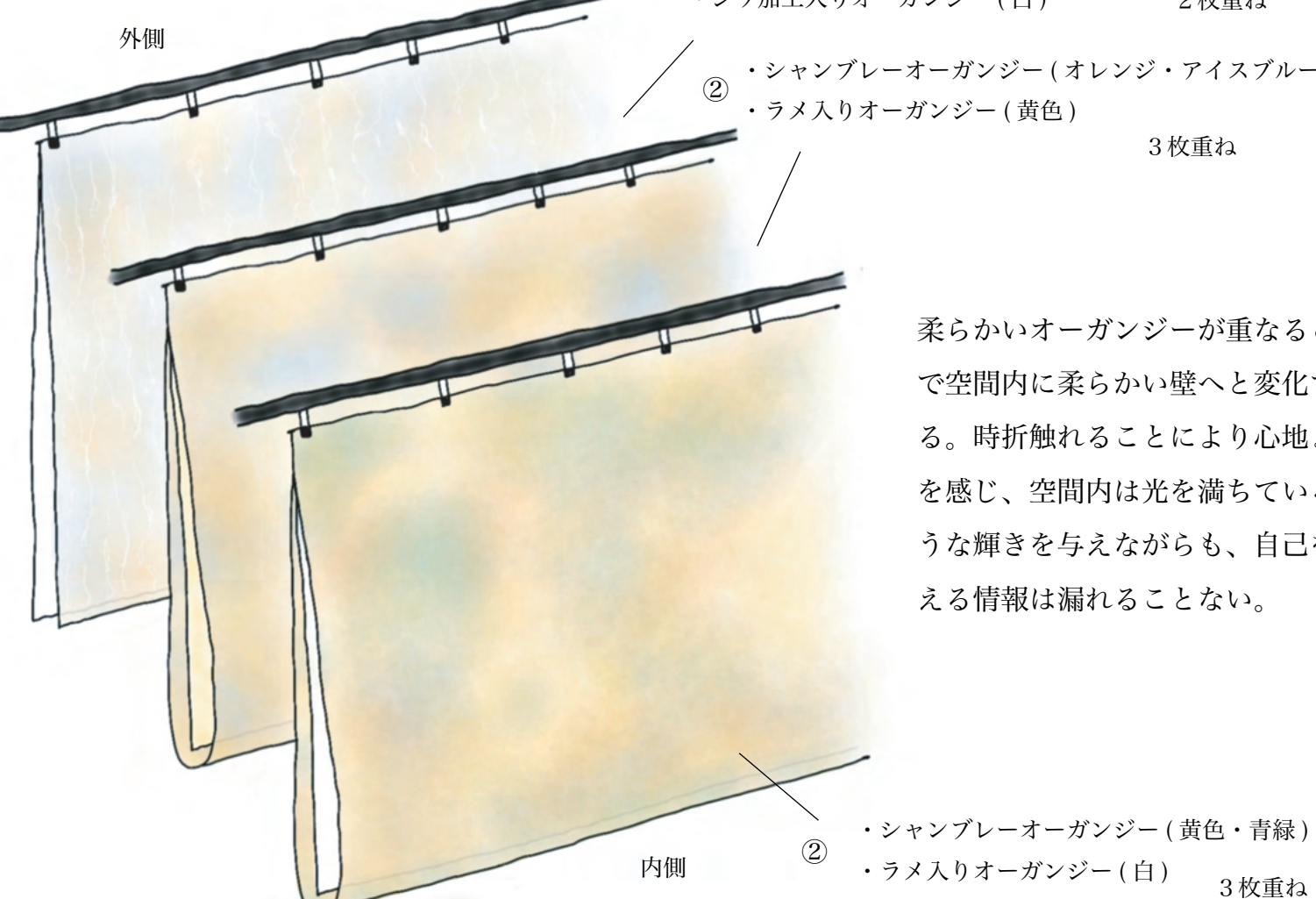
architecture : 構造 (基礎・柱・屋根)
部材 (カーテンレール)

nuno : 外壁 (空間認識・外世界と柔らかく隔てる)
内壁 (自分の世界を保つ)



site : 駅の改札口前
(立ち止まる人・進む人が混在し一時的に集まる空間) 都心部に位置する 10 万人 / 日
以上の利用駅とし、通行の妨げとならないように改札口から少し距離を保った人々が
待ち合わせ場所とする 3 m × 3.5 m スペース確保が望めることが配置基準。

テキスタイル詳細



布の高さ

- ① 外側のテキスタイルでは緩く外世界との境界線となりうる役割とし、中の状態をばやけさせながらも存在確認を行うことが出来る。①よりもテキスタイルの透過度を高くさせ、足元上部の入口は 6 0 c m 上げ、出口付近で着席状態でも表情を漏れさせない高さとする。
- ② 内側の布空間内では直立状態で過ごすため、休息スペースの役割と共に膝以上上の情報を外部に漏らさないようにする。入口付近の足元上部は 2 0 c m 上げ、天井高に合わせて布の高さも変化するため、出口にかけて少し高さが上がる。

布の選定理由

- ① 外側のテキスタイルを外世界との境界線と共に、内と外との繋がりを持たせるため暖色となる (オレンジ・アイズブルー) 構成の明るい色彩のオーガンジーを使用。また少しの境界線となる強調を入れるためシワ加工のテキスタイルを中に入れ、遠くから見た時により薄い壁を表現。
- ② 休息スペースとして少しの時間を過ごすため 3 枚重ねの 2 層構造とする。肌に触れる内側を (黄・青緑) といった明るさと癒し効果のある色彩を用いて、柔らかな壁を重ねることで、内側に向けて柔軟な壁が身体を包む。

立面図

